

富田林市埋蔵文化財調査報告15

中佐備須恵器窯跡発掘調査概要

1987.3

富田林市教育委員会

は　じ　め　に

富田林市は、大阪府の南東部河内平野の南縁に位置し、古く縄文時代から先人の残した文化遺産が数多く存在しています。

本書に報告する中佐備須恵器窯跡は、市の東南部、宇奈田川をさかのほった谷あいにあり、大阪南部の須恵器の大規模生産地帯である陶邑古窯址群とは約7kmの距離です。古墳時代中期末から後期初頭の時期に、独自の生産を行っていたことが調査成果からうかがい知ることができます。本書が須恵器生産研究の一助となることを期待するものです。

調査の実施にあたってご指導ならびにご協力いただきました各位に深く感謝申し上げます。

1987年3月

富田林市教育委員会

教育長 福田治平

例　　言

- 1、本書は、富田林市教育委員会が昭和61年度に国庫および府費の補助を受け、発掘調査を実施した中佐備須恵器窯跡の概要報告書である。
- 2、調査は、富田林市教育委員会社会教育課 中辻亘・栗田薰を担当者とし、昭和61年4月1日に着手し、昭和62年3月31日に終了した。
- 3、調査を実施するためにあたり、下記の諸氏から格別の助言や援助を受けた。記して感謝の意を表します。

北野耕平（神戸商船大学教授・富田林市文化財調査会委員）・中村浩（大谷女子大学）・中井貞夫・芝野圭之助・奥和之・大谷治孝・上林史郎（大阪府教育委員会）・小林義孝（泉北考古資料館）・尾谷雅彦（河内長野市教育委員会）・竹谷俊夫（埋蔵文化財天理教調査団）
- 4、本書の執筆は、各々文末に記すものがあたった。
- 5、本書の編集は、中辻と栗田が中心に行った。また、製図については栗田が行った。

調査参加者

浅野雅子・石上達也・石田京一・岩子苑子・岡嶋智美・奥田正巳・尾下義雄・笠井理一・北国友一・坂口友美・阪本房治・杉山泰敏・田川友美・仲井和代・中川一美・中川美智代・西尾彰夫・沼間恵子・林信吉・端山誠一・一柳和弘・平井陽一・福田恵子・木並俊哉・前野美智子・三浦洋一・三崎政子

本文目次

はじめに

例　　言

	頁
I 昭和61年度調査の概要	1
II 位置と環境	3
III 遺構	4
IV 出土遺物	7
Vまとめ	45

表　　目　　次

表1 発掘調査一覧表	1
表2 器種別一覧表	7
表3 杯蓋分類表	8
表4 杯身分類表	11
表5 ヘラ記号一覧表	15
表6 有蓋高杯分類表	17
表7 無蓋高杯分類表	20
表8 越分類表	21

挿　　図　　目　　次

挿図1 中佐備須恵器窯跡周辺地形図	2
挿図2 調査区位置図	4
挿図3 調査区平面図	5
挿図4 灰原断面図	6
挿図5 杯蓋	9
挿図6 杯身	12
挿図7 同心円文スタンプ拓影	13
挿図8 ヘラ記号拓影	14
挿図9 高杯蓋・有蓋高杯・無蓋高杯・脚台・小型台付壺	16
挿図10 無蓋高杯・壺蓋・小型有蓋短頸壺・小型短頸壺	19
挿図11 越・直口壺・壺体部・椀	23
挿図12 短頸壺・小型広口壺・有蓋壺・鉢	26
挿図13 広口壺	27
挿図14 広口壺・注口土器・器台	29
挿図15 器台・壺・提瓶	31
挿図16 提瓶・把手	33
挿図17 売	35

挿図18	甕	36
挿図19	甕	37
挿図20	甕	38
挿図21	四足を持つ動物	39
挿図22	甕	40
挿図23	甕	41
挿図24	甕	42
挿図25	土錘	43
挿図26	弥生土器	43

図 版 目 次

- 図版 1 (上) 調査地遠景 南東から
 (下) 調査地近景 北東から
- 図版 2 (上) 灰原全景 南東から
 (下) 灰原全景 北東から
- 図版 3 (上) 灰原遺物出土状況 東から
 (下) 灰原遺物出土状況 北から
- 図版 4 (上) 灰原遺物出土状況 南から
 (下) 灰原遺物出土状況 東から
- 図版 5 (上) 灰原遺物出土状況 南から
 (下) 灰原遺物出土状況 東から
- 図版 6 (上) 灰原断面 東から
 (下) 灰原断面 東から
- 図版 7 (上) 灰原完掘後全景 東から
 (下) 灰原完掘後全景 西から
- 図版 8 出土遺物 (杯蓋・杯身)
- 図版 9 出土遺物 (杯身)
- 図版10 出土遺物 (杯身)
- 図版11 出土遺物 (杯身・高杯蓋・有蓋高杯)
- 図版12 出土遺物 (有蓋高杯・無蓋高杯・脚台)
- 図版13 出土遺物 (無蓋高杯)
- 図版14 出土遺物 (無蓋高杯・小型台付壺・壺蓋)
- 図版15 出土遺物 (小型短頸壺・魁・直口壺)
- 図版16 出土遺物 (魁)
- 図版17 出土遺物 (短頸壺・有蓋壺・直口壺・鉢)
- 図版18 出土遺物 (広口壺)
- 図版19 出土遺物 (広口壺・注口土器・器台)
- 図版20 出土遺物 (器台・甕・甕 (四足を持つ動物)・土錘・提瓶・甕)
- 図版21 出土遺物 (甕)
- 図版22 出土遺物 (甕)

I 昭和61年度調査の概要

No.	調査期間	遺跡名	位 置	申 請 者	規 模 (m ²)	用 途	備 考
1	61. 2. 17 ～ 4. 28	中佐衛窯跡	佐倉1463-1	箕城 正烈	396	個人住宅	本書掲載
2	61. 4. 21	寺内町遺跡	富田林町22-8	西野 達	426.3	店舗 付 個人住宅	1.5×2m のトレンチを機械掘削し断面観察。地山面で径1m、深さ0.4mの土塁を確認する。
3	61. 4. 23	桜井遺跡	川西町1丁目 7-14	柏本 公義	357.7	個人住宅	0.7×1.6m のトレンチを機械掘削し断面観察。地山面で幅0.3m、深さ0.18mの溝を確認する。
4	61. 5. 1	鶴巣南遺跡	錦糸1080-5, 6	開拓士(高辻 代)石崎勇男	302.9	分譲住宅	1×3m のトレンチを機械掘削し断面観察。遺構、遺物なし。
5	61. 5. 13	中野遺跡	中野町2丁目 148-5	小野 透夫	262.3	個人住宅	1.5×1.9m のトレンチを人力掘削する。地山面で溝、ピットを確認する。
6	61. 5. 15	喜志遺跡	喜志町4丁目 456-1	辻本 雄和	269.7	店舗	2×3m のトレンチを機械掘削し断面観察。遺構、遺物なし。
7	61. 7. 17 ～ 8. 8	中野遺跡 中野北遺跡	中野町1丁目439 -3 他65筆	近畿日本鉄道㈱ 社長上山善紀	8900	鉄道 複線工事	2×10m のトレンチを12ヶ所機械掘削する。ピット、溝、土塁を検出する。
8	61. 10. 1'	中野遺跡	若松町西2丁目 1730-3, 4	太田ユキノ	324	個人住宅	1×2m のトレンチを機械掘削し断面観察。地山面でピットを確認。
9	61. 11. 20	毛人谷遺跡	寿町4丁目182-1	葛原 優彦	573.9	共同住宅	1.5×2m のトレンチを人力掘削する。遺構、遺物なし。
10	61. 11. 25	鎌聖遺跡	鎌聖981	鎌木 隆	178.6	個人住宅	1.5×1.5m のトレンチを人力掘削する。遺構、遺物なし。
11	61. 11. 29	甲田遺跡	甲田333-1	萬田 正樹	478.3	共同住宅	3×5m のトレンチを機械掘削し断面観察。遺構、遺物なし。
12	62. 1. 8	桜井遺跡	桜井町1丁目 3213	巽 正後	512	個人住宅	1.5m×2.5m のトレンチを人力掘削する。石組の溝を検出する。
13	62. 1. 13 ～ 2. 6	喜志西遺跡	喜志町3丁目 929-1	開拓サンプルダ 代山口博昭	1134	店舗	12×12m のトレンチを機械、人力掘削する。男牛小窓の供獻土器を伴う溝を検出する。
14	62. 1. 29	西板持遺跡	西板持340-3	中筋 実	206	個人住宅	1.5×3m のトレンチを機械掘削し断面観察。遺構、遺物なし。
15	62. 2. 9	甲田遺跡	甲田745-1, 2	杉田 正一	1084.5	共同住宅	2×5m のトレンチ 2ヶ所を機械掘削し断面観察。遺構、遺物なし。
16	62. 2. 12 ～	毛人谷城跡	毛人谷687-甲 他18筆	川崎剛児 代川谷 駿	11,298.1	宅地造成	調査中

表1 発掘調査一覧表



插図1 周辺遺跡分布図

Ⅱ 位置と環境

中佐備須恵器窯跡は、市域の東南部にあって、行政区画上大阪府富田林市大字佐備1463-1のみかん園内に所在する。本窯跡は、石川の支流である佐備川と宇奈田川によって狭まれた丘陵の東斜面の谷あいにあって、標高は約100mを測る。本窯跡周辺の東峰地区は古くからみかん栽培が行われ、本市の特産物の一つとなっている。また、清流を保つ宇奈田川によって形成された平地は水田となっており、良質の水稻米が獲れることでも知られている。

次に、中佐備須恵器窯跡周辺の歴史的環境について概観してみたい。

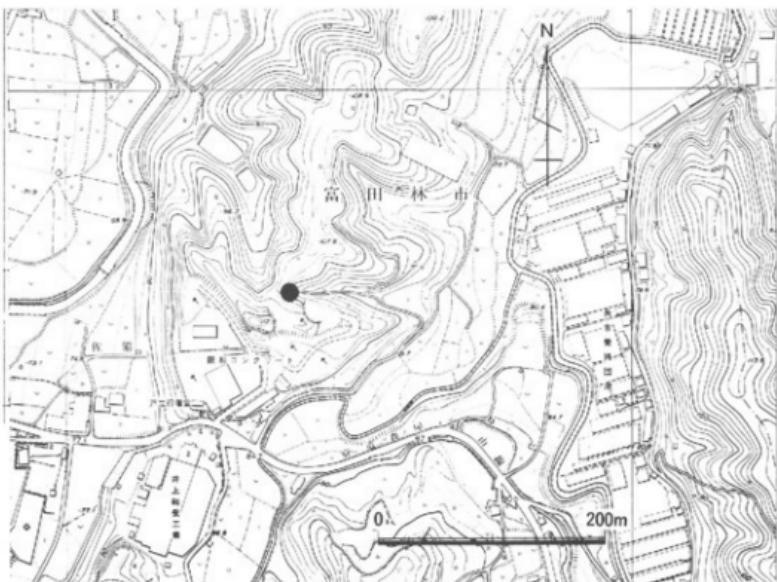
旧石器時代の遺跡は、本窯跡周辺では現在のところ確認できないが、市域中央部の石川西岸の河岸段丘上に遺物が出土するのみである。

縄文時代の遺跡としては、本窯跡から約2km南方の佐備川上流に浦川東遺跡（佐備川遺跡）がある。また、西方約2kmには、縄文時代前期の北白川下層式土器を出土した錦織遺跡および縄文時代晚期の大洞系土器を出土した錦織南遺跡がある。

弥生時代前期の確実な遺跡はまだ発見されていないが、中期になると、石川西岸の河岸段丘上に、喜志遺跡、中野遺跡、甲田南遺跡といった集落跡が確認されている。後期になると、丘陵部の高地に集落が営まれるようになる。本窯跡北西方約1kmには彼方遺跡があり、北東方約1kmの丘陵上には、南河内地方最大の弥生時代の集落跡である河南町寛弘寺遺跡がある。中期から後期にかけての堅穴住居跡が多数確認されている。佐備川および宇奈田川流域の遺跡からも弥生土器の散布が認められる。

古墳時代になると、丘陵上およびその縁辺部に古墳が繼續して築造される。本窯跡の所在する丘陵の北方には、古墳時代前期に属する板持丸山古墳、板持古墳をはじめ、前期と後期古墳から成る板持古墳群がある。また、北西約1.2kmの丘陵上の石川の平地を眼下に見おろす景勝の地には、中期に属する彼方丸山古墳がある。板持古墳群東方の丘陵上にも前期から後期に属する古墳から成る寛弘寺古墳群があり、これに続いて北方には西大寺山古墳群が連なって、この丘陵一帯が古墳時代には墓域であったことがうかがえる。

歴史時代に至っては、市域には古代寺院および付属の瓦窯跡が広く周知されている。本窯跡北方約3.6kmには、飛鳥時代寺院址である新堂廐寺と近接して付属のオガシ池瓦窯がある。また、南西方約2.6kmには、奈良時代前期から室町時代以降その姿をとどめている龍泉寺が鐵山の東斜面中腹に位置している。境内からは平安時代から鎌倉時代に寺院に直接供給していた瓦窯跡群が確認されている。また龍泉寺周辺は、『太平記』の舞台にもなったところである。このように本窯跡周辺一帯は古代から現代に至るまで人々の生活の痕跡をとどめている。



挿図2 調査区位置図

III 遺構

今回の調査では、残念なことに窯本体は残存していないことが判明し、存在する灰原のみの調査となった。

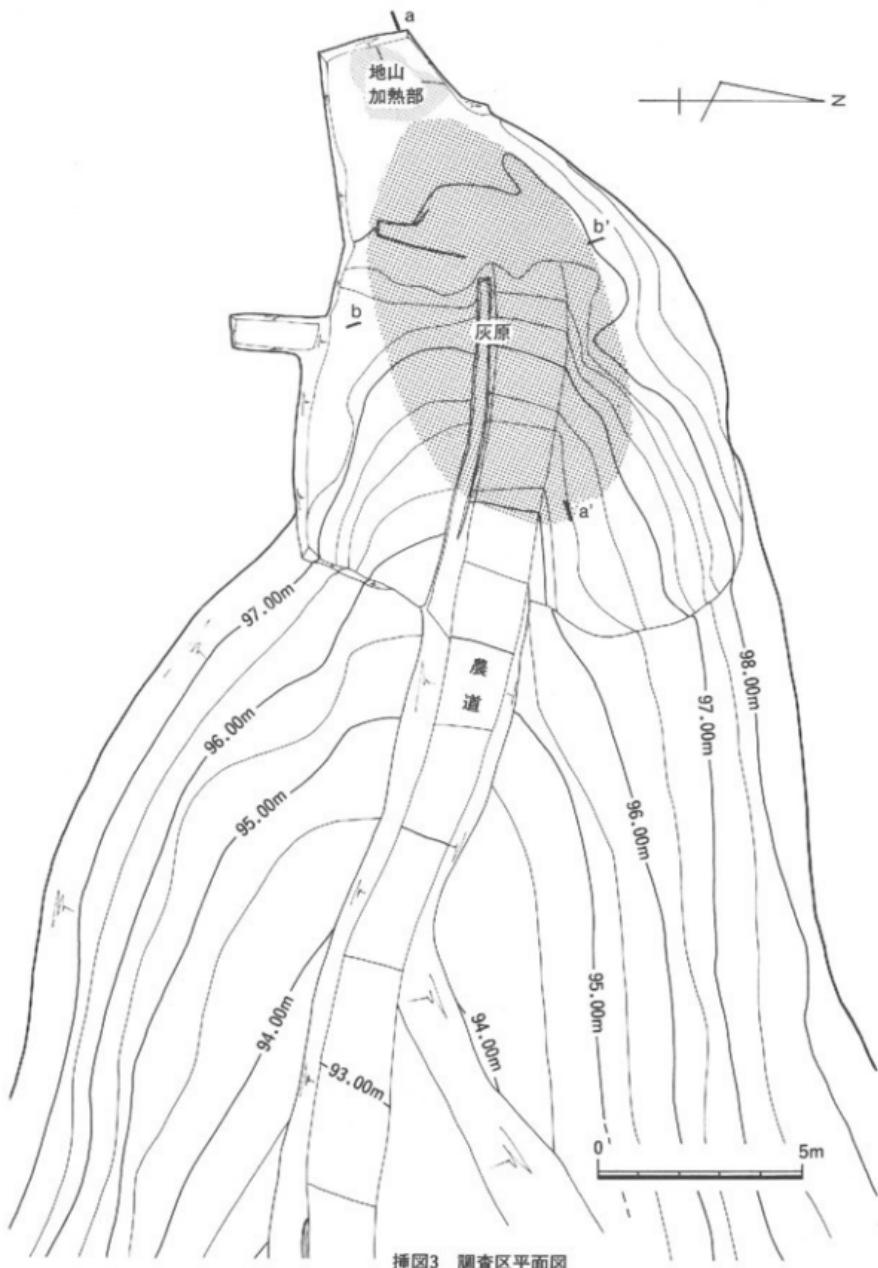
灰原は、丘陵の東斜面の谷あいの奥にあり、農道のコンクリートによってその上面の一部が覆われ、その他みかん園の表土下になっていた。みかん園の表土および農道のコンクリートを取り払うと、南北約5m、東西約10mの範囲に灰原が広がっていることが確認できた。

調査区西端では、灰原に西接して、南北約2m、東西約2mの範囲にわたって、地山面に加熱した部分が認められ、この付近に窯の焚口があったものと推測される。おそらく、窯は、谷の最も奥にあって、焚口方向から見て南西方向に構築された可能性がうかがえる。

灰原断面を観察すると、最も深いところで厚さ約1.6mを測る。上層に比べ下層に顕著に遺物が堆積しており、あわせて、窯体片も多く認められた。

なお、上から順に8層に層位を分け、遺物を取り上げた。

(中辻)



挿図3 調査区平面図



図4 灰原断面図

IV 出土遺物

今回の調査で出土した遺物の大半は須恵器で、コンテナに約150箱であった。須恵器以外に弥生土器、土師器、瓦器、陶器などの七器類と瓦、サヌカイト剥片なども出土しているが、コンテナ1箱にも満たない。以下、須恵器について観察したあと、須恵器以外の遺物についてはその他の遺物の項で取り扱う。なお、須恵器の中に奈良時代のものが1点混じっているが、他の須恵器と時期差がかなりあるので、消失した本窯で焼かれたものとは考えられない。そこでこの須恵器については、その他の項で観察する。

1 須 恵 器

須恵器は遺構の項でもすでに述べたとおり、窯体がすでに消失していたため、窯体から出土したものは全くなく、すべて灰原から出土したものと表採品である。灰原は8層に分かれるが、同一個体片が他層にわたって出土したり、最下層のものと表採品が接合する場合もあることなどから、層毎に時期差を求めるることはできない。

器種は蓋杯、有蓋高杯、無蓋高杯、壺、椀、鉢、小型台付蓋、小型短頸壺、短頸壺、直口壺、広口壺、有蓋壺、注口土器、瓶、提瓶、器台、甕などの容器類の他、土錐が1点ある。各々の出土点数は表2のとおりである。以下、器種毎に観察する。

杯蓋 (1)~(42) (挿図5, 6・図版8)

4,293点出土している。口径から小型・中型・大型の3種類に、また、各々口縁部の長さ（ここでは天井部と口縁部の境に^{註3}ある稜の高さ、すなわち稜高と記述する）からA・B・C・Dの4種類に、さらに、天井部と口縁部の境にある稜の形態からa・b・c・dの4種類に分類できる。分類の基準は次のとおりである。

（小型——口径13cm未満
中型——口径13cm以上、15cm未満
大型——口径15cm以上）

器種	数量
杯 蓋	4,293
杯 身	3,811
高 杯 蓋	73
有 蓋 高 杯	104
無 蓋 高 杯	1,434
瓢	301
椭	1
鉢	11
小型台付蓋	3
壺 蓋	4
小型短頸壺	67
短 頸 壺	27
直 口 壺	3
広 口 壺	31
有 蓋 壺	2
注 口 土 器	1
瓶	1
提 瓶	15
器 台	83
甕	465
土 錐	1

表2 器種別一覧表

- A——稜高が2cm以上（小型のものにのみ適応）
 B——稜高が2cm未満（小型のものにのみ適応）
 C——稜高が2.5cm以上（中型・大型のものにのみ適応）
 D——稜高が2.5cm未満（中型・大型のものにのみ適応）

- a——稜が明瞭で鋭い。
 b——稜が短く、鈍い。
 c——稜が鈍く、屈曲具合でからうじてわかる程度。
 d——稜がなく、沈線をめぐらせることによってそれとわかる。

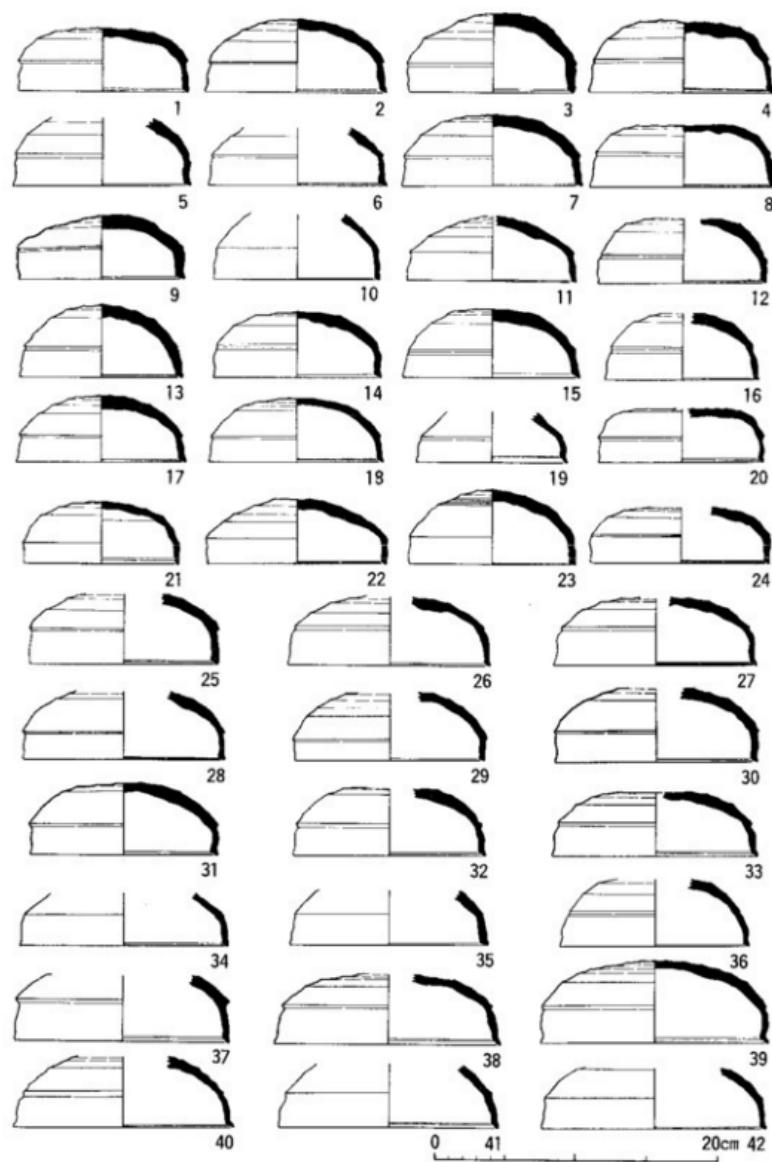
以上の分類基準に従って分類すると表3のようになる。

タイプ		点 数	比 率 (%)	
小 型	a	48	4	
	b	712	61	
	c	249	22	
	d	150	13	79
中 型	a	12	3	
	b	218	59	
	c	86	23	
	d	53	15	
大 型	C	23	17	
	b	90	66	
	c	14	10	
	d	19	7	17
中 型	a	15	8	
	b	141	72	
	c	26	13	
	d	14	7	
大 型	C	8	21	
	b	30	76	
	c	1	3	
	d	0	0	
大 型	a	5	1	
	b	28	65	
	c	9	21	
	d	1	3	

表3 杯蓋分類表

杯蓋の中では小型のものが最も多く、全体の79%を占める。次いで中型が17%，大型のものは少なく4%だけである。稜高でみると、小型のものは高いものの方が多い76%を占める。それに対して、中型や大型のものは低いものの方が多い、高いものの方が多い少ない。しかし、それほど差はない。稜の形態は全体を通してbタイプが多く、各々のタイプの中でも半数以上を占めている。また、大型Dタイプを除いて、他のタイプの中ではdタイプが最も少ない。次に小型・中型・大型に分けて、各々の在り方をみていく。

小型の杯蓋でAタイプのもの(1)～(16)は稜高約2.1～2.2cmのものが最も多く、最も高いもの(8)で2.45cmをはかる。Bタイプのもの(17)～(24)は稜高約1.8cm前後のものが多く、最も低いもの(21)は1.5cmである。A・B両



挿図 5 杯 蓋

タイプとも稜の形態毎の比率はほとんど変わらない。また、天井部や口縁部の形態もタイプ別による規則的な差異は認められない。全体を通してみれば、天井部は比較的高くて丸いものが多く、偏平で平らなものが少ない。口縁部は垂直に下るものがほとんどなく、大半が開いている。ただし、開き方の形状は数種類認められる。すなわち、ストレートに外傾して聞くもの、天井部の延長のようになだらかなカーブを描いて大きく聞くもの、一端内湾したのち、口縁端部近くで外反するもの、天井部の延長のようになだらかなカーブを描いて大きく聞いたのち、さらに口縁端部近くで外反するものなどがある。しかし、その中では、聞く度合に差があるものの、ストレートに外傾して聞くものが最も多い。口縁端部の処理の仕方もタイプ毎に差異がなく、大半が内傾の度合に差があるものの、内傾して段もしくは凹面をなすものが多い。他に、わずかであるが内傾して平面をなすものもある。調整技法も同様にタイプ毎に差異がなく、範囲に差異があるものの、天井部外面は回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整の行なわれているものが多い。なお、ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわりが多い。その他に天井部外面にカキ目調整を施したもの²³⁾、天井部内面に回転ナデ調整の上から不定方向のナデ調整を付加したもの²¹⁾、天井部内面に同心円文スタンプが残るもの（挿図7）が少量であるが認められる。

中型の杯蓋でCタイプのもの²⁵～²⁷は稜高約2.6cmのものが多く、最も高いもの²⁶（²⁷）で2.75cmをはかる。Dタイプのもの²⁸～³⁰は稜高約2.2～2.3cmのものが多く、最も低いもの²⁹は1.6cmである。Cタイプではb・a・c・dの順に点数が少なくなるのに対して、Dタイプではb・c・a・dとなり、aタイプとcタイプの順序が入れ替っている。ただし、bタイプ以外は点数が少ないので、資料的価値は低いかもしれない。天井部や口縁部の形態、口縁端部の処理の仕方、調整技法などは小型のものとほとんど変わらない。

大型の杯蓋でCタイプのもの³¹～⁴⁰は稜高約2.6cmのものが多く、最も高いもの³⁷で2.95cmをはかる。Dタイプのもの⁴¹～⁴²では最も短いもの⁴²で2.2cmをはかる。Cタイプではb・a・cの順に点数が少くなり、dタイプは全くない。Dタイプではb・c・d・aの順で、bタイプ以外の在り方は違っている。ただし、中型と同様にbタイプ以外は点数が少ないので、順序についての資料的価値は低いかもしれない。天井部や口縁部の形態、口縁端部の処理の仕方、調整技法などは、中型と同様に小型のものとほとんど変わらない。

杯身^{(43)～(78)}（挿図6・図版9,10,11）

3811点出土している。口径から小型・中型・大型の3種類に、また、たちあがりの高さからA・Bの2種類に分類できる。ただし、^{(43)～(46)}の杯身は特殊な例なので除外する。また、口径から分類した小型・中型・大型は杯蓋の小型・中型・大型に各々対応する。分類の基準は次のとおりである。

小型——口徑11cm未満
 中型——口徑11cm以上, 13cm未満
 大型——口徑13cm以上

A——たちあがり高が1.5cm以上
 B——たちあがり高が1.5cm未満

タイプ	点数	比率(%)	
小 型 A	139	227	61
中 型 B	88		25
中 型 A	495	662	75
中 型 B	167		25
大 型 A	29	30	97
大 型 B	1		3

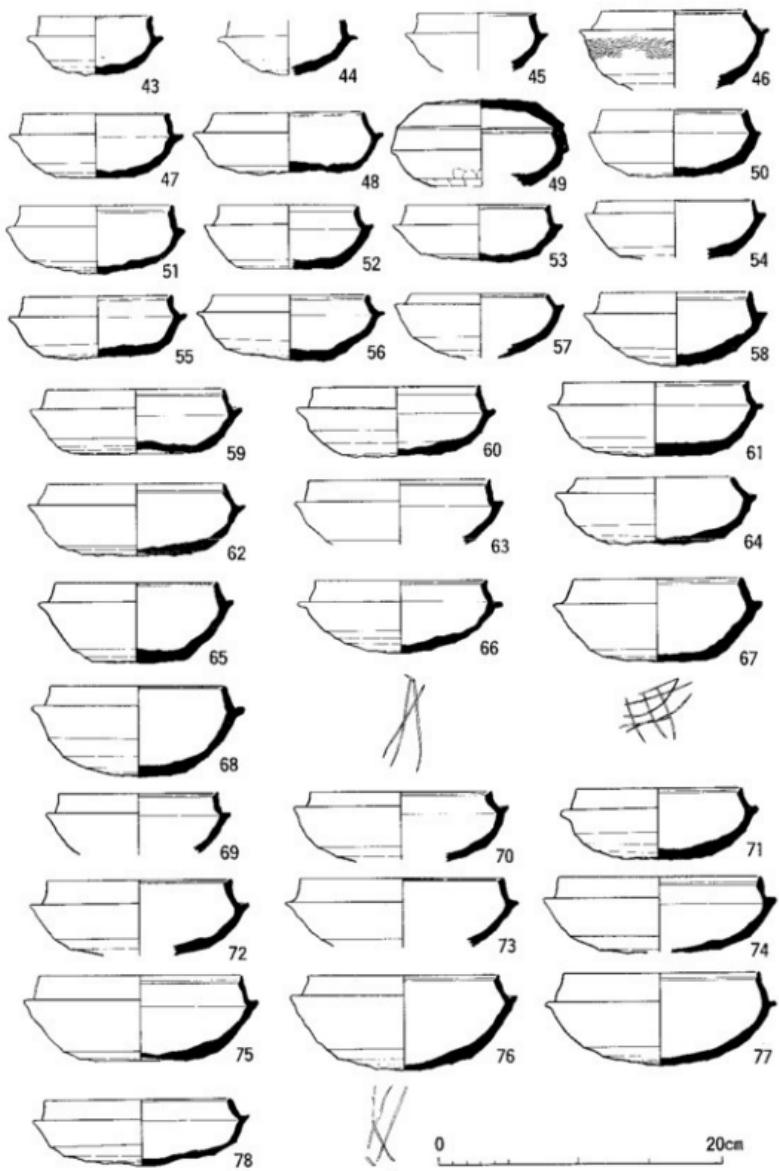
表4 杯身分類表

以上の分類基準に従って分類すると表4のようになる。

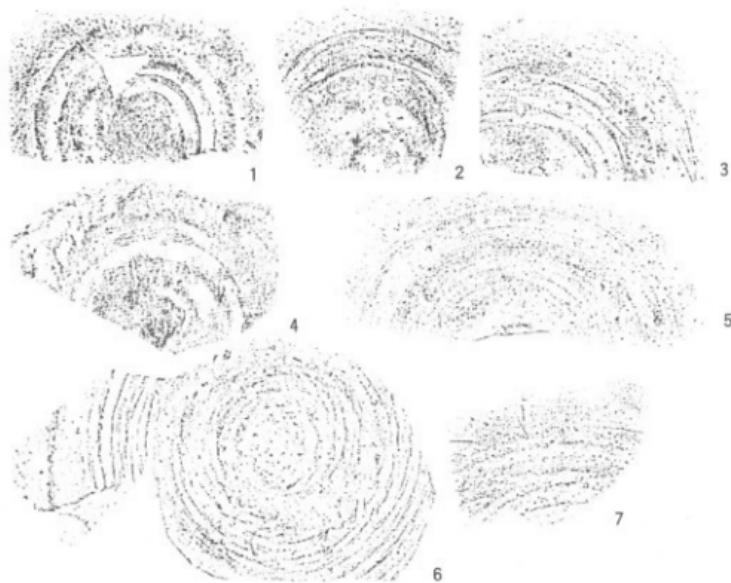
杯身の中では中型が最も多く、全体の72%を占める。次いで小型で25%, 大型のものは少なく3%だけである。この結果は対応するはずの杯蓋と異なっている。次にたちあがり高でみると、比率に差があるもののすべてAタイプの方が多い。次に小型・中型・大型に分けて各々の在り方をみていく。

小型の杯身でAタイプのもの(47 48 50 51)はたちあがり高が約1.5cmをはかるものが多い。Bタイプのもの(49 52~58)はたちあがり高が約1.4cmをはかるものが多い。最も低いもの(57)は0.9cmである。A・B両タイプとも口縁部や底部の形態はタイプ毎の規則的な差異は認められない。全体を通してみれば、口縁部は垂直にたちあがるものが多くなく、すべて内傾する。ただし、内傾の形態は数種類認められる。すなわち、ストレートに内傾するもの、大きく内傾したのち、直立するもの、大きく内傾したのち、反りかえってたちあがるもの、一端内湾したのち、角度をかえて内傾気味にたちあがるものなどがある。その中でもストレートに内傾するものがほぼ半数を占める。他の形態はほぼ同じ割合で認められる。口縁端部の処理の仕方もタイプ毎に差異がなく、大半が内傾して段もしくは凹面をなす。他に内傾して平坦面をなすものも少量であるが認められる。受部は水平にのびるものと斜め上方にのびるものがある。底部の形態もタイプ毎の差異がなく、浅いけれども丸みをもつものが多い。他に深く丸みをもつものも認められる。調整技法も同様で、A・B両タイプとも底部外面は回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整の行なわれるものが圧倒的に多い。なお、ヘラ削り時のロクロワの回転方向は左まわりが多い。その他に底部内面に同心円文スタンプの残るもの(50・挿図7-1)が少量であるが認められる。

中型の杯身でAタイプのもの(59~63 65~69)はたちあがり高が約1.6cmをはかるものが多い。Bタイプのもの(64 70 71)はたちあがり高が1.4cmをはかるものが多く、最も低い70で1.05cmをはかる。中型の杯身も口縁部の形態、口縁端部の処理の仕方、受部の形態、底部の形態、調整技法は小型のものとほとんど変わらない。ただし、64は口縁部の形態が小型のものや大型のものにみられないほど内傾して、その上、口縁端部も丸くおさめていることなど他と少し



挿図 6 杯身



插図7 同心円文スタンプ拓影

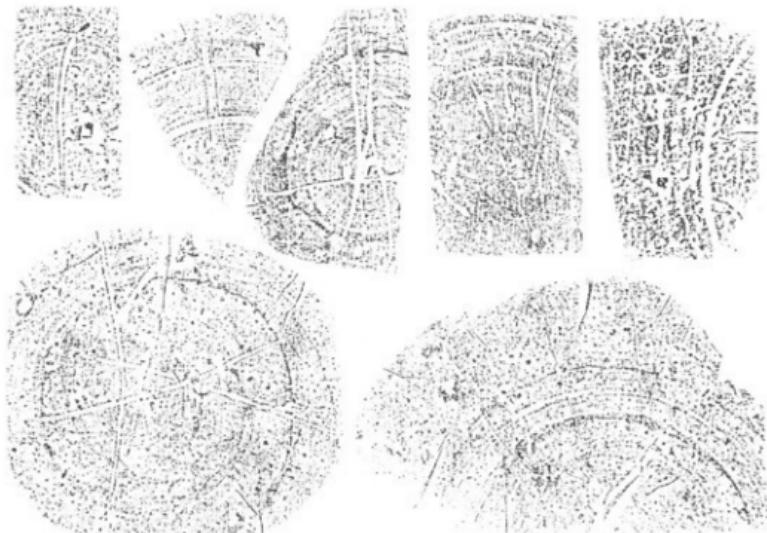
様相が違っている。

大型の杯身でAタイプのもの 72~77 はたちあがり高が1.8cm前後をはかるものが多く、最も高い77で2.05cmをはかる。Bタイプのもの 78 は図示したものだけで、たちあがり高は1.25cmである。大型の杯身も口縁部の形態、口縁端部の処理の仕方、受部の形態、底部の形態、調整技法は小型、中型のものとほとんど変わらない。

次にタイプ分類しなかった 43~46について記述する。

43~45は口径が8cm前後の極めて小さな杯身である。他の杯身との違いは、極小型ということだけである。口縁部の形態、口縁端部の処理、受部の形態、底部の形態、調整技法、すべて他の杯身とほとんどかわらない。出土点数はこの3点だけである。

46は体部を波状文で飾る杯身である。全体に薄い作りで、口縁部も内傾度が大きく、体部も他の杯身に比べて丸みをもつ。調整技法は他の杯身と同じである。46の他にもう1点、類例がある。



挿図8 ヘラ記号拓影

次に蓋杯にみられる同心円文スタンプについて記述する。

同心円文スタンプは杯蓋では天井部内面、杯身では底部内面に認められる。しかし、同心円文スタンプが残る杯蓋は24点で、全体の0.5%、杯身は17点で、全体の0.4%にしかすぎない。また、杯蓋に残る同心円文スタンプはすべて底部中央部周辺に数回重複して施されている（挿図7-2）。杯身に残る同心円文スタンプは底部中央に単独に残るもの（挿図7-1）が5点あり、他は杯蓋と同じように中央部周辺に数回重複して施されている。この他、杯蓋か杯身か区別のつかない破片に同心円文スタンプの残るものがある。それらは中央に残るもののが3点、中央部周辺に残るもののが158点ある。

なお、他に蓋杯と同じような同心円文スタンプが残る台付の容器（挿図9-103）がある。底部内面に残るが、蓋杯にみられる状況とは違い、中心部だけでなく、周辺部まで広い範囲にわたって施されている（挿図7-6）。

次にヘラ記号について記述する。

ヘラ記号のしるされたものは蓋杯が圧倒的に多く、全体の85%を占める。しかし、蓋杯全体の中で占める割合は杯蓋の中で約4%、杯身の中で約0.7%と少ない。蓋杯以外では高杯、小型短頸壺（挿図10-139）、直口壺（挿図11-162）、甕（挿図17-214・222）がある。高杯は

器種 記号	ヘラ記号							不明	計
	/	//	八	X	×	XIII	×		
杯蓋	1	3		4	5			153	166
杯身	1		1	5	1	2	1	15	26
蓋杯								8	8
高杯	9	1		11					21
短頸壺								1	1
直口壺		1							1
壺体部							1		1
甕							2		2
計	11	5	1	20	1	7	1	4	176 226

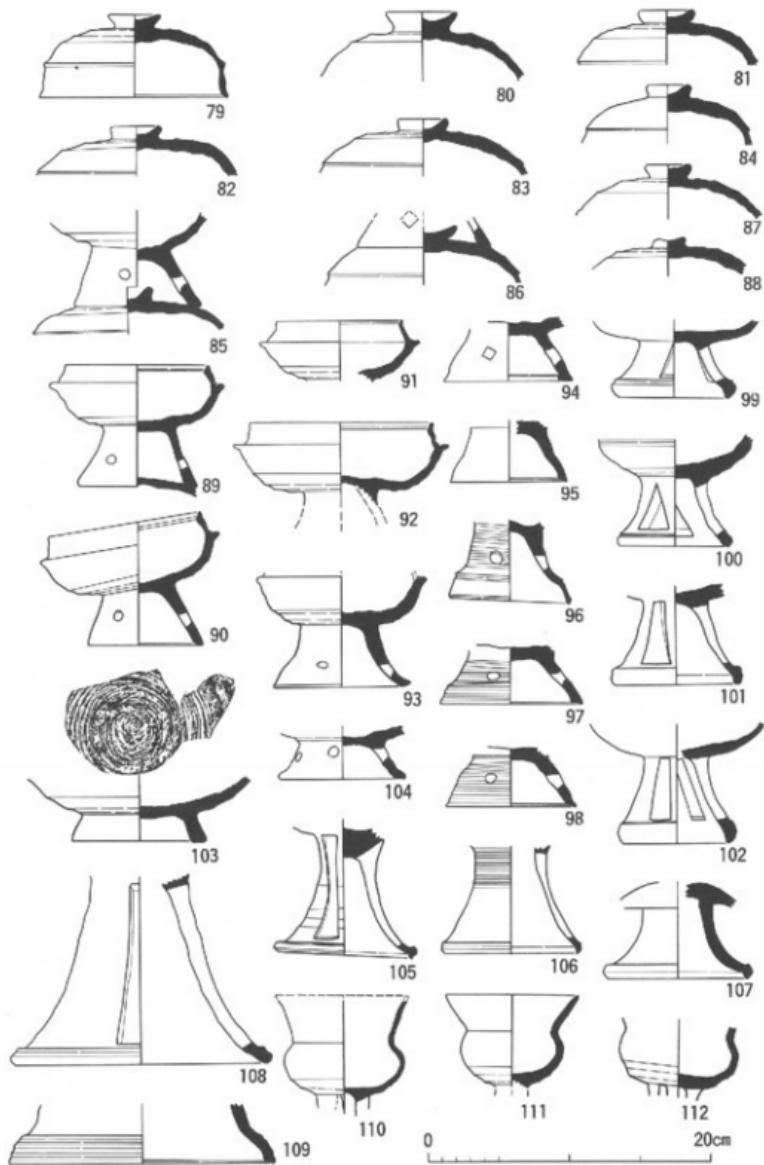
表5 ヘラ記号一覧表

すべて無蓋高杯の脚部内面にしるされている。ヘラ記号の器種別一覧表は表5のとおりである。

高杯蓋 (79~88) (挿図9・図版11)

73点出土している。つまみの付いた蓋をすべてここに入れたが、高杯以外の蓋を含む可能性もある。全体の形態のわかるものは79 1点だけである。それによると杯蓋につまみを貼り付けた形態であることがわかる。(79)を杯蓋の形態分類にあてはめると中型D bタイプであるが、他に大型の可能性のあるもの(83)、小型の可能性のあるもの(88)もある。また、種の残存しているものはすべてbタイプにあてはまりそうである。つまみは比較的大きく、偏平なものが多い。つまみ上面中央は凹状にくぼむものが多いが、くぼみの程度が浅く、平らに近いものや上面が凹状にくぼむものの中央がふくらむもの(80)もある。調整技法は杯蓋と同じく、天井部外面に回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整のものが多い。ヘラ削り時のロクロの回転方向も杯蓋と同様に左まわりが多い。なお、(79)は天井内面に回転ナデ調整の上から一定方向のナデ調整が付加されている。

高杯蓋の中には有蓋高杯との重ね焼きの状況がわかる例がある。それらの中には(80)のように脚部に円孔の穿たれた有蓋高杯と重ねているものが21点、(86)のように菱形の孔の穿たれた有蓋高杯と重ねているものが13点、三角形のスカシが穿たれた有蓋高杯と重ねているものが9点ある。



挿図9 高杯蓋・有蓋高杯・無蓋高杯・脚台・小型台付壺

有蓋高杯 85(86) 89(90)~100 (挿図9・図版11, 12)

杯部だけ残存のもの23点、杯部と脚部の両方残っているもの、もしくは脚部だけ残存しているものは81点ある。杯部の形態は前述の杯身と同じで小型・中型・大型があり、また、形態上の特徴も調整技法も類似する。脚部の形態は様々であるが、脚柱部の孔もしくはスカシの状況から大きく4種類に分類できる。分類の基準は次のとおりである。

タイプ	点数	比率(%)
A	a	47
	b	11
B		4
C		5
D		3

表6 有蓋高杯分類表

- A——円孔をもつもの
- B——菱形の孔をもつもの
- C——三角形のスカシをもつもの
- D——孔・スカシともないもの

Aタイプは脚柱部の調整方法から、さらに大きく2種類に分類できる。すなわち、

- a——ナデ調整を施している
- b——カキ目調整を施している

以上の分類基準に従って分類すると表6のようになる。

A a タイプ 85(89) 89(90) 93 は47点ある。大半は脚部高が4.5cm前後で外傾しながら大きく開く。中には93のように外反しながらひろがる脚部もあるが少ない。裾端部は大半が内傾して凹面をなす。ただ、接地部分については内端にあるもの89や外端にあるもの90など差がある。脚柱部の円孔はすべて3方向に穿たれている。また、穿孔後の調整は雑で、粘土のダブリが外側に残るもの89(93)がある。

A b タイプ 96~98 は11点ある。脚部の形態はA a タイプに多い外傾しながら大きく開く脚部を短くしたものが多いが、96のようになだらかに開いたのち、裾部近くで内屈してふんばる形態をもつものもある。前者の裾端部もA a タイプと同様に内傾して凹面をなす。接地部分は外端にある。後者も裾端部は内傾して凹面をなすが、内端部で接地する。なお、後者の脚部は全部に器壁が薄い。A b タイプも脚柱部の円孔はすべて3方向に穿たれている。また、穿孔後の調整も雑で、粘土のダブリが外側に残るもの98もある。

B タイプ 86(94) は4点ある。脚部の形態はA タイプに多い外傾しながら大きく開くものと類似する。ただ、裾端部は内側へ肥厚して全面で接地するもの90もあり、若干差異がある。菱形の孔は89が4方向に、94が3方向に認められるが、どちらの割合が多いか不明である。

また、菱形の孔は、内側では円孔になっている上に、穿孔後の調整も難で、粘土のダブリが外側に残るもの 94 もある。

Cタイプ 99(100) は 5 点ある。脚柱部が低く、襷部でわずかに内屈して段をもつ 99 と、それより長く、外反してなだらかにひろがる脚部をもつ 100 がある。ともにスカシは 3 方向に認められ、面取りは行なわれていない。また、穿孔後の調整も難で、粘土のダブリが内側に残るもの 99 もある。

Dタイプ 85 は 3 点ある。脚部の形態は A タイプと類似する。

脚台 (103)～(109) (挿図 9・図版 12, 13)

どんな器種に付いていた脚台かはっきりしないものをここで扱う。

(103) は極めて短い脚台である。底部に同心円文スタンプ (挿図 7-6) が残る。この同心円文スタンプはすでに蓋杯のところで述べたとおり、中心部だけでなく周辺部分にまで広い範囲にわたって重複して施してあるが、このタイプと同じ同心円文スタンプは他に認められない。

(104) は有蓋高杯の A a タイプに類似する。ただし、A a タイプより低く、また、円孔も 4 方向に穿たれている。

(105) は丁寧な作りの脚台である。底部との接合法が変っている。すなわち、脚台の上部を一端ふさいでから接合しているため、接合部は極端に分厚くなっている。このタイプの成形手法をもつ脚部は無蓋高杯 (挿図 10-124) にも 1 例あるが、この脚台とは襷部の形態、スカシの数、調整手法など差異が多い。

(106) は器壁の薄い脚台である。高杯の脚部と比べると脚基部の径が大きい。

(107) も (106) と同様に脚基部径の大きい脚台である。

(108) は極端に大きい脚台である。このタイプの脚台は他に認められなかった。

(109) は他の脚台と全く違った形態で、襷部はひろく、ふんばる形態をもつ。他にもう 1 点類例がある。どちらも焼成が甘く、軟質である。

小型台付壺 (110)～(112) (挿図 9・図版 14)

土師器の小型丸底壺に台部が付いたような形態をもつ。台部の形態は不明であるが、(110) には三角形のスカシが 3 方向に、(112) には長方形のスカシが 4 方向にあけられている。

無蓋高杯 (101) (102) (113)～(127) (挿図 9, 10・図版 13, 14)

無蓋高杯は 612 点ある。この他に全体の形のわからない脚部が 822 点ある。無蓋高杯は杯部の

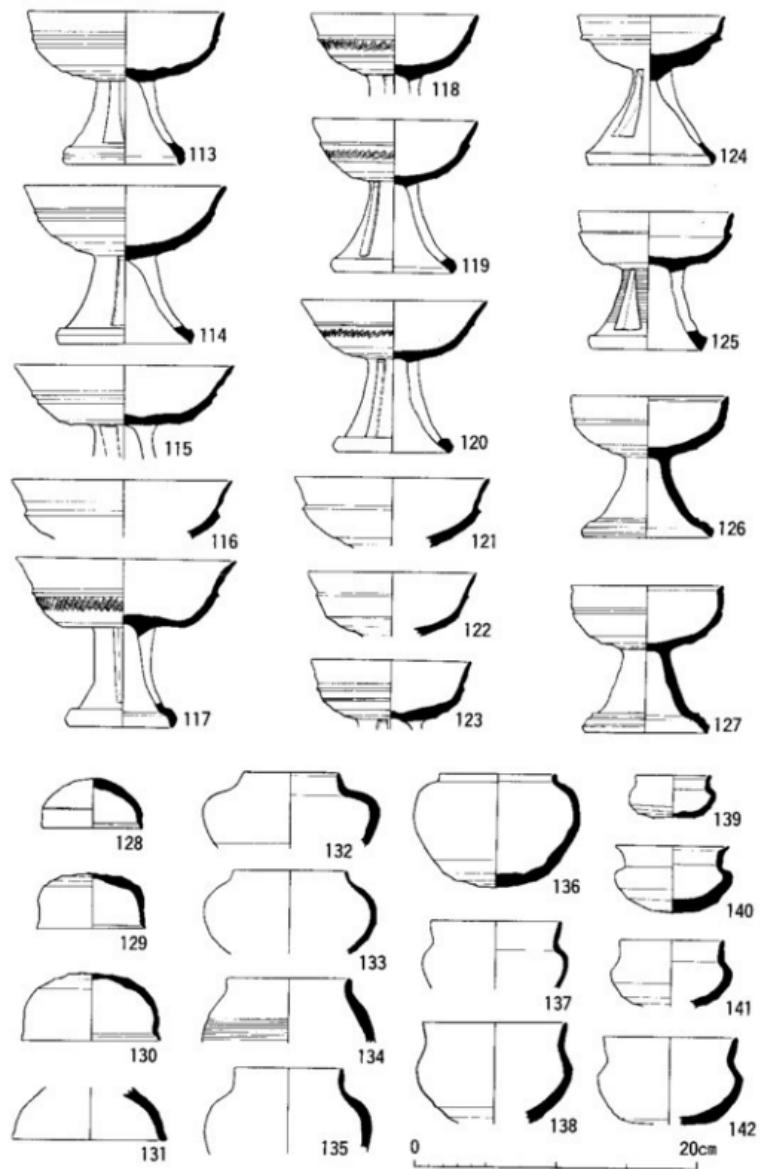


插圖10 無蓋高杯・壺蓋・小型有蓋短頸壺・小型短頸壺

タイプ	点数	比率%
a	8	1.4
b	19	3.4
c	32	5.7
A d	30	5.3
e	310	55.1
f	78	13.9
g	49	8.7
B	1	0.1
C	18	3.2
D	18	3.2

表7 無蓋高杯分類表

Aタイプはさらに7種類に細分できる。

- a——口縁部はあまり開かず、深い底部をもつ。体部に凸線が2条めぐる。
- b——aタイプの杯部の口縁部を大きく開いたもの。
- c——bタイプの杯部の形で、体部の凸線が段に近くなったもの。
- d——cタイプの杯部を波状文で飾ったもの。
- e——小型の杯部をもち、体部に1条の凸線がめぐる。凸線下は波状文で飾っている。
- f——eタイプの杯部にある文様帶が無文になったもの。
- g——fタイプの杯部に残る無文の部分の幅がせばまたるもの。

以上の分類の基準に従って分類すると表7のようになる。

Aa タイプ (101) (102) (113) は杯部も残っているものが6点、脚部だけしか残っていないものが2点で計8点ある。脚部は3方向に面取りのしていない長方形のスカシをもつ。

Ab タイプ (114) (115) は杯部も残っているものが4点、脚部だけしか残っていないものが15点で計19点ある。脚部は4方向に面取りのしていない長方形のスカシをもつ。

Ac タイプ (116) (121) は32点あるが、脚部の状況は不明である。

Ad タイプ (117) は杯部も残っているものが5点、脚部だけが残っているものが25点で計30点ある。脚部はAaタイプと似ているが、それより長い。

Ae タイプ (118)～(120) は杯部も残っているものが178点、脚部だけしか残っていないものが132点で計310点である。無蓋高杯の中で最も多いタイプである。波状文はヘラで描いたものと櫛で描いたものがある。櫛の原体は2本～7本まで様々である。脚部には4方向に面取りした長方形のスカシをもつ。ヘラ記号がしるされているのはこのタイプのものである。

Af タイプ (122) は杯部も残っているものが70点、脚部だけしか残っていないものが8点で

形から大きく4種類に分類できる。分類の基準は次のとおりである。

- A——杯蓋を逆にした杯部をもつが、口縁部は大きく開いている。
- B——浅い杯部とたちあがり気味に外傾する口縁部をもち、その境には鋭い凸線がめぐる。
- C——杯身をそのまま杯部にしているが、口縁部は大きく開いている。
- D——杯蓋を逆にしてそのまま杯部にしている。

計78点ある。

A g タイプ(123)は49点ある。脚部には4方向に長方形のスカシをもつ。

B タイプ(124)は1点だけである。他の無蓋高杯と脚部の成形方法が違っている。また、調整方法も若干ちがい、杯部の内底部は回転ナデ調整の上から不定方向のナデ調整が付加されている。脚部には3方向に面取りしていない長方形のスカシをもつ。

C タイプ(125)は杯部も残っているものが9点、脚部だけしか残っていないものが9点で計18点ある。脚部には3方向にスカシがあるが、三角形のものと長方形のものがある。スカシは面取りをしていない。脚部にはカキ目調整が施されている。

D タイプ(126)(127)は杯部も残っているものが4点、脚部だけしか残っていないものが14点で計18点ある。脚部にはスカシがない。

壺蓋(128)～(131)（挿図9・図版14）

小型短頸壺の蓋と思われるもののみここで扱う。4点出土している。天井部が高く、丸みをもつ。(128)は大井部と口縁部の境に稜がかろうじて残るが、他の蓋にはまったく認められない。

小型短頸壺(132)～(142)（挿図9・図版15）

有蓋のものと無蓋のものがある。有蓋のもの(132)～(136)は14点、無蓋のもの(137)～(142)も14点、その他どちらか不明のものが39点ある。有蓋のものは焼成時に蓋をかぶせていたらしく、肩部に痕跡が残っている。また、口縁部は短いものが多く、直立するか、内傾しているかのどちらかである。無蓋のものは大きさが様々で、(139)のように極小型のものから(138)位のものまであるが、最も多いのは(142)位の大きさのものである。また、口縁部は有蓋のものに比べると長く、外傾するものや外傾したのち開くものがある。なお、極小型のものは1点だけである。

甌(143)～(157)(160)(161)（挿図11・図版15, 16）

口頭部残存のものは139点、底体部以上

口頭部 タイプ	底体部 タイプ	口頭部・底体部 とも残存の点数	口頭部の 点数	底体部の 点数
A	a A a	3	36	33
	b 不明	—	3	—
	c 不明	—	5	—
	d C c	1	4	3
B	不明	—	1	—
C	不明	—	1	—
D	B	1	—	—
不明	b	—	—	16
	A c	—	—	2
	d	—	—	4
	a	—	—	6
不明	C b	—	—	29
	d	—	—	2

表8 甌分類表

残存のものが162点ある。

口縁部の形態から4種類に分類できる。分類の基準は次のとおりである。

- A——頸部と口縁部の境で段を作つて外上方へのびる。境には凸線が1条めぐる。
- B——頸部と口縁部の境で段を作つて内湾しながら上方へのび、端部で再び外反する。境には凸線が1条めぐる。
- C——頸部と口縁部の境で段を作つたのち、受口状に外上方へのびる。
- D——頸部と口縁部の境に段を作らず、ゆるやかに受口状に外上方へのびる。

Aタイプはさらに施文方法から4種類に細分できる。

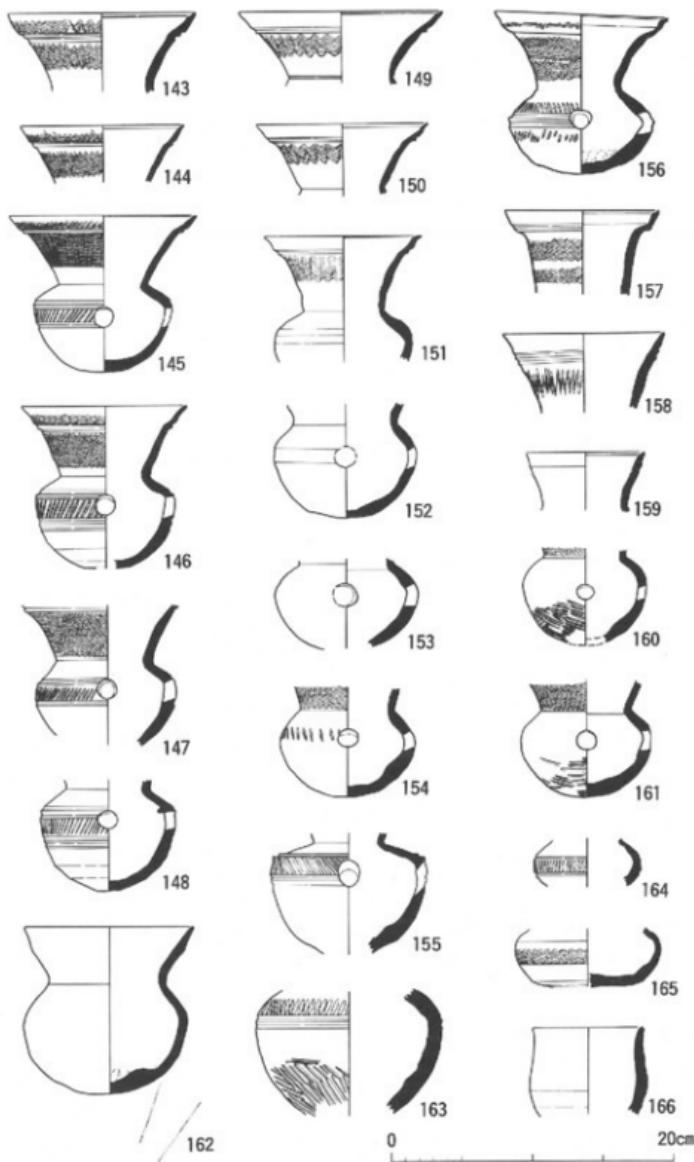
- a——口縁部、頸部ともに波状文が施されている。頸部の波状文は原体幅が広く、頸部の約2/3以上にもおよび、また、施文の間隔も細かい。
- b——施文位置はaタイプと同じであるが、頸部の波状文は原体幅が狭く、頸部の上位約2/3にとどまる。また、aタイプに比べると施文の間隔も粗い。
- c——頸部にのみ波状文が施されている。頸部の施文状況はaタイプに似る。
- d——cタイプと同様に頸部にのみ波状文が施されている。頸部の施文状況はbタイプに似る。

以上の口頭部の中で底体部の形態も確実にわかっているのはA aタイプ、A dタイプ、Dタイプの3種類だけである。底体部は体部の最大径の位置から3種類に分類でき、また、文様の施文状況と調整技法から、Aタイプは5種類に、Cタイプは4種類に細分できる。分類の基準は次のとおりである。

- A——体部の最大径が上位にあり、肩部が張るもの。
- B——体部の最大径が中位にあり、中央が張り出しているため偏球形をなすもの。口頭部Dタイプに伴う。
- C——肩部・体部ともに張り出しがなく、全体に球形をなすもの。

Aタイプ

- a——体部上位に右上がりの列点文が施されている。文様帶の上・下に沈線がめぐる。
- b——体部上位に左上がりの斜線状の刻み目が施されている。文様帶の上・下には沈線が



插図11 肩・直口壺・壺体部・模

- めぐる。
- c——体部上位と肩部に左上がりの列点文が施されている。文様帶の上・下には沈線がめぐる。
- d——体部上位に波状文が施されている。文様帶の上・下には沈線がめぐる。
- e——肩部・体部とともに無文。肩部下端に沈線が1条めぐる。

C タイプ

- a——体部上位に左上がりの列点文と波状文が施されている。
- b——体部上位に左上がりの列点文が施されている。
- c——無文。
- d——無文であるが、a～c タイプの底部が回転ナデ調整であるのに対し、このタイプの底部には平行タタキ調整が施されている。

以上の基準に従って分類すると表8のようになる。表8に示した以外に口頭部の破片で、A タイプであることはわかるが、細分できないものが68点と馳の口頭部であることしかわからぬものが131点ある。また、底体部もC d タイプ以外であることしかわからぬものが39点ある。

口頭部はすべて基部が太く、比較的短いA タイプが圧倒的に多く、その中でもa タイプの占める割合が多い。(145)～(147) のようにA a タイプの口頭部にはA a タイプの体部が伴う。(151) のようにA d タイプの口頭部にはC c タイプの底体部が伴う。(156) は完形品で、D タイプの唯一例である。C b タイプの底体部である(154) とC d タイプの底体部である(160) (161) はA a タイプの口頭部が伴うのかA c タイプの口頭部が伴うのか不明である。

直口壺(158) (159) (162) (挿図11・図版15, 17)

3点出土している。口頭部の形態がすべて違う。(162) は上師器の壺のような形態をもつ。

壺体部(163)～(165) (挿図11)

口頭部の形態がわからない壺をここで扱う。形に大・小があるが、馳の底体部と似る。しかし、円孔の有無が不明なとの底体部の中に(163) のような大型のものや(164) のように小型のものが出土していないことから断定できなかった。また、(165) は偏平な体部と平坦な底部をもつことから、他に出土している馳とは差異があるのでここで扱った。

椀 (166) (挿図11)

無文の椀で1点だけ出土している。把手の有無は不明である。

短頸壺 (167)～(172) (挿図12・図版17)

いずれも球形の体部をもつ。中型のものと大型のものがある。

中型のもの (167) は4点出土している。大型のものに比べて口径は大きいが、体部は小さい。

大型のもの (168)～(172) は23点出土している。体部は大きく張り出す。口頸部はわずかに外傾するが、ほぼ直立にちかい。口縁端部は大半が内傾する。(168) のような口縁端部は2点だけである。調整は体部外面に平行タタキ調整が施されているもの (169)～(171) と格子風タタキ調整の施されているもの (172) がある。体部内面は同心円文スタンプが残るが、部分的にスリケシしているものが多い。口頭部外面にカキ目調整が施されているもの (171) (172) は2点だけである。他はすべて回転ナゲ調整が行なわれている。

小型広口壺 (173) (174) (挿図12)

口頸部が残っているだけで全体の形は不明である。

有蓋壺 (175) (176) (挿図12・図版17)

杯身に似た口頸部をもつ。2点出土している。(175) は頸部が丸くふくらんで杯身と酷似するのに対し、(176) は頸部が直立するため若干様相が違う。なお、(175) の方が胎土や作りの点で丁寧に仕上げているのに対し、(176) は全体に雑な感を与える。

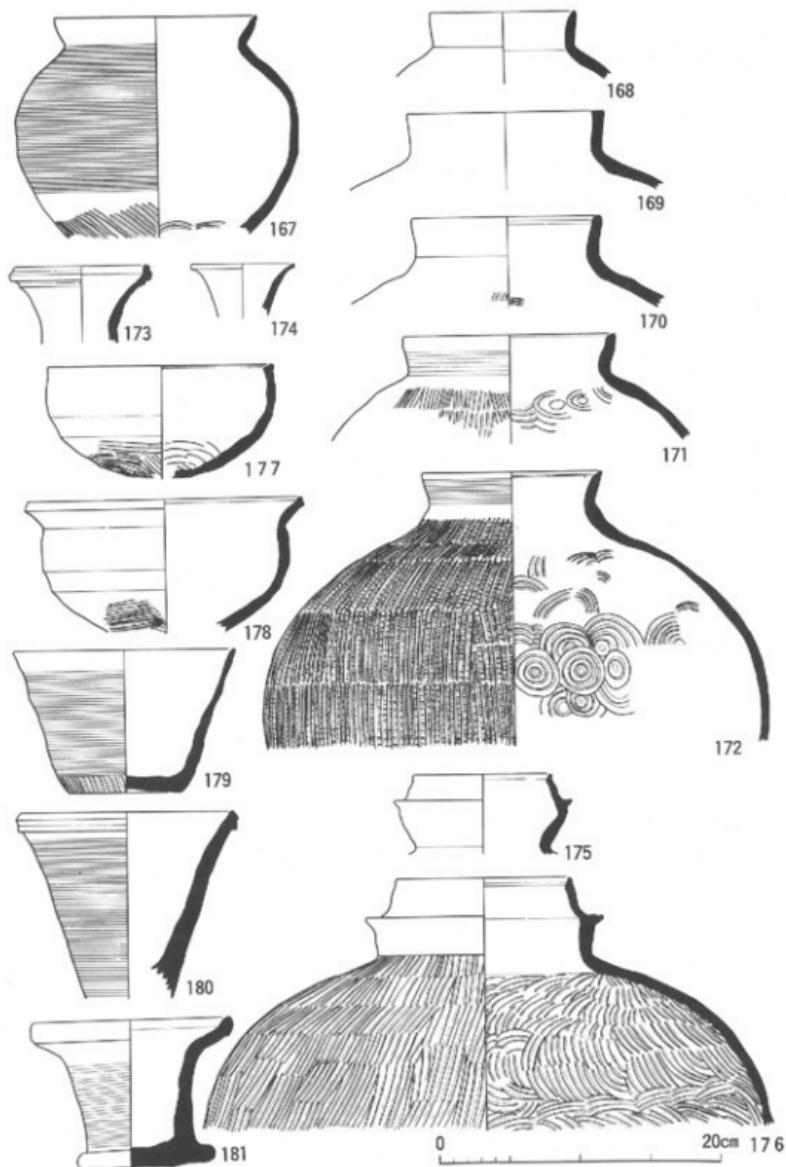
鉢 (177)～(181) (挿図12・図版17)

12点出土している。大きく4種類に分類できる。分類の基準は次のとおりである。

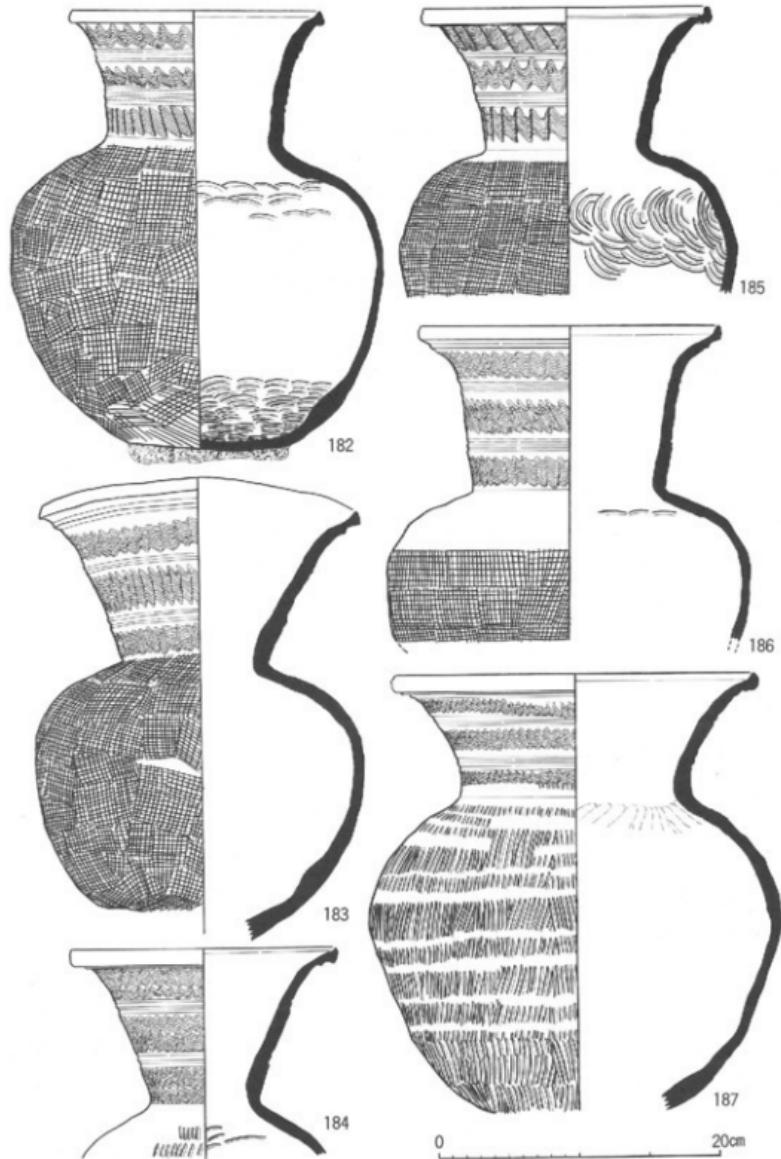
- A 一厚い円盤状の底部に体部がつくもの
- B 一ほぼ平坦な底部に外上方へ直線的にのびる体部をもつもの
- C 一椀状の体部に外反する口縁部をもつもの
- D 一椀状を呈するもの

以上の中でもA類が9点と大半を占める。他は各々1点ずつ出土している。

Aタイプは体部から口縁部まで外上方へ直線的にのびるもの (180) と口縁部で大きく外反して開くもの (181) とがある。ともに器壁が厚く、粗い作りである。



插図12 短頸壺・小型広口壺・有蓋壺・鉢



挿図13 広口壺

他のタイプはAタイプに比べると器壁が薄く作られているが、とりわけ、Bタイプ(179)の口縁部は小型の器種と変わらないくらい薄い。

Aタイプの(181)の外底面はヘラ切り未調整である。この手法は他の器種では蓋杯の蓋(中型Dタイプのd)に1例認められるだけである。他のタイプの底部外面は平行タタキ調整を施している。底部内面はDタイプ(177)に同心円文スタンプが明瞭に残る以外、他はすべてナデ調整で仕上げている。なお、Aタイプとして図示したものは外面にカキ目が施されているが、カキ目の施されていないものもある。

広口壺(182)～(188)(挿図13, 14・図版18, 19)

33点出土している。口頭部の形態は、筒状を呈したのち外反するもの(182)(186)とゆるやかに外反して開くものがある。口縁部は上方につまみあげるものが多い。上端は尖るものと、丸みをもつものがある。頭部はすべて凸線と波状文で飾っている。波状文は3帯の文様帶で構成されている場合が多いが、2帯のものも認められる。また、文様帶1帯に1条づつ波状文を施すもの(182)(183)(185)～(187)、2条づつ施すもの(184)、3条づつ施すもの(188)が認められる。体部の調整は外面に格子風タタキを施すものが多いが、平行タタキを施しているもの(187)(188)も認められる。内面は同心円文スタンプを一部スリ消しているものが多い。ただし、スリ消しの度合はていねいに消しているもの、一部だけていねいに消しているものなど様々である。

注口土器(189)(挿図14・図版19)

注口部らしきものが1点だけ出土している。手づくねで、ナデの棱線がはっきり残っている。体部の状況は不明である。

器台(190)～(199)(挿図14, 15・図版19, 20)

杯部残存のものは39点、脚部残存のものは44点ある。杯部と脚部が接合できるものがないので、各々で分類を行う。

杯部は深いものから浅いものまである。焼きひずみのあるものが多いのではっきりしないが、すべてならかなカーブを描いて口縁部までのびる。口縁部の形態と調整方法から2種類に分類できる。分類の基準は次のとおりである。

A——口縁部は上・下に拡張する。体部外面に格子風タタキ調整、内面に同心円文スタンプを施している。また、脚部との接合部分にも同心円文スタンプを施している。

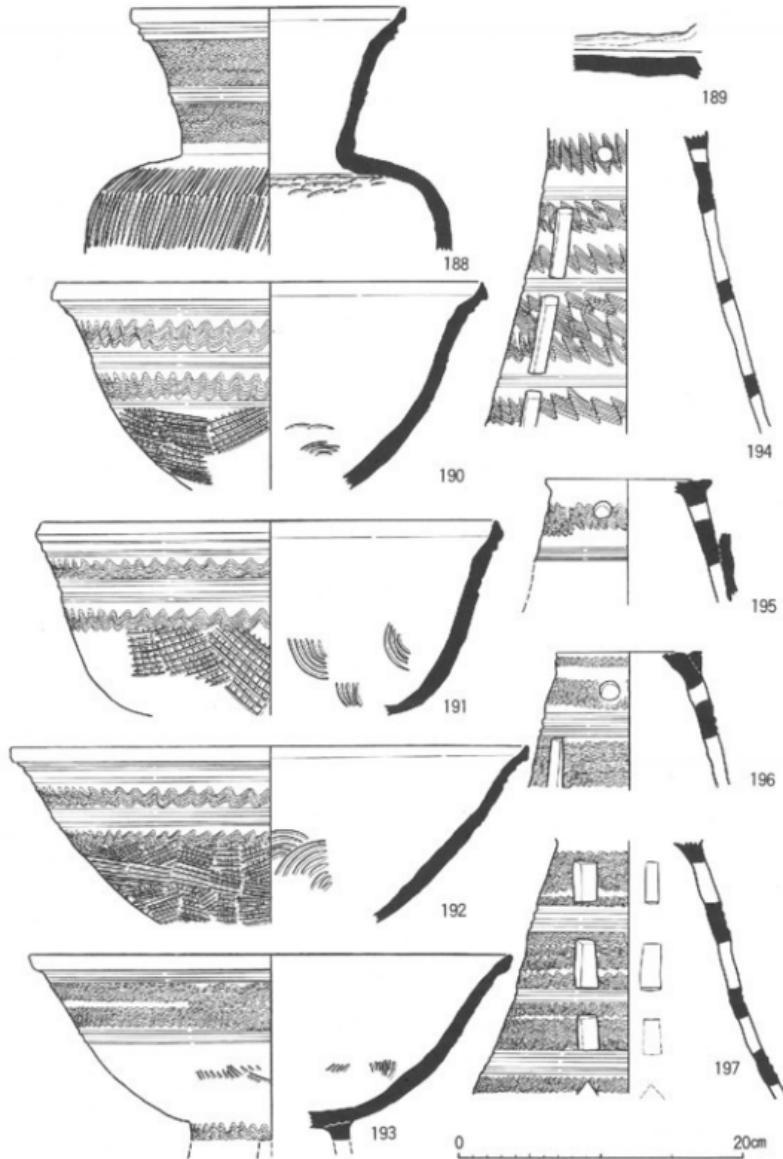


插圖14 広口壺・注口土器・器台

＼B——口縁部は下方に少し拡張する。体部外面に平行タタキ調整、内面に同心円文スタンプを施しているが、内外面とも、ほとんどスリ消している。また、脚部との接合部分には同心円状の沈線をめぐらせている。

以上の分類基準に従うとAタイプは16点、Bタイプは2点認められる。他に全体の形がはつきりしないものが21点あるが、文様の状況からみておそらくAタイプに入るとと思われる。

Aタイプの杯部(190)～(192)は口縁部と体部の境に凸線が1条めぐるものと2条めぐるものがある。また、文様帶直下に沈線のめぐるもの(190)と沈線の認められないもの(191)(192)がある。

Bタイプの杯部(193)はAタイプと同様に波状文が2条めぐるが、Aタイプのように凸線で区切りをせず、1つの文様帶として構成されている。また、口縁部と体部の境や文様帶直下には、鈍いながら各々2条づつ凸線がめぐる。

脚部はすべてハの字状に聞く形態をもつが、スカシの形状から2種類に分類できる。分類の基準は次のとおりである。

A——凸線で区分した脚柱部の最上段に円孔を穿ち、他の段には長方形のスカシを直線的に配置するもの。
B——凸線で区分した脚柱部の上位3段に長方形のスカシを穿ち、その下の段に三角形のスカシを配置するもの。

以上の分類基準に従うとAタイプは3点、Bタイプは16点認められる。他にどちらか区別つかなかつたものが25点ある。

Aタイプは台部との接合部分に同心円状の沈線が描かれている。これは杯部のBタイプに認められるものと同じであるが、(193)の例では脚柱部の最上段に長方形のスカシが認められるので一致しない。

Bタイプの大半は長方形のスカシと三角形のスカシが直線的に配置されているが、(199)のように長方形のスカシが直線的に並んでいるのに対して、三角形のスカシが若干ずれているものも認められる。また、台部との接合部分には同心円文スタンプが施されているので、Aタイプの杯部と組み合わさる可能性もある。

瓶(200)(挿図15・図版20)

1点出土している。外上方へほぼ直線的にひらく口縁部をもつ瓶で、体部の中位に把手がつ

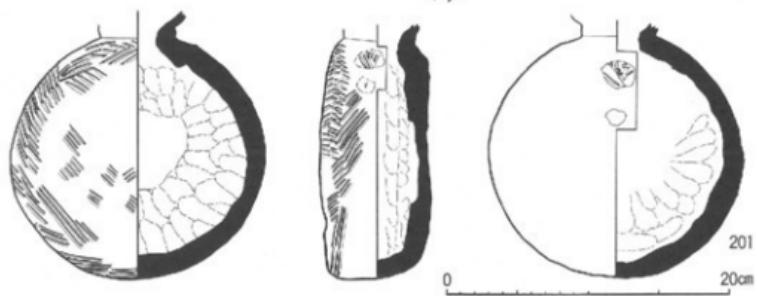
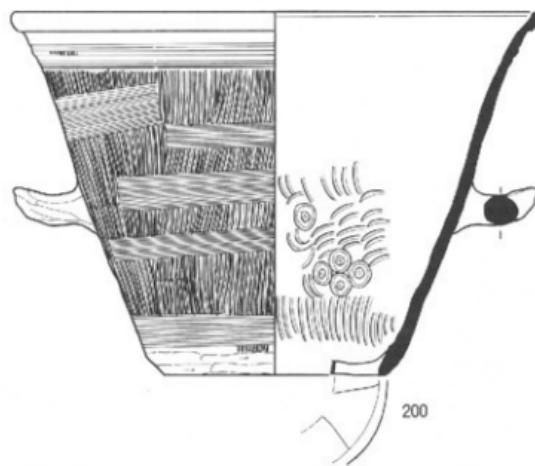
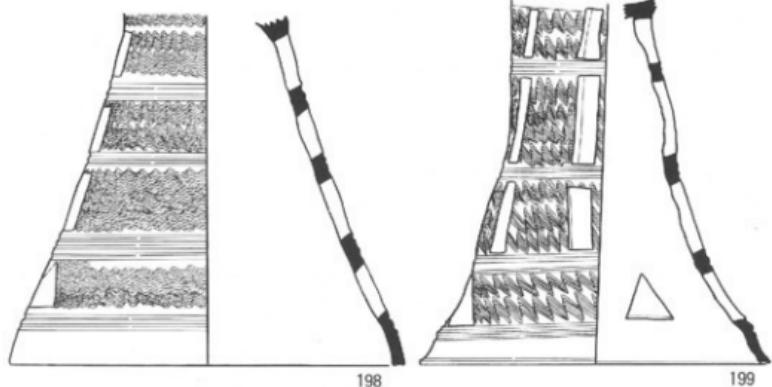


插图15 器台·甌·提瓶

いている。内面には粘土帶のつみ重ね時にできたと思われるかすかな凹凸が残っている。凹みの間隔は3cm前後である。外面は細かい平行タタキ調整の上にカキ目調整を施している。

提瓶 (201) ~ (210) (挿図15, 16・図版20)

15点出土している。器形はバラエティーに富んでいるが、体部は扁平なものよりふくらみのあるものの方が多い。また、体部の最大径が20cm以下の小さなものが多い。最も小さい(205)では推定最大径が12~13cm程度にしかならない。ただし、全体の形がわからないので提瓶以外の器種の可能性もあるかもしれない。体部残存のもので最も小さいものは(203)で、体部最大径は16.3cmをはかる。最も大きいものは(204)で、21.25cmをはかる。(204)は体部が両面ともふくらむように図示したが、破線で示した面は肩部の残存状態から反転させて復元したものである。図示したものよりふくらみは少なくなるかもしれないが、(208)ほど平坦にはならない。(202)や(203)に近くなる可能性はある。

体部の扁平な(201)は他の提瓶に比べると器壁も厚く、作りも雑な感を与える。また、把手も両肩だけでなく、前面にも痕跡が認められ、計3ヶ所に付いていたことがわかる。ただし、成形技法については他とかわらない。

口縁部は(204)~(207)のように縫部に面をもつものと、(208)~(210)のように丸くおさまるものがある。

把手は体部の痕跡で見る限り、すべて環状のものである。

把手 (211) (挿図16)

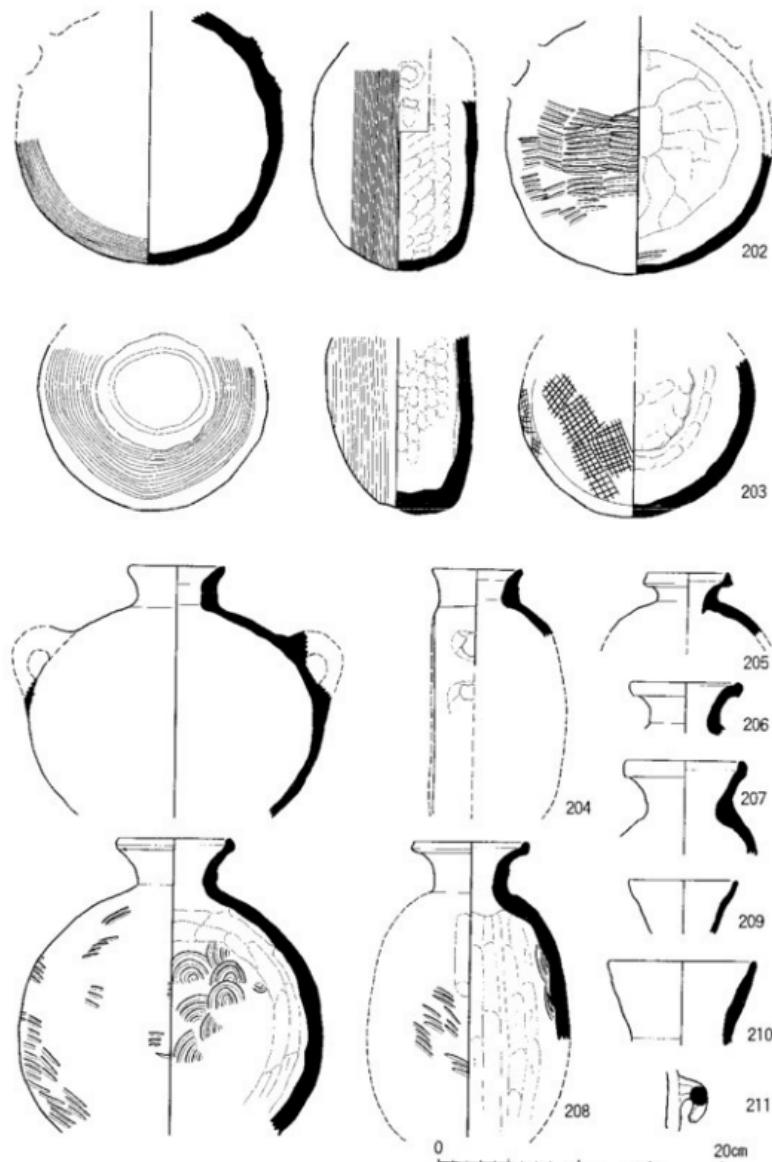
カギ状の把手が1点出土している。提瓶につく可能性が高いが、出土した提瓶の体部の中にカギ状の把手についていた痕跡のあるものがなかった。

壺 (212) ~ (256) (挿図17~24・図版20, 21, 22)

465点出土している。頸部が無文のもの、(212)~(232)(234)~(244)と頸部を波状文で飾るもの(245)~(256)に大きく分類できる。これらの他に、形態的には前者の無文の壺のタイプに属すが頸部にヘラで動物の絵が描かれているもの(233)が1点ある。

無文の壺は352点出土している。口径は12~25cmをはかるものまである。これらはさらに、小型・中型・大型の3種類に分類できる。

小型の壺(213)(214)は口径13cm前後、体部最大径20cm前後をはかる。口頸部の器壁は薄く、調整もまた、体部外面上半、内面ともスリ消してて、ていねいな作りである。小型壺と分類した方が適切であったかもしれない。なお、(214)は体部外面にヘラ記号が認められる。出土



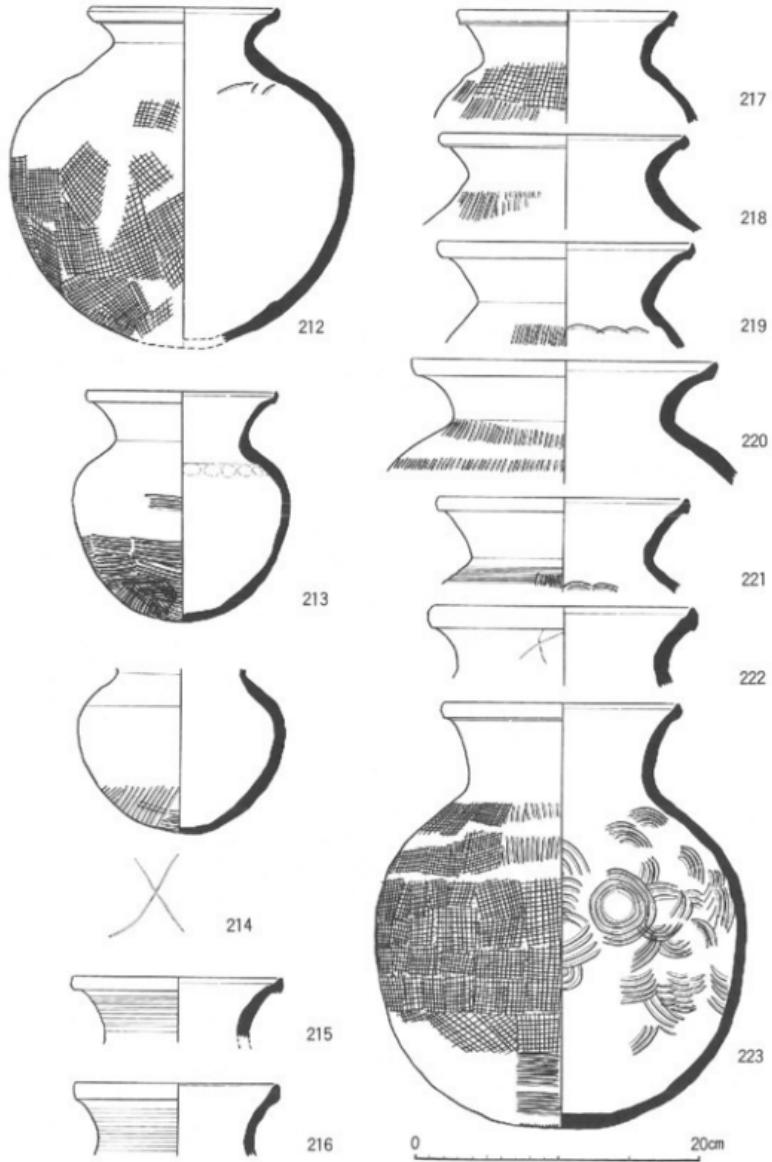
挿図16 提瓶・把手

点数は少ない。

中型の甕 (212) (215) ~ (219) (221) (223) は口径18cm以下、体部最大径30cm前後をはかる。29点出土している。対口徑頭高率¹⁴⁴(以下、略して頭高率)で頸部の長さを比較してみると、頭高率24~25%を示すもの (217) (219) (221) が最も多い。次に39%前後を示す (223) のような長いものが多く、(212) (218) のように20%以下のものは少ない。口縁端部は程度の差があるものの、すべて上方へつまみあげている。ただし、下端および外端面の処理の仕方はバラエティーに富んでいる。口頭部の調整は外面にカキ目を施したもののが2点認められる以外は、すべて内外面とも回転ナデ調整で仕上げられている。体部の調整は外面に格子風タタキを施しているもの、平行タタキを施しているもの、平行タタキとカキ目を施しているものなどが認められる。内面は同心円文スタンプが残るものとスリ消しているものがある。ただし、内面に同心円文スタンプが残る場合でも程度の差こそあれ、すべて一部スリ消している。

大型の甕 (220) (222) (224) ~ (232) (234) (244) は口径の大・小にかかわらず、体部最大径が30cm以上になると思われるものを基準にした。ただし、大半は口径20cm以上である。111点出土している。無文の甕の中では最も出土点数の多い大きさのものである。頭高率で頸部の長さを比較してみると、頭高率24~28%を示すもの (220) (227) (230) ~ (232) (236) (238) (241) ~ (244) が最も多い。次に30%以上の長いもの (224) ~ (226) (237) (240) (241) が多く、20%以下の短いもの (228) (234) (235) は少ない。口縁端部は中型の甕と同様に、程度の差はあるものの、すべて上端はつまみあげ、下端および外端面の処理はバラエティーに富んでいる。口頭部の調整は外面にカキ目を施したもの以外、すべて回転ナデ調整で仕上げているが、中に数点、格子風タタキの残るもの (240)、平行タタキの残るもの (242) も認められる。体部の調整は外面に格子風タタキを施しているもの、平行タタキを施しているもの、各々のタタキの一部をスリ消しているもの、カキ目を付加しているものなどが認められる。なお、器種に問わりなく、体部外面にタタキ調整が施されている場合、その大半は、上半がほぼ規則的に一定方向で施されているのに対し、底部近くになると交差して施されている。また、格子風タタキの中には、平行タタキと見誤るぐらい不明瞭なものがある。内面は同心円文スタンプが残るもの、一部スリ消しているもの、残存部分で見る限り、すべてスリ消しているものが認められる。なお、外面のタタキ調整が細かい場合は内面の同心円文スタンプも細かく、反対に外面が粗い場合には内面も粗いというようく調整用の道具もセットとして使いわけている。また、細かいタタキ調整を施しているものは、器壁が均一で、ていねいに成形しているものが多い。

さて、無文の大型甕と分類したものの中に、横瓶と分類した方が適切だったかもしれないものがある。(224) (225) で、口頭部の形状も他の甕のように外反して開くものではなく、筒状を呈した後、大きく開いている。また、肩部も水平近くにまで張り出していて、他と様子が違つ



挿図17 壺

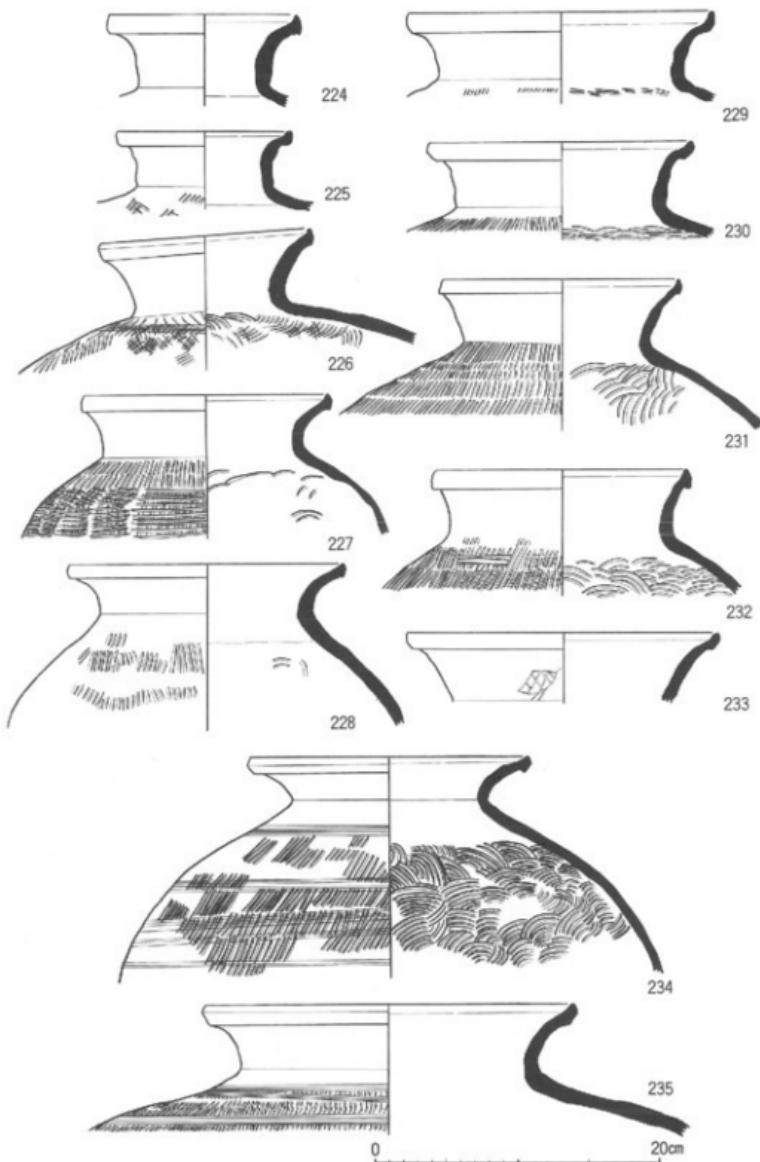
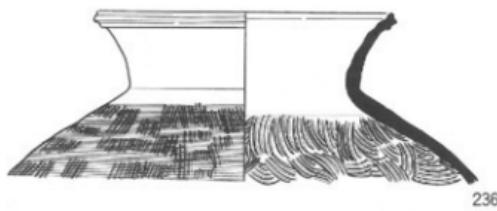


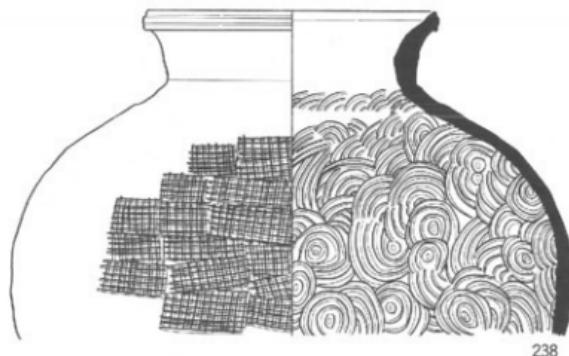
插圖18 瓽



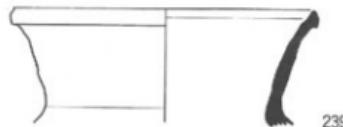
236



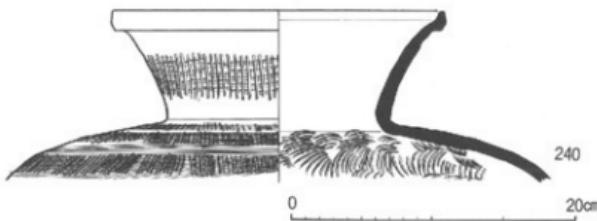
237



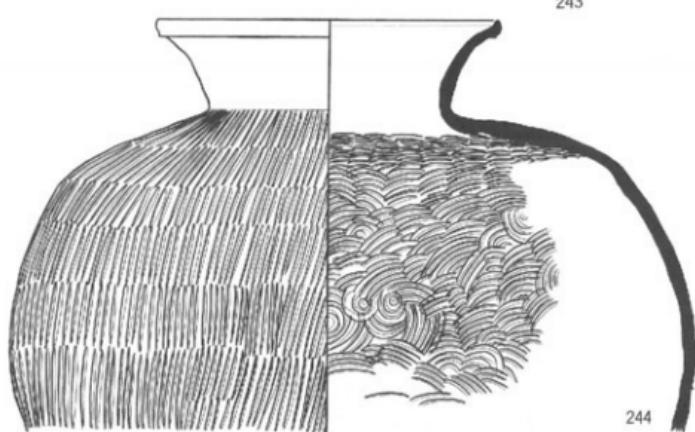
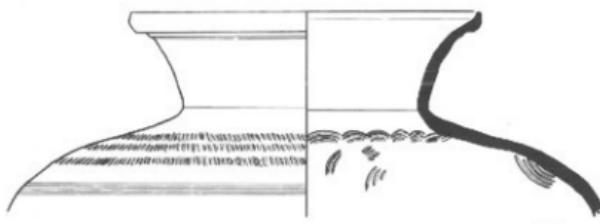
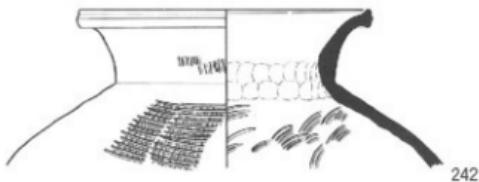
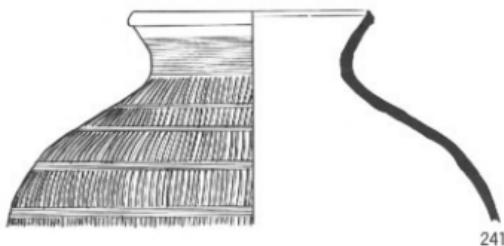
238



239



挿図19　甕

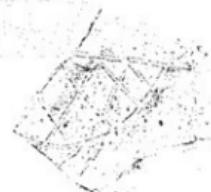


0 20cm

挿図20 麽

ている。ただ、横瓶と分類するには体部の大半が欠失しているので、ここでは甕として分類しておいた。

口頭部に線刻画のある甕(233)は1点だけ出土している。形態的には無文の大型甕と同じタイプのものである。頭高率は23%で無文の大型甕の中では最も多く出土しているタイプに近く、その中では短めの頭部をもつ。頭部の線刻画は、ヘラで動物の絵が描かれている。頭にあたる部分が欠失しているため動物の種類がはっきりしない。ただし、四足の動物であることは推測できる。(挿図21・図版20)



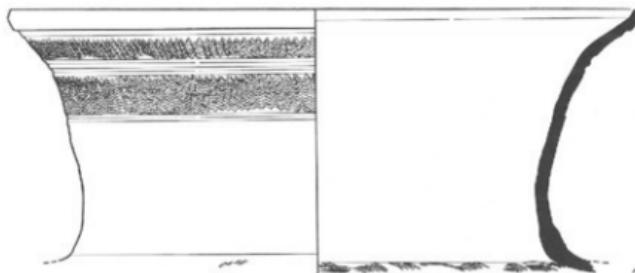
挿図21 四足を持つ動物

有文の甕は112点出土している。口径は41~49cmをはかるものまである。すべて、無文の大型甕よりはるかに大型の甕である。口頭部は凸線と波状文で飾られている。凸線は口縁部直下、頭部文様帶間、文様帶下の3ヶ所に施されている。3ヶ所の凸線のなかでは、口縁部直下の凸線に変化が多くみられ、1条~3条のものまである。以下、口縁部直下の凸線の数で分類する。

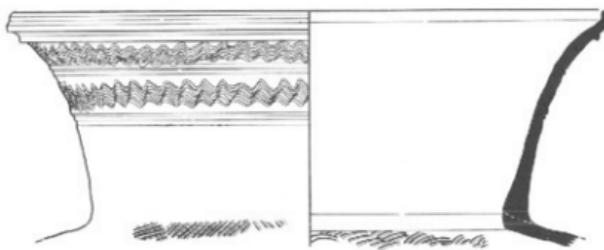
凸線が1条のもの(245)~(248)は41点ある。口頭部は頭高率が40%以上の長いもの(245)が1点と36%以下の短いもの(246)~(248)が5点認められる。他は頭部全体が残っていないので不明である。口縁部は上方に拡張するもの、上・下に拡張するもの、ほとんど拡張しないもの、端面に沈線が1条めぐるものなどがある。波状文の施文間隔は粗いものと細かいものがある。口頭部の調整は回転ナデ調整で仕上げているが、外面に平行タタキ、内面に同心円文スタンプの残るものもある。体部の調整は外面に平行タタキか格子風タタキが、内面には同心円文スタンプが施されている。なお、無文の甕にもみられたように、格子風タタキについては平行タタキと見誤るぐらい不明瞭なものがある。

凸線が2条のもの(249)~(255)は82点あり、3種類の中で最も多い。口頭部は頭高率35%以上の長いもの(249)~(252)が12点、33%以下の短いもの(253)~(255)が10点認められる。他は口頭部全体が残っていないので不明である。口縁部は上方に拡張するもの、上・下に拡張するものなどがある。波状文の施文間隔は粗いものと細かいものがある。調整については口頭部、体部とも凸線が1条のものと変わらない。ただ(249)のように口頭部内面に同心円文スタンプが強く残っているものも認められる。

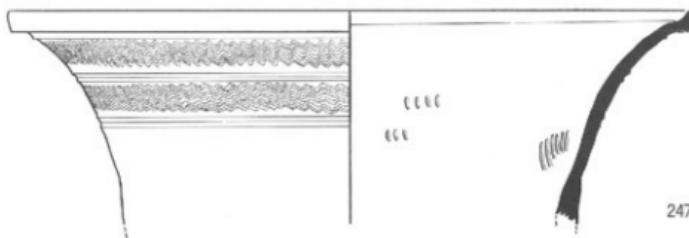
凸線が3条のもの(256)は4点ある。口頭部全体が残っているもの(256)は1点だけで、頭高率が48%と長い。さらに、他の3点とも形態が違っている。すなわち、他の甕の口頭部がゆるやかに外反して開くのに対し、(256)は外傾して開く口頭部をもっている。また、口縁端部も、外端面中央の突出が鋭い。また、施文状況も違っていて、上の文様帶に2条、原体を変えた波状文を施文している。なお、すべての有文の甕の中で、1つの文様帶に2条、波状文を施している唯一の例である。(256)以外の甕は口縁部が上方に拡張するもの、上・下に拡張する



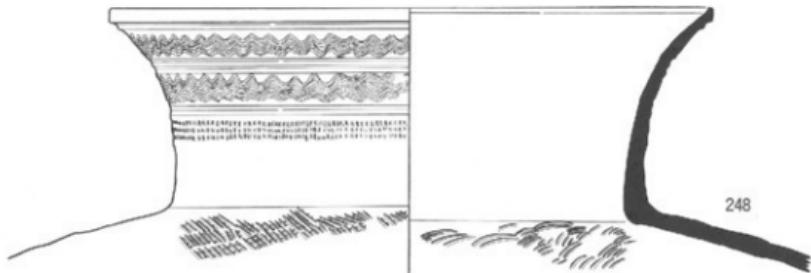
245



246



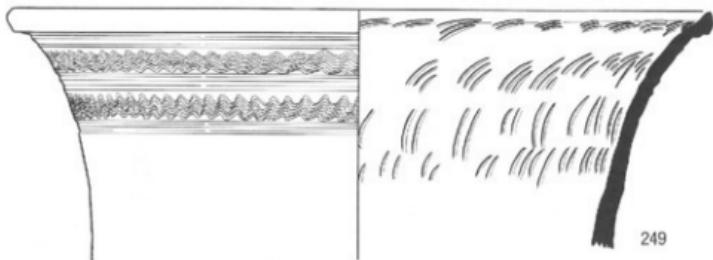
247



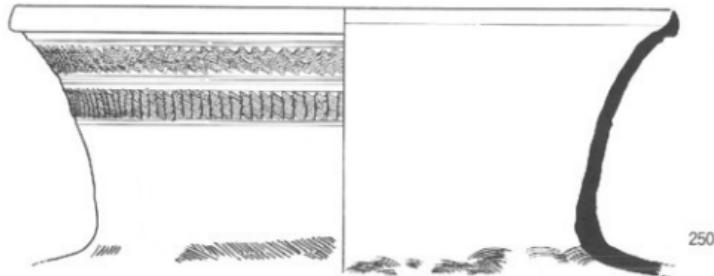
248

0 20cm

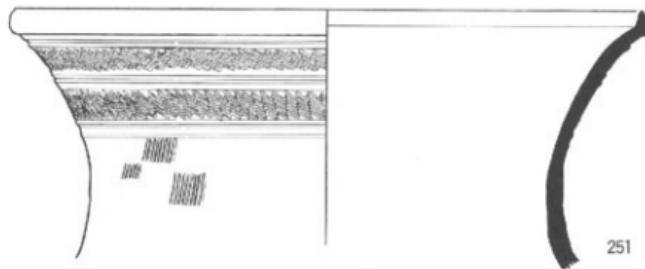
挿図22 廣



249

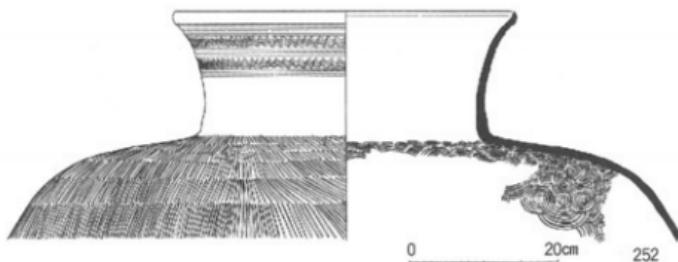


250



251

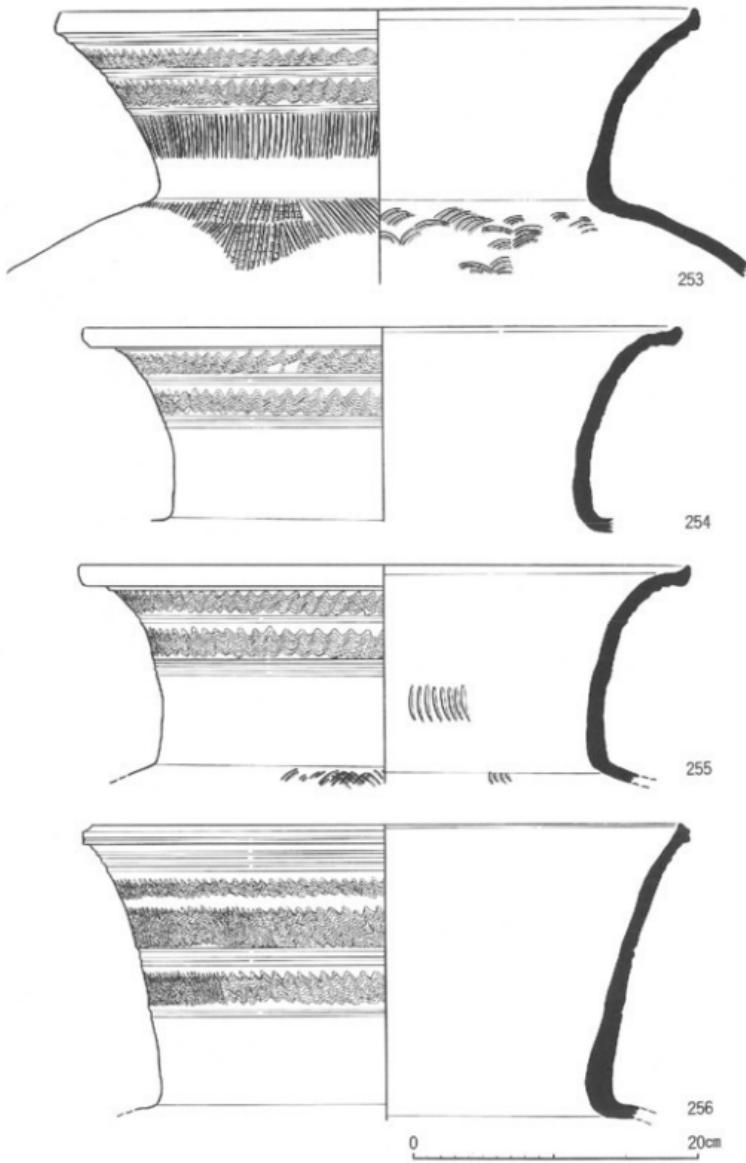
0 20cm



252

0 20cm

挿図23 麺

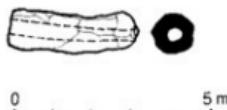


挿図24 壺

ものがある。波状文の施文間隔は他と同様に粗いものと細かいものがある。口縁部の調整は回転ナデ調整で仕上げている。体部は欠失しているため不明。

土錘 (257) (挿図25・図版20)

1点だけ出土している。管状の土錘である。手づくねでナデの稜線が明瞭に残る。



挿図25 土錘

2 その他の遺物

弥生土器 (挿図26)

2点出土している。2点とも灰原の最下層から出土している。挿図4で出土地点を示せば、灰原内でも窯体に近い側で、最初に落ち込んでいる(7-1)にあたる場所で見つかっている。器種は斐形土器(258)と底部(259)である。ともに第V様式のものである。

斐形土器 (258)

内湾気味に外反する口縁部をもつ中型の斐形土器である。胴部の張りは少なく、口径をわずかにこえる程度である。底部は厚く、突出した平底である。口縁部は外面がナデ調整、内面は横方向の刷毛目で調整している。体部の調整はタタキ調整とナデ調整を施しているが、タタキ調整は大きく分けて2段階に施している。内面はナデ調整と刷毛目調整を施している。外底面はナデ調整を行っている。

底部 (259)

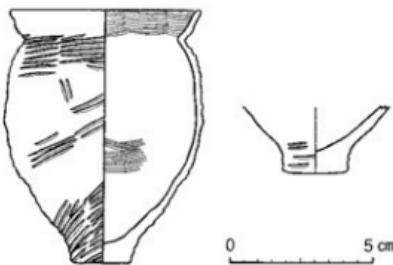
前述の斐形土器と同じ位の大きさの底部である。ただし、斐形土器に比べると、外底面がわずかに丸みをもっている。また、外面のタタキ調整の傾きもゆるやかで、水平に近い。

土師器

2点出土している。第3層から鍔釜の鍔の部分が、表採で高杯が出土している。ともに7世紀代のものである。

鍔釜

鍔幅約2.5cmの幅狭の鍔である。鍔先は丸くおさめている。胎土は0.2cm大位までの砂粒を多量に含む。くさり礫も含む。色調は明茶褐色。



挿図26 弥生土器

高杯

杯底部のみ残存。外面に脚部との接合部が認められ、その部分に粘土の合せ目状の凹みが1本めぐり、下面が肥厚ぎみになっている。内底面には正放射状の暗文が認められる。胎土は精良で、白色の微砂粒を含む。色調は明茶褐色。

須恵器

C区の第3層から蓋杯の蓋が1点出土している。8世紀代のものである。

蓋

口径14.2cmをはかる。口縁部は短く、ほぼ垂直に下る。端部は丸くおさまる。口縁部から天井部の境は凹状にくぼむ。天井部はほぼ平坦面をなす。つまみは欠失しているため不明。調整は口縁部内外面とも回転ナデ調整。天井部は内外面とも不定方向のナデ調整。胎土は密。最大0.25cmの白色砂粒を少量含む。焼成は良好で堅緻。色調は暗灰青色。

瓦器

C区の第1層から小皿か椀らしき破片が1点出土している。

陶器

2点出土している。ともに表採である。1点は小型の壺、他は器種が不明である。

壺

口径8.9cm、口頭高2.1cmをはかる。直立する短い口頭部をもつ。口縁部は大きな玉縁状を呈する。上端面は平坦である。体部は欠失しているため不明。

瓦

平瓦と丸瓦が出土している。平瓦は凹面に細い布目の認められるものがある以外、他はすべてナデて、黒くいぶしたものである。丸瓦は玉縁の付くタイプのものである。

サヌカイト剥片

1点出土している。表採である。自然面を打面にした綫長の剥片である。

(栗出)

- (註1) 各器種毎の点数は原則として口縁部残存のものを1点として数えた。ただし、口縁部が残っていないなくても、明らかに他の個体とわかるものについては1点として数えた。また、器種毎の解説の中で示した分類表の点数は分類可能なものの点数なので、出土点数とは必ずしも一致しない。
- (註2) 各器種毎の分類作業は田川友美が中心になって行った。
- (註3) タイプdのように天井部と口縁部の境の稜が沈線にかわってしまったものについても遺物觀察表の法量の欄で、便宜上、棱高として口縁部から沈線までの高さを記述した。
- (註4) 口径に対する頭の長さの割合。頭高÷口径×100

V ま と め

中佐備須恵器窯は、窯本体の遺構がすでに削り取られていたが、残っていた灰原からはコンテナ約150箱の須恵器片が採集された。この遺物を陶邑出土のものと較べると、中佐備独自の形態や、器種・技法面での多少の違いは見られるものの、全体的には非常に類似している。大谷女子大学の中村浩氏が、「陶邑Ⅲ」の中で行った5型式20段階の編年にあてはめると、中佐備の須恵器はI型式第5段階、および、それに続くII型式第1段階から第2段階に該当している。この窯の操業時期は5世紀末に始まり6世紀前半にかけての約半世紀間であると考えてよいだろう。

ここでは、中佐備の須恵器と陶邑の須恵器を対比しながら、中佐備須恵器窯成立の背景について考えてみたい。

1. 蓋杯について

中佐備出土の蓋杯には、陶邑と同じ特徴を持つ2つのタイプが認められる。^{註2} すなわち、陶邑I型式第5段階の特徴である小型のものと、II型式第1段階以降の特徴である大型化したものである。いずれも、蓋の天井部と杯の底部が丸みを増し、蓋の稜は短くて鈍いものが多く、杯のたちあがりも内傾して全体にシャープさがなくなっている。ヘラ削りの範囲は狭く、削りも粗い。また、内面に同心円文スタンプが残るものがあることなど、粗雑な仕上げも陶邑のものと変わらない。

しかし、くわしく見ると、陶邑との相違点もいくつか観察される。まず、陶邑では大型の蓋杯にしか見られない成形上の特色が、中佐備では小型のものにも見られ、その逆も存在することである。例えば、蓋の稜の退化現象をとりあげてみると、陶邑ではII型式に至り、形の大型化とともに稜の消滅化にいっそう拍車がかかるのであるが、中佐備では小型品にも稜が鈍く屈曲具合からかろうじて分かるものや、消失した稜を沈線で表現しているものが存在する。つまり、陶邑では成形が比較的ていねいな小型品（I型式）から粗いつくりの大型品（II型式）へと、器の大きさと成形が連動して変化したのに対し、中佐備では大きさと成形変化が相互に結び付いていない。その原因が中佐備への製陶技術の伝わり方にあるのか、あるいは中佐備内部の事情によるものかは不明だが、いずれにしても中佐備の須恵器が陶邑ほど系統的に変化していないことがうかがえる。

つぎに、ロクロの回転方向についても、興味深い相違が観察された。田辺昭三氏が『陶邑古

窯址群Ⅰ^{註3}で報告しているところによると、陶邑では、はじめクロクロを左回りで回転させているものが大半を占めるが、Ⅰ期の最終段階（TK47型式）で右回りのほうが少し多くなり、やがてⅡ期の初頭（MT15型式）以降で右回りの割合が圧倒的に多くなるという傾向を示す。中佐備の須恵器は、この右回りがふえ始めるTK47の時期から、右回りが定着していくMT15の時期にあたるのだが、回転方向は陶邑とは同じ傾向を示さなかった。中佐備の蓋杯と高杯、計111点分についてクロクロの回転方向を調べたところ、左回りが72点、右回りが39点という結果になったのである。この割合は陶邑の時期編年にはてはめてみると、TK47型式の前段階であるTK23型式の時期にあたる。すなわち、クロクロの回転方向の比率からすると、中佐備の須恵器は同時期の陶邑よりも古い技法で作られていたと言える。

この他、中佐備からは口径が8cm前後しかない杯が出土しているが、このような極小型は陶邑では見られない。

なお、土器の胎土には細かいものから粗いものまであるが、1対をなす蓋と杯については胎土は同質となっている。この点は、陶邑と同様である。

2. 蓋杯以外の器種について

蓋杯以外の出土品についても、全体的には、陶邑のⅠ型式第5段階からⅡ型式第1段階にかけて普通に見られる形態と共通するものが多い。ただし、蓋杯と同じく、細部においては異なった特色も現れている。なお、器の種類は表2に示したとおり、20種類と多岐にわたる。

まず、器種について見ると、陶邑では全時期を通じて報告例のない器種である小型台付壺、注口土器が、中佐備からは計4点出土している。無蓋高杯や甌、鉢、提瓶、土鍤の中にも、陶邑出土のものとは異なる形態のものがある（挿図10-24, 11-156, 12-177~179, 15-201, 25-257）。製作時期の前後関係を見ると、陶邑では以前に多く作られ、この時期にはほとんど作られなくなっている甌が、中佐備では依然として作られている。しかしその一方で、提瓶については、陶邑での製作開始もⅡ型式以降であり、中佐備でも同時期に作り始められたことが指摘できる。

次に観察の視点を細部にまでおよぼすと、中佐備と陶邑、双方の須恵器の顯著な相違が浮かび上がってくる。その1つは、陶邑ではⅠ型式第4段階ですでにほとんどなくなってしまう土師器的要素の濃い器形が、中佐備には見られることである。挿図9-110~112の小型台付壺の壺の部分や、挿図11-162の直口壺、挿図12-178の鉢がそれで、これらは須恵器の技法で作られているにもかかわらず、形態は土師器的な様相を呈している。また、挿図9-105の脚台や、挿図10-204の無蓋高杯に見られるように、脚部の接合部分が極めて厚いものがある。この他、

陶邑では全く例のない絵画文のある甕（挿図18・21-233）も出土している。

もう1つの注目点として、新しい要素の目立つ器種と古い要素を多く残している器種とがあることがあげられる。例えば、無蓋高杯には新しい要素が目立つ。中佐備ではI型式の特徴を持つAa～Adタイプと、II型式に初現するAe～Agタイプ、両方の無蓋高杯が出土しているが、Aeタイプが出土点数の過半数を占める。その上、Aa～Adタイプについても杯部が浅く、体部の文様のないものが多いというように新しい様相を示すものがほとんどである。なお、無蓋高杯の脚部は、長さの点ではII型式に匹敵するが、II型式の指標とされるいわゆる「長脚一段スカシ」は出土していない。

他方、古い要素の目立つ器種としては、甕があげられる。この中で多いのはTK23に初現する甕と同じ特徴を持つものである。これらは口径が体部径より大きくなるという点で新しい要素も認められるが、頸部はすべて波状文で飾られていて、無文のものではなく、また、体部も肩を作ってヘラで沈線をめぐらすというように古い要素を残しているものが多い。

この他に、特殊なものとして、把手が3方に付いている提瓶が1点出土している（挿図15-201）。

3. 窯体と窯詰めについて

出土した遺物の底部に粒の粗い砂が熔着していることから、床面に粗砂が敷き詰められていたと推定される。これは陶邑のI・II型式の窯に普遍的に認められるもので、少なくとも床面の作りについては陶邑と同じであったことが分かる。

窯詰めについては、遺物の熔着状態から見て、蓋杯、有蓋高杯は蓋をして2段以上に積み重ね、無蓋高杯も正立した状態で同じく2段以上重ねて焼いていたと推定される。なお、蓋杯の中には熔着を防ぐため、砂を蓋の天井部に敷いて重ね焼きをしている例（挿図5-9）もある。甕、小型台付壺、壺、甕、器台などは体部にまで窯壁が入り込んでいたり、口頸部内面に自然釉が付着していることから、正立て窯詰めされていたことが分かる。また、器台については杯部底面にも自然釉が付着しているので、他の土器を上に重ねずに入れて焼いていたと思われる。

4. 中佐備須恵器窯成立の背景

南河内地方の古い須恵器窯としては、河南町東山にある…須賀2号窯が知られている。この窯は朝鮮半島からの渡来人が開いたもので、その時期は陶邑開窯の直後あるいはそれより古い

^{註6}

^{註7}

とされている。^{註8} 中佐備とはきわめて近い位置にあるが、二つの窯の相互関係を示す資料は出土していない。おそらく、中佐備須恵器窯は一須賀2号窯とは無関係に、陶邑の影響のもとで開かれたのであろう。その時期、5世紀末は群集墳の築造が各地で始まり、それに対応するかのように陶邑以外の地域でも須恵器の生産が始まった時期である。陶邑から離れることわずか7kmという近距離にもかかわらず中佐備に同種の窯が造られたのは、もちろん中佐備周辺に須恵器を必要とし、また、生産できる社会的背景があったからであろう。が、一方では、この時期に陶邑の内部にも体制や須恵器工人の立場に変化が起り、工人の地方流出を促す事情があつたことも想像される。

いずれにしても、中佐備須恵器窯は陶邑から移って来た工人の指導によって營まれた、と考えてまず間違いない。その前提に立って、中佐備の須恵器が陶邑と微妙に異なることを説明すれば、次のような仮説が成り立つだろう。

- (1) 陶邑でかつて行われていた古い技法、形態が中佐備に伝えられ、中佐備では新しい時期にまで古い要素が残った（ロクロの回転方向、土師器的な形態、等）。
- (2) 新しい技法や形態も伝わったが、その要素の組合せは必ずしも陶邑の形式にとらわれなかつた（蓋杯の大きさと成形の精粗の関係、器種による新旧要素のパラフキ）。
- (3) 陶邑の影響を受けず、中佐備独自の技法による土器も生産した（極小型蓋杯、小型台付蓋、注口土器、土錐、一部の無蓋高杯や穂、鉢、提瓶、絵画文のある號）。

つまり、中佐備須恵器窯は、陶邑の技術を受け継ぎながらも陶邑土器の踏襲に終わることなく、独立した発展を見せている。これは、この窯を支えた集団が経済的、政治的にも陶邑の勢力圏から独立していたことの結果であろう。6世紀末から7世紀初頭に本市最西部・五軒家にまで陶邑の一部をなすと思われる窯が造られたことを考え合わせると、陶邑（東北地方）と中佐備（南河内南東部）との間に人との交流はあったが、陶邑をかかえる権力は羽曳野丘陵を越えることがなかった。その丘陵の東、石川の流域には、規模の大小は別として、ひとつの地域集団が独立を保っていた。その勢力が中佐備須恵器窯を開いたのであろう。

では、その根拠地がどこにあったか。一定の力をもつた豪族であることから、古墳の築造を念頭において中佐備周辺に同時代の生活の跡を求める、2つの遺跡が浮かび上がる。ひとつは、中佐備の北東約1kmに位置する寛弘寺古墳群である。しかし、ここから出土している須恵器には、明らかに中佐備と異なる特徴が見られる。^{註10} もうひとつは、中佐備の北約1kmの板持占墳群とその西にある西板持遺跡である。この中の板持2号墳からは、中佐備須恵器窯の年代に一致する6世紀前半の蓋杯が数点出土している。^{註11} また、西板持遺跡の中からも同時期の蓋が単独で出ている。このどちらの遺物にも中佐備窯で作られたと推定できるだけの特徴はないが、^{註12} 中佐備と西板持遺跡との距離の近さ、さらに両地域が佐備川によって結ばれていることを考え

ると、この集落に基盤を持つ勢力が中佐備須恵器窯の設営・操業の主体であったと考えてよいのではないか。

(栗田)

- 註1 中村浩「和泉陶色窯出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告第30輯 1978
- 註2 出土遺物の項で、蓋杯を3タイプに分類したが、ここでは陶色と比較するため2タイプとして扱う。中佐備の小型・中型の一部が、陶色の小型に、中型の一部・大型が、大型に相当する。
- 註3 田辺昭三『陶邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ 1966
- 註4 中村浩氏の教示による。
- 註5 中村浩 前掲書
- 註6 堀江門也・中村浩「一須賀古窯跡出土遺物について」『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告第30輯 1978
- 註7 中村浩「須恵器の源流 近畿地方(1)」『日本陶磁の源流』柏書房1984
- 註8 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
- 註9 中村浩「須恵器の生産と流通」『考古学研究』第28巻 第2号 1981
- 註10 大阪府教育委員会『寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅲ』 1985
- 註11 富田林市教育委員会『富田林市板持古墳群調査概報』 1967
- 註12 北野耕平『富田林市史』第一巻 1985

付 遺物観察表

器種	掲出番号 図版番号	遺構名 出土層位	法式(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
杯 蓋	5-1	表 採	口径12.0cm 稜径11.9cm 稜高 2.1cm 器高 4.4cm	○口縁部はわずかに開き、端部は内傾して凹面をなす。天井部はわずかに丸みをもつ。天井部と口縁部の境の稜は明瞭である。 ○天井部外側約4cmは回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は自然黏付着のため不明。他は回転ナダ調整。	胎土 やや粗。1 ~3mmの白色砂 粒を多量に含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、青灰色。 外、暗灰色。 断、灰色。
杯 蓋	5-2	第7層	口径12.7cm 稜径12.2cm 稜高 2.1cm 器高 5.2cm	○口縁部はやや開き気味に下り、端部は内傾して平面をなす。天井部は高く、丸みをもつ。天井部と口縁部の境の稜は明瞭である。 ○天井部外側約4cmは回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナダ調整。	胎土 粗。白色砂 粒を多量に含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内 明青灰 色。 外 暗灰色。 断 灰紫色。
杯 蓋	5-3	表 採	口径11.6cm 稜径11.9cm 稜高 2.1cm 器高 5.6cm	○口縁部はわずかに内傾気味に下り、端部は内傾して凹面をなす。天井部は高く、丸みをもつ。天井部と口縁部の境の稜は短く、にぶい。 ○天井部外側約4cmは回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。他は回転ナダ調整。	胎土 やや密。1 ~2mmの白色砂 粒を多量に含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、暗灰色。
杯 蓋	5-4	第7層	口径12.9cm 稜径12.3cm 稜高2.35cm 器高 5.2cm	○口縁部はわずかに開き、口縁端部は内傾して凹面をなす。天井部は高く、やや平坦面をもつ。天井部と口縁部の境の稜は短く、にぶい。 ○天井部外側約4cmは回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナダ調整。	胎土 粗。白色・ 黒色の砂粒を多 量に含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、青灰色。 外、黒灰色。 断、灰紫色。
杯 蓋	5-5	第7層	口径12.6cm 稜径12.2cm 稜高 2.2cm 器高(4.8cm)	○口縁部は内湾気味に下り、端部近くでわずかに開く。口縁端部は内傾して平面をなす。天井部は頂部が欠失しているが、高く、丸みをもつ。天井部と口縁部の境の稜は短く、にぶい。	胎土 やや密。最 大3.5mmの白色 砂粒を含む。 焼成 やや不良、 やや軟質。 色調 内、淡灰色。 外、淡灰青

器種	標致番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
杯 蓋	5-5	第7層		○天井部外面約4cmは回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 色。 断、灰黄色。
杯 蓋	5-6	表 採	口径12.5cm 棱径12.0cm 棱高 2.1cm 器高 4.1cm	○口縁部はほぼ直面に下り、端部近くでわずかに開く。口縁端部は内傾して段をなす。天井部は頂部が欠失しているが、高く、丸みをもつ。天井部と口縁部の境の稜は短く、にぶい。 ○天井部外面約4cmは回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわりのため不明。他は回転ナデ調整。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、暗灰色。 断、灰色。
杯 蓋	5-7	表 採	口径12.8cm 棱径12.4cm 棱高2.15cm 器高 5.05cm	○口縁部はやや開き気味に下り、端部は内傾して段をなす。天井部は高く、丸みをもつ。天井部と口縁部の境の稜は短く、にぶい。 ○天井部外面約4cmは回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 粗。1~2 mmの白色砂粒を 多量に含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、黒灰色。 断、紫灰色。
杯 蓋	5-8 8-8	第5層	口径13.0cm 棱径12.2cm 棱高2.45cm 器高 4.4cm	○口縁部はなだらかに開き、端部は内傾して段をなす。天井部は低く、平坦面をなし、全体に偏平な感を与える。天井部と口縁部の境の稜は短く、にぶい。 ○天井部外面約4cmは回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 やや粗。最 大4mmの白色砂 粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、青灰色。 外、黒青灰 色。 断、灰紫色。 表面に他の上器片 が付着。
杯 蓋	5-9 8-9	第7層	口径11.6cm 棱径11.7cm 棱高 2.1cm 器高 4.35cm	○口縁部は内方へ下り、端部近くでわずかに開く。口縁端部は内傾して段をなす。天井部は丸みをもつが、でこぼこしている。天井部と	胎土 やや粗。白 色砂粒を少量、 黒色砂粒を多量 に含む。

器種	攝岡番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
杯 蓋	5-9 8-9	第7層		口縁部の境の稜はにぶく、かろうじてわかる程度である。また、一部、稜線のかわりに沈線のめぐるところもある。 ○天井部外面約1/2は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナテ調整。	焼成 良好、堅緻。 色調 内、淡青灰色。 外、青灰色。 断、紫灰色。 天井部に粗砂付着。
杯 蓋	5-10	表 採	口径11.6cm 稜径11.3cm 稜高2.25cm 器高(4.7cm)	○口縁部はやや開き気味に下り、端部は内傾して平面をなす。天井部は頂部が欠失しているが、高く、丸みをもつ。天井部と口縁部の境の稜はにぶく、かろうじてわかる程度である。 ○天井部は磨滅のため調整不明。他は回転ナテ調整。	胎土 やや密。1 ~2mmの白色・黒 色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、灰色。
杯 蓋	5-11	表 採	口径12.0cm 稜径11.5cm 稜高2.0cm 器高(4.6cm)	○口縁部はなだらかに開き、端部はわずかに内傾して段をなす。天井部は高く、尖り気味である。天井部と口縁部の境の稜はにぶく、かろうじてわかる程度である。 ○天井部外面約1/2は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。他は回転ナテ調整。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、灰紫色。
杯 蓋	5-12	表 採	口径11.75cm 稜径11.3cm 稜高2.05cm 器高(4.6cm)	○口縁部はほぼ直に下り、端部近くでわずかに開く。口縁端部は内傾して凹面をなす。天井部は頂部がわずかに欠失しているが、高く、丸みをもつ。天井部と口縁部の境の稜はみられず、沈線をめぐらせることによってそれとわかる程度である。 ○天井部外面約1/2は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナテ調整。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、灰紫色。

器種	拂い番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
杯 蓋	5-13	表 採	口径11.6cm 稜径 10.8cm 稜高2.15cm 器高5.75cm	○口縁部は大きく開き、端部は内傾して凹面をなす。天井部は高く、丸みをもつ。天井部と口縁部の境の稜はみられず、沈線をめぐらせることによってそれとわかる程度である。 ○天井部外面約1/2は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 密。1mm程度の白色砂粒を含む。 焼成 やや不良、やや軟質。 色調 内、暗灰色。外、暗灰色。 断、黒灰色。
杯 蓋	5-14	第7層	口径11.8cm 稜径11.4cm 稜高 2.4cm 器高 4.7cm	○口縁部は内湾気味に下り、端部近くでわずかに開く。口縁端部は内傾して平面をなす。天井部はわずかに丸みをもつ。天井部と口縁部の境の稜はみられず、沈線をめぐらせることによってそれとわかる程度である。 ○天井部外面約1/2は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 やや密。 焼成 不良、軟質。 色調 内、灰白色。外、灰白色。 断、灰白色 (一部茶色。)
杯 蓋	5-15	表 採	口径12.4cm 稜径 11.75cm 稜高 2.0cm 器高 4.9cm	○口縁部ははだらかに開き、端部は内傾して平面をなす。天井部は高く、丸みをもつ。天井部と口縁部の境の稜はみられず、沈線をめぐらせることによってそれとわかる程度である。 ○天井部外面約1/2は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 やや密。 焼成 不良、軟質。 色調 内、灰白色。外、灰色。 断、灰白色。
杯 蓋	5-16	表 採	口径10.75cm 稜径 9.9cm 稜高 2.3cm 器高 (4.7cm)	○口縁部ははだらかに開き、端部はわずかに内傾して平面をなす。天井部は頂部が欠失しているが、高く、丸みをもつ。天井部と口縁部の境の稜はみられず、沈線をめぐらせることによってそれとわかる程度である。	胎土 やや密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰青色。外、灰青色。 断、紫灰色。

器種	攝団番号 図版番号	遺構図 出土場所	法星(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
杯 蓋	5-16	表 採		○天井部外面約4分は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	
杯 蓋	5-17 8-17	表 採	口径12.0cm 稜径11.5cm 稜高 1.9cm 器高 4.7cm	○口縁部はなだらかに開き、端部は内傾して凹面をなす。天井部は丸みをもつ。天井部と口縁部の境の稜は短く、にぶい。 ○天井部外面約4分は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 粗。1~2mmの白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、黒灰色。 断、紫灰色。
杯 蓋	5-18	表 採	口径12.2cm 稜径11.8cm 稜高1.85cm 器高 4.5cm	○口縁部はやや開き気味に下り、端部は内傾して凹面をなす。天井部は丸みをもつ。天井部と口縁部の境の稜は短く、にぶい。 ○天井部外面約4分は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、青灰色。 外、黒灰青色。 断、紫灰色。
杯 蓋	5-19	表 採	口径10.6cm 稜径10.1cm 稜高 1.8cm 器高(3.6cm)	○口縁部は内湾して下り、端部近くで大きく開く。口縁端部は内傾して凹面をなす。天井部は頂部近くが欠失しているが、高い。天井部と口縁部の境の稜は短く、にぶい。 ○残存部分はすべて回転ナデ調整。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、暗灰色。 断、灰色。
杯 蓋	5-20	表 採	口径11.5cm 稜径11.4cm 稜高 1.8cm 器高(3.75cm)	○口縁部は内湾して下り、端部近くで大きく開く。口縁端部は内傾して凹面をなす。天井部は低く、平坦面をなし、全体に扁平な感を与える。天井部と口縁部の境の稜は短く、にぶい。 ○天井部外面約4分は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、灰色。
				○口縁部はやや内方へ下り、端部は	胎土 密。

器種	類別番号 国版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
杯 蓋	5-21	第6層	口径10.9cm 稜径11.1cm 稜高 1.5cm 器高 4.4cm	内傾して凹面をなす。天井部は高く、丸みをもつ。天井部と口縁部の境の稜はにぶく、かろうじてわかる程度である。 ○天井部外縁約2/3は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。天井部内面は回転ナデ調整の上から不定方向のナデ調整を附加している。他は回転ナデ調整。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰青色。 外、灰色。 断、灰紫色。
杯 蓋	5-22 8-22	第7層	口径12.5cm 稜径12.7cm 稜高 1.8cm 器高 4.6cm	○口縁部は内方へ下り、端部は内傾して段をなす。天井部は高く、丸みをもつ。天井部と口縁部の境の稜はにぶく、かろうじてわかる程度である。 ○天井部外縁約2/3は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 やや粗。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰青色。 外、灰青色。 断、灰青色。
杯 蓋	5-23	表 採	口径11.8cm 稜径11.6cm 稜高 1.9cm 器高 5.3cm	○口縁部はほぼ垂直に下り、端部はわずかに内傾して平面をなす。天井部は高く、丸みをもつ。天井部と口縁部の境の稜はにぶく、かろうじてわかる程度である。 ○天井部外縁約2/3は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。また、回転ヘラ削り調整の上から一部にカキ目調整を附加している。他は回転ナデ調整。	胎土 密。1~2mmの白色・黒色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、灰色。
杯 蓋	5-24	表 採	口径12.4cm 稜径12.4cm 稜高1.95cm 器高(3.9cm)	○口縁部は内方へ下り、端部でわずかに開く。口縁端部は内傾して段をなす。天井部は頂部が欠失しているが、低く、平坦面をなし、全体に偏平な感を与える。天井部と口縁部の境の稜はみられず、沈線	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、灰色。

器種	捕獲番号 図版番号	遺構図 出土調査	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
杯 蓋	5-24	表 採		をめぐらせるこことによってそれと わかる程度である。 ○天井部外面約半は回転ヘラ削り調 整。ヘラ削り時のロクロの回転方 向は右まわり。他は回転ナテ調整。	
杯 蓋	5-25	表 採	口径13.2cm 稜径13.4cm 稜高 2.5cm 器高(4.95cm)	○口縁部はほぼ垂直に下り、端部で 内傾して凹面をなす。天井部は頂部 が欠失しているが、丸みをもつ。天 井部と口縁部の境の稜は明瞭である。 ○天井部外面約半は回転ヘラ削り調 整。ヘラ削り時のロクロの回転方 向は左まわり。他は回転ナテ調整。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰青色。 外、灰青色。 断、紫灰色。
杯 蓋	5-26	表 採	口径14.3cm 稜径13.25cm 稜高2.75cm 器高(4.8cm)	○口縁部は内湾して下り、端部近く で開く。口縁端部は内傾して平面 をなす。天井部は頂部が欠失して いるが、丸みをもつ。天井部と口 縁部の境の稜は短く、にぶい。 ○天井部外面約半は回転ヘラ削り調 整。ヘラ削り時のロクロの回転方 向は左まわり。他は回転ナテ調整。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、黒灰色。 断、灰紫色。
杯 蓋	5-27	表 採	口径14.2cm 稜径13.2cm 稜高2.75cm 器高(4.9cm)	○口縁部は内湾して下り、端部近く で大きく開く。口縁端部は内傾し て凹面をなす。天井部は頂部が欠 失しているが、丸みをもつ。天井 部と口縁部の境の稜は短く、にぶ い。 ○天井部外面約半は回転ヘラ削り調 整。ヘラ削り時のロクロの回転方 向は右まわり。他は回転ナテ調整。	胎土 密。2mmの 黒色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、黒灰色。 断、灰紫色。
杯 蓋	5-28	表 採	口径14.3cm 稜径14.2cm 稜高 1.9cm 器高(4.8cm)	○口縁部はほぼ垂直に下り、端部は わずかに内傾して段をなす。天井 部は頂部が欠失しているが、丸み をもつ。天井部と口縁部の境の稜 は明瞭である。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、紫灰色。

器種	撿出番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
杯 蓋	5-28	表 採		○天井部外縁約2分は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	
杯 蓋	5-29	表 採	口径13.2cm 稜径13.6cm 稜高 1.6cm 器高(4.7cm)	○口縁部は内方へ下り、端部はわずかに内傾して段をなす。天井部は頂部が欠失しているが、丸みをもつ。天井部と口縁部の境の稜は短く、にぶい。 ○天井部外縁約2分は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 密。 焼成 不良、軟質。 色調 内、灰白色。 外、灰白色。 断、灰白色。
杯 蓋	5-30	表 採	口径14.2cm 稜径14.4cm 稜高 2.2cm 器高(5.1cm)	○口縁部はやや内方へ下り、端部近くでわずかに開く。口縁端部は内傾して平面をなす。天井部は頂部が欠失しているが、丸みをもつ。天井部と口縁部の境の稜は短く、にぶい。 ○大井部外縁約2分は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は自然釉付着のため不明。他は回転ナデ調整。	胎土 粗。白色砂粒を多量に含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、青灰色。 外、黒灰色。 断、紫灰色。 天井部に窓体付着。
杯 蓋	5-31 8-31	第7層	口径13.3cm 稜径13.4cm 稜高 3.2cm 器高5.15cm	○口縁部は内湾気味に下り、端部近くでわずかに開く。口縁端部は内傾して凹面をなす。天井部は丸みをもつ。天井部と口縁部の境の稜は短く、にぶい。 ○天井部外縁約2分は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 やや密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、明青灰色。 外、暗灰色。
杯 蓋	5-32	表 採	口径13.5cm 稜径13.2cm 稜高 2.3cm 器高(4.7cm)	○口縁部は内湾気味に下り、端部近くでわずかに開く。口縁端部は内傾して凹面をなす。天井部は欠失しているが、丸みをもつ。天井部と口縁部の境の稜は短く、にぶい。	胎土 やや密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、黒灰色。

器種	捕獲番号 貯蔵番号	遺構 図 出土部位	法量 (cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
杯 蓋	5-32	表 採		○天井部外面約半は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	
杯 蓋	5-33	表 採	口徑14.3cm 稜径13.5cm 稜高 2.4cm 器高(4.5cm)	○口縁部は内窓氣味に下り、端部近くで大きく開く。口縁端部は内傾して凹面をなす。天井部は丸みをもつ。天井部と口縁部の境の稜は短く、にぶい。 ○天井部外面約半は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。天井部内面中央部に同心円文スタンプが残る。他は回転ナデ調整。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰青色。 外、黒灰色。 断、紫灰色。 天井部外面にヘラ記号有り。
杯 蓋	5-34	表 採	口徑 14.7cm 稜径14.1cm 稜高 2.2cm 器高(3.8cm)	○口縁部はわずかに開き、端部は内傾して段をなす。天井部は欠失しているため不明。天井部と口縁部の境の稜はにぶく、かろうじてわかる程度である。 ○残存部分はすべて回転ナデ調整。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰白色。 断、灰色。
杯 蓋	5-35	表 採	口徑13.9cm 稜径13.2cm 稜高 2.2cm 器高(3.8cm)	○口縁部はだらかに開き、端部はわずかに内傾して段をなす。天井部は欠失のため不明。天井部と口縁部の境の稜はにぶく、かろうじてわかる程度である。 ○残存部分はすべて回転ナデ調整。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、灰色。
杯 蓋	5-36	表 採	口徑13.2cm 稜径11.8cm 稜高 2.45cm 器高(4.7cm)	○口縁部は大きく開き、端部は内傾して平面をなす。天井部は欠失しているが、高く、丸みをもつ。天井部と口縁部の境の稜はみとめられず、沈線をめぐらせることによってそれとわかる程度である。 ○天井部外面約半は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、黒灰色。 断、黒灰色。 天井部に他の土器を重ねて焼いていた痕跡がある。

器種	攝 ^K 番号 國立番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徵 ○形態 ○技法 ○文様	備考
杯 蓋	5-37	表 採	口径15.1cm 稜径15.1cm 稜高2.95cm 器高(4.7cm)	○口縁部はわずかに開き、端部は内傾して凹面をなす。天井部は欠失しているため不明。天井部と口縁部の境の稜は明瞭である。 ○残存部分はすべて回転ナデ調整。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰青色。 外、灰色。 断、灰紫色。
杯 蓋	5-38	表 採	口径16.0cm 稜径14.7cm 稜高 2.8cm 器高(5.0cm)	○口縁部はなだらかに開き、端部近くでさらに大きく開く。口縁端部は内傾して凹面をなす。天井部は頂部が欠失しているが、わずかに丸みをもつ。天井部と口縁部の境の稜は短く、にぶい。 ○天井部外面約3/4は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 密。1~2mmの白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、暗灰色。 断、紫灰色。
杯 蓋	5-39	表 採	口径15.9cm 稜径15.7cm 稜高 2.6cm 器高 5.8cm	○口縁部は内湾して下り、端部近くで大きく開く。口縁端部は内傾して凹面をなす。天井部は丸みをもつ。天井部と口縁部の境の稜は短く、にぶい。 ○天井部外面約3/4は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、灰紫色。
杯 蓋	5-40	表 採	口径15.6cm 稜径14.1cm 稜高 2.5cm 器高(5.0cm)	○口縁部は内湾気味に下り、端部近くで大きく開く。口縁端部は内傾して段をなす。天井部は欠失しているが、高く、丸みをもつ。天井部と口縁部の境の稜は短く、にぶい。 ○天井部外面約3/4は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、灰紫色。
杯 蓋	5-41	第5層	口径15.5cm 稜径14.5cm 稜高 2.4cm	○口縁部は大きく開き、端部は内傾して凹面をなす。天井部は頂部が欠失しているが、高い。天井部と	胎土 密。 焼成 不良、軟質。 色調 内、灰茶色。

器種	損傷箇所 図版番号	遺構名 出土属位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
杯 蓋	5-41	第5層	器高(4.5cm)	○口縁部の境の稜はにぶく、かろうじてわかる程度である。 ○残存部分はすべて回転ナデ調整。	外、灰白色。 断、灰茶色。
杯 蓋	5-42	表 採	口径15.6cm 稜径15.2cm 稜高 2.2cm 器高(4.4cm)	○口縁部はわずかに開き、端部は内傾して平面をなす。天井部は欠失しているため不明。天井部と口縁部の境の稜はにぶく、かろうじてわかる程度である。 ○天井部外面約半は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は不明。他は回転ナデ調整。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、暗灰色。 断、灰色。
杯 身	6-43 8-43	表採	口径7.95cm 受部径 9.1cm たちあがり 高 1.4cm 器高 4.1cm	○たちあがりはわずかに内傾する。口縁端部は内傾して段をなす。受部は水平にのび、端部は丸くおさまる。底部は深く、丸みをもつ。 ○底部外面約半は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、紫灰色。
杯 身	6-44	表 採	受部径9.7cm 器高(4.4cm)	○たちあがりはわずかに内傾する。口縁部は欠失しているため不明。受部は水平にのびるが、中位でふくらんでいる。端部は丸くおさまる。底部は深く、丸みをもつ。 ○底部外面約半は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰青色。 外、暗灰色。 断、灰紫色。
杯 身	6-45	表 採	口径 8.3cm 受部径10.0cm たちあがり 高 1.45cm 器高(4.1cm)	○たちあがりは内傾したのち、ゆるやかに直立する。口縁端部は内傾して段をなす。受部はほぼ水平にのび、端部は丸くおさまる。底部は深い。 ○底部外面の調整は自然釉付着のためはっきりしない。観察可能なところはすべて回転ナデ調整。	胎土 密。2~3mmの白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、灰色。

器種	撲滅番号 國版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
杯身	6-46 9-46	第6層	口径 9.9cm 受部径 13.1cm たちあがり 高 1.6cm 器高(5.6cm)	○たちあがりは大きく内傾する。口縁端部はわずかに内傾して段をなす。受部は斜め上方にのび、端部は丸くおさまる。底部は深い。 ○底部外面約2分は回転ヘラ削り調整。 ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。 ○底体部外周に波状文(1単位10本)が1帯めぐる。施文方向は右まわり。	胎土 密。1~2mmの白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗青灰色。 外、暗青灰色。 断、紫灰色。
杯身	6-47	表 採	口径10.4cm 受部径12.2cm たちあがり 高 1.6cm 器高 4.6cm	○たちあがりは内傾する。口縁部は外側にわずかに肥厚する。口縁端部はわずかに内傾して段をなす。受部はやや斜め上方にのび、端部は丸くおさまる。底部は浅く、平坦である。 ○底部外面約2分は回転ヘラ削り調整。 ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 やや密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、青灰色。 外、黒灰色。 断、灰紫色。 受部上面に蓋の一部が、底部外面に粗砂が付着している。
杯身	6-48 9-48	第7層	口径10.5cm 受部径13.3cm たちあがり 高 1.6cm 器高 4.4cm	○たちあがりは大きく内傾したのち、直立する。口縁端部は内傾して凹面をなす。受部はやや斜め上方にのび、端部は丸くおさまる。底部は浅く、平坦である。 ○底部外面約2分は回転ヘラ削り調整。 ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 やや密。1~3mmの白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰青色。 外、灰青色。 断、灰青色。
蓋杯	6-49	表 採	杯蓋 口径12.4cm 稜径11.8cm 稜高 1.7cm 器高 3.5cm	杯蓋 ○口縁部はなだらかに開き、端部は内傾して凹面をなす。天井部は低く、平坦面をなし、全体に偏平な感を与える。天井部と口縁部の境の稜はにぶく、かろうじてわかる程度である。 ○天井部外面約2分は回転ヘラ削り調	杯蓋・杯身とも胎土、焼成、色調が似ている。 胎土 やや粗。1mm程度の黒色砂粒を含む。白色砂粒も含む。 焼成 良好、堅緻。

器種	査定番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
蓋 杯	6-49	表 採	杯身 口径10.2cm 受部径12.4cm たちあがり 高 1.4cm 器高(4.1cm)	整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は自然釉付着のため不明。他は回転ナデ調整。 杯身 ○たちあがりは内傾する。口縁端部は内傾して凹面をなす。受部は小さく、水平にのびる。端部は丸くおさまる。底部は浅い。 ○底部外面約4分は回転ヘラ削り調整を行っているが、その上を指で押された痕跡がある。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	色調 内、灰青色。 外、黒灰青色。 断、灰青色 杯蓋の外面全体にまた、杯身の一部に自然釉が付着しているが、ともに自然釉に気泡が多いり、一部ではガラス状になっている。
杯 身	6-50	表 採	口径10.1cm 受部径12.1cm たちあがり 高 1.6cm 器高4.75cm	○たちあがりは内傾する。口縁端部は内傾して凹面をなす。受部は小さく、水平にのびる。端部は尖る。底部は浅く、丸みをもつ。 ○底部外面約4分は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。底部内面中央部に同心円文スタンプが残る。他は回転ナデ調整。	胎土 粗。最大4mmの白石砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、青灰色。 外、黒灰黑色。 断、紫灰色。 受部に杯蓋の一部が、また、底部外面に窓体が付着している。
杯 身	6-51 9-51	表 採	口径10.8cm 受部径12.7cm たちあがり 高 1.6cm 器高 4.9cm	○たちあがりはわずかに内傾する。口縁端部は内傾して凹面をなす。受部は短く、先端でわずかに下方へさがる。端部は丸くおさまる。底部は浅く、丸みをもつ。 ○底部外面約4分は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 やや密。1~2mmの白色砂粒を含む。黒色砂粒もわずかであるが含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、青灰色。 外、暗青灰色。 受部に杯蓋の一部が付着している。

器種	補圖番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
杯身	6-52	表 採	口径 9.7cm 受部径 11.8cm たちあがり 高 1.4cm 器高(4.5cm)	○たちあがりは大きく内傾したのち、ゆるやかに直立する。口縁端部は内傾して平坦面をなす。受部は小さく、水平にのびる。端部は尖り気味におさまる。底部は浅く、平坦である。 ○底部外周約 $\frac{1}{3}$ は回転へラ削り調整。 ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 やや粗。白色砂粒を含む。 焼成 良好。堅緻。 色調 内、青灰色。 外、暗青灰色。 断、青灰色。
杯身	6-53	表 採	口径 10.0cm 受部径 12.0cm たちあがり 高 1.4cm 器高 4.1cm	○たちあがりは内傾する。口縁端部は内傾して凹面をなす。受部は水平にのび、端部は丸くおさまる。 底部は浅く、やや丸みをもつ。 ○底部外周約 $\frac{1}{3}$ は回転へラ削り調整。 ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 密。1mmの白色砂粒をわずかに含む。 焼成 良好。堅緻。 色調 内、青灰色。 外、黒灰色。 断、灰紫色。 受部に杯蓋の一部が、また、底部外面には粗砂が付着している。
杯身	6-54	表 採	口径 10.9cm 受部径 12.7cm たちあがり 高 0.95cm 器高(4.2cm)	○たちあがりは極めて短く、内傾する。口縁端部はわずかに内傾して平坦面をなす。受部は厚ぼったく水平にのびる。端部は丸くおさまる。底部は浅い。 ○底部外周約 $\frac{1}{3}$ は回転へラ削り調整。 ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 密。 焼成 良好。堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、暗灰色。 断、暗灰色。
杯身	6-55 9-55	第6層	口径 10.55cm 受部径 12.4cm たちあがり 高 1.4cm 器高 4.35cm	○たちあがりは大きく内傾したのち、そりかえってたちあがる。口縁端部は内傾して凹面をなす。受部はわずかに斜め上方にのびる。端部は丸くおさまる。底部は浅く、平坦である。 ○底部外周約 $\frac{1}{3}$ は回転へラ削り調整。	胎土 やや密。白色砂粒を多量に含む。 焼成 良好。堅緻。 色調 内、青灰色。 外、青灰色。 断、紫灰色。

器種	採取番号 回収番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
杯身	6-55 9-55	第6層		ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	底部外面に窓体が付着している。
杯身	6-56 9-56	第7層	口径10.8cm 受部径12.7cm たちあがり 高 1.2cm 器高4.65cm	○たちあがりは大きく内傾したのち、直立する。口縁端部は内傾して凹面をなす。受部は水平にのび、端部は丸くおさまる。底部は浅く、やや丸みをもつ。 ○底部外面約半分は回転ヘラ削り調整。 ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 やや密。白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、青灰色。 外、青灰色。 断、青灰色。
杯身	6-57	表 採	口径 9.6cm 受部径12.0cm たちあがり 高 0.9cm 器高(4.6cm)	○たちあがりは極めて短く、また、大きく内傾する。口縁端部は内傾して凹面をなす。受部は厚ぼったく、斜め上方にのびる。端部は丸くおさまる。底部は深く、丸みをもつ。 ○底部外面約半分は回転ヘラ削り調整。 ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 やや密。白色砂粒を含む。 焼成 不良、やや軟質。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、灰色。
杯身	6-58 9-58	第7層	口径10.4cm 受部径12.75cm たちあがり 高 1.45cm 器高 5.3cm	○たちあがりは内傾したのち、中位でゆるやかにたちあがる。口縁端部は内傾して凹面をなす。受部は水平にのびる。端部は丸くおさまる。底部は深く、丸くおさまる。 ○底部外面約半分は回転ヘラ削り調整。 ヘラ削りは丁寧に行なっている。 ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 密。白色の微砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰茶色。
杯身	6-59	表 採	口径12.6cm 受部径15.1cm たちあがり 高 1.5cm 器高 4.6cm	○たちあがりは内傾する。口縁端部は内傾して凹面をなす。受部は水平にのびたのち、斜め上方につまみあがる。端部は丸くおさまる。底部は浅く、中位であげ底になっている。全体に偏平な感を与える。	胎土 密。1~2mmの白色・黒色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰青色。 外、黒灰色。

器種	標図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
杯身	6-59	表採		○底部外面約半は回転ヘラ削り調整。 ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 断、灰青紫色。
杯身	6-60 9-60	第7層	口径11.6cm 受部径13.9cm たちあがり 高 1.7cm 器高 5.0cm	○たちあがりは内傾する。口縁端部は内傾して凹面をなす。受部はほぼ水平にのびる。端部は肥厚して丸くおさまる。底部は浅く、平坦である。 ○底部外面約半は回転ヘラ削り調整。 ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。なお、底部内面中央は回転ナデ調整の上を一定方向のナデ調整で仕上げている。	胎土 やや密。1~2mmのくさり砂と白色・黒色砂粒を多量に含む。 焼成 不良、軟質。色調 内、明茶褐色。 外、茶灰色。
杯身	6-61 9-61	第7層	口径12.8cm 受部径14.9cm たちあがり 高 1.6cm 器高 5.3cm	○たちあがりは大きく内傾したのち、中位でゆるやかにたちあがる。口縁端部は凹面をなす。受部は水平にのび、端部は丸くおさまる。底部は浅く、丸くおさまる。 ○底部外面約半は回転ヘラ削り調整。 ヘラ削りは丁寧に行なっている。 ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 やや密。最大8mmの白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。色調 内、明青灰色。 外、明青灰色。
杯身	6-62 10-62	表採	口径12.7cm 受部径15.4cm たちあがり 高 1.6cm 器高 5.1cm	○たちあがりは大きく内傾する。口縁端部は内傾して凹面をなす。受部は斜め上方にのびる。端部は丸くおさまる。底部は浅く、平坦である。 ○底部外面約半は回転ヘラ削り調整。 ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。色調、内、灰色。 外、暗灰色。 断、灰色。
杯身	6-63	表採	口径12.7cm	○たちあがりはわずかに内傾する。	胎土 やや密。1

器種	攝(番号) 国歴番号	遺構名 出土場所	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
杯身	6-63	表 採	受部径14.7cm たちあがり 高 1.6cm 器高(4.5cm)	口縁端部は内傾して凹面をなす。 受部は斜め上方にのび、端部は丸くおさまる。底部は浅い。 ○底部外面約3分は回転へラ削り調整。 ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	~2mmの白色砂粒を含む。 焼成 不良、軟質。 色調 内、灰黄色。 外、灰黄色。 断、灰黄色。
杯身	6-64 10-64	第7層	口径11.0cm 受部径14.1cm たちあがり 高 1.35cm 器高 4.8cm	○たちあがりは大きく内傾する。口縁端部は丸くおさまる。受部は水平にのびたのち、斜め上方にのびる。端部は丸くおさまる。底部は浅く、丸くおさまる。 ○底部外面約3分は回転へラ削り調整。 ヘラ削り時のロクロの回転方向は磨滅のため不明。他は回転ナデ調整。	胎土 やや粗。1~3mmの褐色砂粒を多量に含む。 焼成 不良、軟質。 色調 内、灰黄色。 外、灰黄色。
杯身	6-65 10-65	第6層	口径11.5cm 受部径13.7cm たちあがり 高 1.4cm 器高 5.7cm	○たちあがりは内傾する。口縁端部は内傾して段をなす。受部は短くやや斜め上方にのびる。端部は丸くおさまる。底部は深く、平坦である。 ○底部外面約3分は回転へラ削り調整。 ヘラ削り時のロクロの回転方向は磨滅のため不明。他は回転ナデ調整。	胎土 やや密。最大4mmの白色砂粒を含む。 焼成 不良、軟質。 色調 内、淡茶褐色。 外、淡茶褐色。
杯身	6-66 10-66	第7層	口径12.05cm 受部径14.35cm たちあがり 高 1.7cm 器高 5.2cm	○たちあがりは大きく内湾したのち外反する。口縁端部は内傾して凹面をなす。受部は水平にのび、端部は丸くおさまる。底部は深く、丸くおさまる。 ○底部外面約3分は回転へラ削り調整。 ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 密。白色の微砂粒を含む。 焼成 不良、軟質。 色調 内、茶褐色。 外、灰茶褐色。 断、明茶褐色。 底部外面ほぼ中央にヘラ記号が有る。

器種	採取番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
杯身	6-67 10-67	第7層	口径11.6cm 受部径4.35cm たちあがり 高 1.7cm 器高 5.9cm	○たちあがりは内傾する。口縁端部は内傾して凹面をなす。受部は厚ぼったく、水平にのびる。端部は丸くおさまる。底部は深く、平坦である。 ○底部外面約 $\frac{1}{4}$ は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 粗。白色砂粒を多量に含む。 焼成 良好、堅緻。色調 内、青灰色。外、淡灰色。底部外面にヘラ記号が有る。
杯身	6-68 10-68	第7層	口径12.5cm 受部径5.05cm たちあがり 高 1.65cm 器高 6.4cm	○たちあがりは内傾する。口縁端部は内傾して段をなす。受部は厚ぼったく、やや斜め上方にのびる。端部は丸くおさまる。底部は深く、丸くおさまる。 ○底部外面約 $\frac{1}{4}$ は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 密。白色の微砂粒を含む。 焼成 不良、軟質。色調 内、灰白色。外、灰白色。全体に磨滅している。
杯身	6-69	表 採	口径11.4cm 受部径3.15cm たちあがり 高 1.55cm 器高(4.3cm)	○たちあがりはやや内傾する。口縁端部は内傾して凹向をなす。受部は厚ぼったく、やや斜め上方にのびる。端部は丸くおさまる。底部は欠失のため不明。 ○残存部分はすべて回転ナデ調整。	胎土 やや密。白色砂量を含む。 焼成 良好、堅緻。色調 内、青灰色。外、黒灰色。断、紫灰色。
杯身	6-70	表 採	口径12.75cm 受部径5.15cm たちあがり 高 1.05cm 器高(4.9cm)	○たちあがりは大きく内傾したのち、たちあがる。口縁端部は内傾して凹面をなす。受部は小さく、斜め上方に大きくのびる。端部は丸くおさまる。底部は浅く、丸くおさまる。 ○底部外面約 $\frac{1}{4}$ は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 密。白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。色調 内、赤茶色。外、赤茶色。断、赤茶色。
杯身	6-71 10-71	第7層	口径11.5cm 受部径3.7cm たちあがり	○たちあがりは内傾したのち、わずかにたちあがる。口縁端部は内傾して凹面をなす。受部は厚ぼった	胎土 やや密。1mmのくさり疊を含む。また、1mmの

器種	捕獲番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
杯身	6-71 10-71	第7層	高 1.4cm 器高 5.1cm	く短い。斜め上方にのび、端部は丸くおさまる。底部は浅く、丸くおさまる。 ○底部外面約3/4は回転ヘラ削り調整。 ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	黒色砂粒も含む。 焼成 不良、軟質。 色調 内、明茶色。 外、茶褐色。
杯身	6-72	表 採	口径13.0cm 受部径15.6cm たちあがり 高 1.9cm 器高(5.3cm)	○たちあがりは内傾したのち、ゆるやかにたちあがる。口縁端部は内傾して凹面をなす。受部は小さく、斜め上方に大きくなる。底部は浅く、丸くおさまる。 ○底部外面約3/4は回転ヘラ削り調整。 ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 やや粗。白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、青灰色。 外、青灰色。 断、紫灰色。 外面に窓体が付着している。また、一部表面が剝離している。
杯身	6-73	表 採	口径13.5cm 受部径16.4cm たちあがり 高 1.5cm 器高(4.9cm)	○たちあがりは内傾する。口縁端部は内傾して凹面をなす。受部は小さく斜め下方へのびる。底部は浅い。 ○底部外面約3/4は回転ヘラ削り調整。 ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 やや粗。白色砂粒を多量に含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、青灰色。 外、暗灰色。 断、青灰色。
杯身	6-74	表 採	口径13.9cm 受部径16.3cm たちあがり 高 1.6cm 器高(5.4cm)	○たちあがりはやや内傾し、端部近くで肥厚する。口縁端部は内傾して凹面をなす。受部は厚ぼったく、水平にのびる。端部は丸くおさまる。 ○底部外面約3/4は回転ヘラ削り調整。 ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 やや密。 焼成 不良、軟質。 色調 内、赤黄褐色。 外、赤黄褐色。
杯身	6-75 10-75	第7層	口径14.4cm 受部径16.6cm たちあがり	○たちあがりは大きく内傾したのち、約2/3のところから内湾しながらゆるやかにたちあがる。口縁端部は	胎土 やや密。1 ~3mmの白色・黒色砂粒を含む。

器種	掲載番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徵 ○形態 ○技法 ○文様	備考
杯身	6-75 10-75	第7層	高 1.85cm 器高6.15cm	内傾して凹面をなす。受部は短く厚ぼったい。水平にのび、端部は丸くおさまる。底部は浅く、あげ底である。 ○底部外面約 $\frac{1}{2}$ は回転ヘラ削り調整。 ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、暗灰色。 断、暗灰色。
杯身	6-76 11-76	第6層	口径13.4cm 受部径15.9cm たちあがり 高 1.75cm 器高 6.8cm	○たちあがりは大きく内傾したのち、端部近くで直立する。口縁端部は内傾して凹面をなす。受部は短く、大きく斜め上方にのびる。端部は丸くおさまる。底部は深く、丸くおさまる。 ○底部外面約 $\frac{1}{2}$ は回転ヘラ削り調整。 ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 やや粗。1 ~3mmの白色砂粒 を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、青灰色。 外、青灰色。 断、紫灰色。 底部外面にヘラ記 号が有る。
杯身	6-77 11-77	第7層	口径13.5cm 受部径15.9cm たちあがり 高 2.05cm 器高 6.5cm	○たちあがりはゆるやかに内傾する。口縁端部は内傾して凹面をなす。受部は小さく、水平にのびる。端部は丸くおさまる。底部は深く丸くおさまる。 ○底部外面約 $\frac{1}{2}$ は回転ヘラ削り調整。 ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 やや粗。白 色砂粒を多量に含 む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、青灰色。 外、青灰色。 断、紫灰色。 受部に杯蓋の口縁 部が付着している。
杯身	6-78 11-78	第7層	口径13.15cm 受部径15.2cm たちあがり 高 1.25cm 器高 4.7cm	○たちあがりは短く、大きく内傾する。口縁端部は内傾して段をなす。受部は小さく、斜め上方にのびる。端部は丸くおさまる。底部は浅く、丸くおさまる。 ○底部外面約 $\frac{1}{2}$ は回転ヘラ削り調整。 ただし、底部外面に自然釉と窓壁 が付着しているため、ヘラ削りの 原体は不明瞭である。ヘラ削り時 のロクロの回転方向は右まわり。	胎土 粗。黒色砂 粒を多量に含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰青色。 外、暗灰色。

器種	調査番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
杯身	6-78	第7層		他は回転ナデ調整。	
高杯蓋	9-79 11-79	表 採	口径13.4cm 稜径12.8cm つまみ径 3.75cm 稜高2.45cm つまみ高 1.05cm 器高5.85cm	○口縁部はわずかに開き、端部は内傾して凹面をなす。犬井部は比較的高く、わずかに丸みをもつ。天井部と口縁部の境の稜は明瞭である。つまみは扁平で中央が凹状にくぼむ。 ○天井部外面約2分は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整であるが、犬井部内面中央は回転ナデ調整の上を一定方向のナデ調整で仕上げている。つまみは貼り付けている。	胎土 粗。1~3mmの白色砂粒を多量に含む。 焼成 良好、堅緻。色調 内、黒灰青色。外、黒灰色。断、灰青色。
高杯蓋	9-80	第6層	つまみ径 5.05cm つまみ高 1.4cm 器高(5.0cm)	○口縁部は欠失しているため不明。つまみは大きく、偏平である。つまみの上面は凹状を呈するが中央部がふくらむ。 ○天井部外面約2分は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。つまみは貼り付けている。	胎土 やや密。1~2mmの白色・黒色砂粒を多量に含む。 焼成 良好、堅緻。色調 内、灰色。外、灰色。断、暗灰紫色。天井部外面には窓体が付着している。
高杯蓋	9-81	表 採	稜径12.8cm つまみ径 4.0cm つまみ高 0.85cm 器高(3.9cm)	○口縁部は欠失しているため不明。犬井部と口縁部の境の稜は比較的明瞭である。つまみは扁平で中央が凹状にくぼむ。 ○天井部外面約2分は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。つまみは貼り付けている。	胎土 粗。1~3mmの白色砂粒を多量に含む。 焼成 良好、堅緻。色調 内、青灰色。外、暗灰色。断、紫灰色。
	9-82	第5層	稜径14.05cm	○口縁部は欠失しているため不明。	胎土 やや密。

器種	攝図番号 出版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
高杯蓋	9-82	第5層	つまみ径 3.65cm つまみ高 0.95cm 器高(3.6cm)	つまみは偏平で中央が凹状にくぼむ。 ○天井部外縁約2/3は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。つまみは貼り付けている。	~3mmの白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗青灰色。 外、暗灰色。 断、暗青灰色。
高杯蓋	9-83	表 採	棱径 14.2cm つまみ径 3.5cm つまみ高 3.3cm 器高(4.0cm)	○口縁部は欠失しているため不明。 天井部は丸みをもつ。天井部と口縁部の境の稜は短く、にぶい。つまみは偏平であるが、中央が大きく凹状にくぼむ。 ○天井部外縁約2/3は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。つまみは貼り付けている。	胎上 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、灰色。 天井部外面には蒸体が付着している。
高杯蓋	9-84	表 採	棱径 11.6cm つまみ径 2.8cm つまみ高 0.9cm 器高(4.3cm)	○口縁部は欠失しているため不明。 天井部は丸みをもつ。天井部と口縁部の境の稜は短く、にぶい。つまみは偏平であるが、中央が大きく凹状にくぼむ。 ○天井部外縁は自然釉が付着しているため調整不明。内面は回転ナデ調整。つまみは貼り付けている。	胎上 やや密。1~2mmの黒色砂粒を多量に含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰青色。 外、暗灰色。 断、灰色。
有蓋高杯・高杯蓋	9-85	第6層	高杯 脚基部径 5.6cm 把部径9.0cm 脚部高4.9cm 器高(6.9cm)	高杯 ○口縁部は欠失しているため不明。 脚部は大きく開く。脚端部はわずかに内傾する凹面をなす。脚柱部のほぼ中央に3方向、円孔が穿たれている。 ○杯部底部外縁は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎上 密。白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、紫灰色。 外、灰褐色。

器種	攝岡番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
有蓋高杯・高杯蓋	9-85	第6層	高杯蓋 縦径13.6cm つまみ径 3.8cm つまみ高 1.0cm 器高(3.4cm)	高杯蓋 ○口縁部は欠失しているため不明。 天井部は丸みをもつ。天井部と口縁部の境の稜は短く、にぶい。つまみは偏平であるが、中央が大きく凹状にくぼむ。 ○天井部外縁約4分は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。つまみは貼り付けている。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、青灰色。 外、灰色。
有蓋高杯・高杯蓋	9-86	表 採	高杯 裾部径9.3cm 器高(1.6cm)	高杯 ○杯部は欠失しているため不明。脚部は大きく開く。裾端部は高杯蓋と熔着しているため不明。脚柱部に4方向、菱形の孔が穿たれている。菱形の孔は内側で円孔になっている。 ○内外面とも回転ナデ調整。	胎土 やや粗。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、明紫灰色。 外、暗灰色。 裾端部に粗砂が付着している。
高杯蓋	9-87	第7層	つまみ径 3.2cm つまみ高 1.0cm 器高(3.9cm)	○口縁部は欠失しているため不明。 天井部は丸みをもつ。つまみは偏平で、中央が凹状に浅くくぼむ。 ○天井部外縁約4分は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。つまみは貼り付けている。	胎土 密。白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、明灰色。 外、暗灰色。 断、紫灰色。
	9-88	表 採	つまみ径	○口縁部は欠失しているため不明。	胎土 密。

器種	攝図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
高杯蓋	9-88	表 採	2.5cm つまみ高 0.65cm 器高(2.6cm)	天井部は丸みをもつ。つまみは小さく、偏平である。中央が凹状に浅くくぼむ。 ○天井部外面は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、灰色。 天井部外面に重ねて焼いていた高杯の裾部の痕跡がある。
有蓋高杯	9-89 11-89	表 採	口径10.2cm 受部径12.35cm たちあがり 高 1.5cm 杯部高4.3cm 脚基部径 5.3cm 裾部径8.6cm 脚部高4.4cm 基高 8.7cm	○たちあがりは内溝したのち、端部近くでたちあがる。口縁端部は内傾して凹面をなす。受部は大きく斜め上方にのびる。端部は丸くおさまる。底部は浅く、平坦である。脚部は大きく開く。裾端部は高杯蓋と接着しているため不明瞭である。脚柱部には3方向に円孔が穿たれている。 ○杯底部外面約1/2は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。脚柱部の円孔は穿孔時の粘土のダブリが外側に残っている。	胎土 密。わずかに白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、紫灰色。 外、暗灰色。 断、赤紫色。
有蓋高杯	9-90 11-90	第6層 第7層	口径11.0cm 受部径12.9cm たちあがり 高 1.6cm 杯部高4.6cm 脚基部径 5.3cm 裾部径8.0cm 脚部高4.6cm 器高 9.6cm	○たちあがりは中位でふくらみながら、内傾する。口縁端部は内傾して凹面をなす。受部は小さく、厚ぼったい。水平にのび、端部は丸くおさまる。底部は浅く、平坦である。脚部は大きく開く。裾端部は内傾して凹面をなす。脚柱部には3方向に円孔が穿たれている。 ○杯底部外面約1/2は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 やや密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、黒灰色。 断、灰青色。 全体にひずんでいる。
	9-91	表 採	口径 8.8cm 受部径11.2cm	○たちあがりは内傾したのち、端部近くでたちあがる。口縁端部は内	胎土 密。白色・ 黒色の微砂粒を含

器種	捕獲番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
有蓋高杯	9-91	表 採	たちあがり 高 1.5cm 器高(4.4cm)	傾して凹面をなす。受部は水平にのびる。端部は丸くおさまる。底部は浅く、丸くおさまる。脚部は欠失しているため不明。 ○杯底部外面約2%は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、青灰色。 外、黒灰色。 断、暗灰色。
有蓋高杯	9-92	第6層	口径12.7cm 受部径15.2cm たちあがり 高 1.65cm 杯部高4.9cm 脚基部径 5.35cm 器高(5.9cm)	○たちあがりは大きく内傾したのち、ゆるやかにたちあがる。口縁端部は内傾して凹面をなす。受部は水平にのびるが、たちあがりと受部の間に沈線が1条めぐる。端部は丸くおさまる。底部は浅く、あげ底である。脚部は欠失しているため不明。 ○杯底部外面約2%は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。なお、底部内面中央は回転ナデ調整の上を不定方向のナデ調整で仕上げている。	胎土 密。最大3mmの砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰青色。 外、暗灰青色。 断、紫灰色。
有蓋高杯	9-93 11-93	表 採	脚基部径 5.55cm 裾部径9.8cm 脚部高4.5cm 器高(6.3cm)	○口縁部は欠失のため不明。底部は平坦である。脚部は大きく開くが、なだらかに反りながら開くところとふくらみながら開くところがある。裾端部は内傾し、内端部で接地する。脚柱部には3方向に円孔が穿たれている。 ○杯底部外面は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。脚柱部の円孔は穿孔時の粘土上のダブリが外側に残っている。	胎土 やや粗。白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰青色。 外、暗灰色。 断、灰紫色。 裾端部に粗砂が付着している。
	9-94 12-94		脚基部径 5.5cm	○杯部は欠失のため不明。脚部は中位でわずかにふくらみながら、大	胎土 やや粗。1mmの白色砂粒を多

器種	補圖番号 出版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
有蓋高杯	9-94 12-94	表 採 第5層 第7層	裾部径9.0cm 脚部高3.55cm 器高(4.5cm)	きく開く。裾端部は内側へ肥厚し、全面向で接地する。脚柱部には3方向に菱形の孔が穿たれている。菱形の孔は内側で円化になっている。 ○内外面とも回転ナデ調整。	量に含む。黒色の微砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、暗灰色。 断、紫灰色。
有蓋高杯	9-95 12-95	表 採	脚基部径 5.3cm 裾部径8.2cm 脚部高3.55cm 器高(4.3cm)	○杯部は欠失のため不明。脚部は大きく開くが、中位でなだらかに内湾しながら、また、裾部近くでふんばるようにして開く。裾端部は内傾して凹面をなし、外端部で接地する。脚柱部に孔は穿たれていない。 ○内外面とも回転ナデ調整。	胎土 密。白色・黒色の微砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、暗灰色。 断、紫灰色。 裾部に高杯蓋の一部が付着している。
有蓋高杯	9-96 12-96	表 採	脚基部径 4.8cm 裾部径8.4cm 器高(6.0cm)	○脚部のみ残存。なだらかに開いたのち、裾部近くで内傾してふんばる形状を呈する。内傾したところに沈線が1条めぐる。裾端部は内傾して平坦面をなし、内端部で接地する。脚柱部には3方向に円孔が穿たれている。 ○脚柱部外面はカキ目調整。カキ目の原体は10本/2.3cmである。他は回転ナデ調整。	胎土 やや粗。白色の砂粒を含む。 焼成 不良、軟質。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、茶灰色。
有蓋高杯	9-97 12-97	表 採	脚基部径 6.05cm 裾部径10.0cm 器高(4.2cm)	○脚部のみ残存。脚部は大きく開くが、なだらかなふくらみをもつ。裾端部はわずかに内傾して凹面をなし、外端部で接地する。脚柱部には3方向に円孔が穿たれている。 ○外面はカキ目調整。他は回転ナデ調整。	胎土 やや粗。1～3mmの白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、暗灰色。 断、紫灰色。
	9-98	第6層	脚基部径 4.9cm	○脚部のみ残存。脚部はわずかにふくらみをもって開く。裾端部は内	胎土 やや粗。白色・黒色の砂粒を

器種	採集番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
有蓋高杯	9-98	第6層	裾部径9.3cm 器高(4.1cm)	○傾して凹面をなし、外端部で接地する。脚柱部には3方向に円孔が穿たれている。 ○外向はカキ目調整。カキ目の原体は7本/2cmである。他は回転ナデ調整。円孔は穿孔時の粘土のダブリが外側に残っている。	含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰白色。 外、灰白色。 断、紫灰色。
有蓋高杯	9-99 12-99	表 採	脚基部径 4.95cm 裾部径7.8cm 脚部高3.9cm 器高(5.6cm)	○杯部は底部のみ残存。脚部は大きく開いたのち、裾部近くで内屈しておさまる。裾端部は丸くおさまる。裾部には沈線が1条めぐる。脚柱部には3方向に三角形のスカシが穿たれている。 ○杯部外面は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。なお、杯部内面は回転ナデ調整の上を不定方向のナデ調整で仕上げている。三角形のスカシは面取りを行なっていない。穿孔時の粘土のダブリが内側にわずかであるが残っている。	胎土 やや密。白色砂粒を多量に含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、青灰色。 外、暗灰色。 断、紫灰色。
有蓋高杯	9-100	第5層	脚基部径 4.8cm 裾部径7.65cm 脚部高4.9cm 器高(6.8cm)	○杯部は底部のみ残存。脚部はながらに反りながら開く。脚部は丸くおさまり、下端部で接地する。裾部には沈線が1条めぐる。脚柱部には3方向に三角形のスカシが穿たれている。 ○杯部外面約 $\frac{1}{2}$ は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。三角形のスカシは面取りを行なっていない。	胎土 密。白色砂粒を少量含む。 焼成 不良、軟質。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、茶灰色。
無蓋高杯	9-101	表 採	脚基部径 4.7cm	○杯部は底部がわずかに残存。脚部はながらに反りながら開いたの	胎土 密。白色砂粒を少量含む。

器種	絵図番号 出版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
無蓋高杯	9-101	表 採	裾部径8.6cm 脚部高5.85cm 器高(7.1cm)	ち、裾部近くで内屈しておさまる。裾端部は丸くおさまる。脚柱部には3方向に長方形のスカシが穿たれている。 ○内外面とも回転ナデ調整。長方形のスカシは面取りを行なっていない。	焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、茶灰色。
無蓋高杯	9-102 12-102	表 採	脚基部径 4.6cm 裾部径7.5cm 脚部高6.05cm 器高(8.7cm)	○杯部は底部のみ残存。底部は丸みをもつ。脚部はなだらかに反りながら開いたのち、裾部近くで内屈しておさまる。裾端部はわずかに凹面をなす。脚柱部には3方向に長方形のスカシが穿たれている。 ○杯底部外面は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。長方形のスカシは面取りを行なっていない。穿孔時の粘土のダブリが内側に残っている。	胎土 密。白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、青灰色。 外、青灰色。 断、紫灰色。
脚台	9-103 12-103	表 採	脚基部径 8.1cm 裾部径9.5cm 脚部高2.0cm 器高(4.7cm)	○杯部は底部のみ残存。底部は丸みをもつ。脚部は短く、大きく開く。裾端部は平坦面をなす。 ○杯底部外面は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。底部内面には同心円文スタンプが残る。他は回転ナデ調整。	胎土 やや密。1 ~2mmの白色・黒色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、黒灰色。 断、灰色。 裾部には、粗砂が多量に付着している。
脚台	9-104	表 採	脚基部径 6.25cm 裾部径9.1cm 脚部高2.8cm 器高(4.8cm)	○杯部は底部のみ残存。脚部はゆるやかに大きく開く。裾端部は凹面をなす。脚柱部の上位には4方向に円孔が穿たれている。 ○底部外面は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右	胎土 やや密。1 ~2mmの白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、青灰色。 外、暗灰色。

器種	攝図番号 及版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
脚台	9-104	表 採		まわり。他は回転ナデ調整。なお、底部内面中央は回転ナデ調整の上を不定方向のナデ調整で仕上げている。脚柱部の円孔は穿孔時の粘土のダブリが外側に残っている。	断、紫灰色。
脚台	9-105 13-105	表 採	脚基部径 4.9cm 裾部径9.5cm 脚部高8.4cm 器高(9.8cm)	○杯部は底部のみ残存。脚部はなだらかなカーブを描きながら、裾部近くで大きく開く。裾端部は上・下に肥厚し、外端下部で凹状をなす。脚柱部には4方向に長方形のスカシが穿たれている。 ○内外面とも回転ナデ調整。脚部は上端面をふさいでから杯部と接合しているので、接合部が厚ぼったくなっている。脚柱部の長方形スカシは面取りを行なっている。辺の面取りは4回以上である。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、黒灰色。 断、紫灰色。
脚台	9-106	第2層	裾部径19.4cm 器高(17.2cm)	○脚部のみ残存。脚部はゆるやかに大きく開き、裾部で内屈する。裾端部は尖り気味である。脚柱部には長方形のスカシが穿たれているが、幅、個数は不明。 ○脚柱部外面上半はカキ目調整の上に回転ナデ調整を加えている。カキ目の原体は7本/1cmである。他は回転ナデ調整。脚柱部の長方形スカシは面取りを行なっていない。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗青灰色。 外、暗灰色。 断、灰色。
脚台	9-107 12-107	表 採	脚基部径 5.0cm 裾部径9.9cm 脚部高5.65cm 器高(6.8cm)	○杯部は底部だけが残っているがひずんでいる。脚部は大きく開き、裾部で内屈する。裾端部は尖り気味である。脚柱部にスカシは穿たれていない。 ○内外面とも回転ナデ調整。	胎土 密。白色・ 黒色の微砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、灰色。 断、紫灰色。 杯部内面は表面が

器種	標印番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
脚台	9-107 12-107	表 採			荒れていて軽石状になっている。
脚台	9-108	第2層	裾部径 17.8cm 器高 13.5cm	○脚部のみ残存。脚部はなだらかに大きく開き、裾部で段をもつ。裾端部は丸くおさまる。脚柱部には4方向に長方形のスカシが穿たれているが、全体にひずみがはげしいため正確な幅はわからない。 ○内外面とも回転ナデ調整。脚柱部の長方形スカシは面取りを行っていない。	胎土 やや密。1~2mmの白色・黒色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。色調 内、黒灰色。外、黒灰色。断、灰色。裾部には粗糲が付着している。
脚台	9-109	表 採	裾部径 8.75cm 器高(4.3cm)	○脚部のみ残存。開いたのち、内屈してふんばる形状を呈す。裾部は上端に鈎い凸線が2条、下端近くに沈線が1条めぐる。裾端部は内傾して凹状をなす。 ○内外面とも回転ナデ調整。	胎土 密。 焼成 不良、軟質。色調 内、灰色。外、灰色。断、茶灰色。
小型台付壺	9-110 14-110	表 採	頸基部径 7.1cm 体部最大径 8.6cm 脚基部径 3.8cm 器高(8.2cm)	○口縁部は大きく開く。口縁端部は欠失しているため不明。体部は上位に最大径をもつ。脚部は残存部で見る限り、ストレートに下方へのびる。脚柱部には3方向に三角形のスカシが穿たれている。 ○底部外面は回転ヘラ削り調査。へら削り時のロクロの回転方向は左まわり。壺内面は窓体がつまっているため調整不明。他は回転ナデ調整。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。色調 内、黄灰色。外、暗青灰色。断、青灰色。壺内部に窓体がつまっている。
小型台付壺	9-111	表 採	口径 9.3cm 頸基部径 6.45cm 体部最大径 7.3cm 脚基部径	○口縁部は大きく開く。口縁端部は尖る。体部は中位に最大径をもつ。脚部は欠失しているため不明。 ○底部外面は回転ヘラ削り調査。へら削り時のロクロの回転方向は右まわり。壺内面は窓体がつまっている。	胎土 やや粗。白色砂粒を多量に含む。 焼成 良好、堅緻。色調 内、黒灰色。外、黒灰色。

器種	捕回番号 販賣番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徵 ○形態 ○技法 ○文様	備考
小型台付壺	9-111	表 採	2.5cm 器高(5.6cm)	いるため不明。他は回転ナデ調整。	断、黒灰色。 壺内部に窓体がつ まっている。
小型台付壺	9-112	第7層	頸基部径 7.15cm 体部最大径 8.45cm 脚基部径 3.9cm 器高(5.3cm)	○口縁部は欠失しているため不明。 体部は上位に最大径をもつ。脚部 は残存部で見る限り、ほぼストレ ートに下方へのびる。脚柱部には 4方向に長方形のスカシが穿たれ ている。 ○底部外面は回転ヘラ削り調整。ヘ ラ削り時のロクロの回転方向は左 まわり。壺内面は窓体がつま っているため不明。他は回転ナデ調整。	胎土 やや密。白 色砂粒を少量含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、黒灰色。 外、黒灰色。 断、灰白色。 壺内部に窓体がつ まっている。
無蓋高杯	10-113 13-113	第6層	口径13.6cm 脚基部径 4.2cm 裾部径8.0cm 杯部高4.95cm 脚部高6.0cm 器高10.95cm	○口縁部はわずかに開く。口縁端部 は丸くおさまる。体部には鈍い凸 線が2条めぐる。底部は深く、丸 くおさまる。脚部はゆるやかに開 き、裾部で内屈する。裾端部は尖 り気味であるが、丸くおさまる。 裾部外面には沈線が1条めぐる。 脚柱部には3方向に長方形のスカ シが穿たれている。 ○底部外面は回転ヘラ削り調整。ヘ ラ削り時のロクロの回転方向は左 まわり。他は回転ナデ調整。脚柱 部の長方形スカシは面取りを行な っていない。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰青色。 外、灰青色。 断、紫灰色。
無蓋高杯	10-114	表 採 第5層	口径14.1cm 脚基部径 4.4cm 裾部径9.3cm 杯部高5.3cm 脚部高6.0cm 器高11.3cm	○口縁部は大きく開く。口縁端部は 丸くおさまる。体部には鈍い凸線 が2条めぐる。底部は深く、丸く おさまる。脚部はゆるやかに開き、 裾部で上・下に肥厚して段をもつ。 裾部外面は角ぼる。裾端部は尖る。 脚柱部には4方向に長方形のスカ シが穿たれている。	胎土 密。最大5 mmの白色砂粒を含 む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、青灰色。 外、青灰色。 断、灰茶色。

器種	採取番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
無蓋高杯	10-114	表 採 第5層		○底部外面は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。脚柱部の長方形スカシは面取りを行なっていらない。	
無蓋高杯	10-115	表 採	口径15.5cm 脚基部径 4.8cm 杯部高4.25cm 器高(16.7cm)	○口縁部は大きく開く。口縁端部は丸くおさまる。体部には鈍い凸線が2条めぐる。底部は浅く、平坦である。脚部は残存部で見る限りわずかに開く。脚柱部には4方向に長方形のスカシが穿たれている。 ○底部外面は回転ナデ調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。脚柱部の長方形スカシは面取りを行なっていらない。	胎土 密。白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、暗灰色。 断、暗灰色。 杯部内底面に重ね焼きの痕跡がある。 裾部径が約9cmの高杯が重ねられていたことがわかる。
無蓋高杯	10-116	表 採	口径15.5cm 器高(4.2cm)	○口縁部は外反して開く。口縁端部は丸くおさまる。体部には鋭い凸線が1条めぐる。底部は浅い。脚部は欠失のため不明。 ○残存部はすべて回転ナデ調整。	胎土 密。白色の砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、暗灰色。 断、紫灰色。
無蓋高杯	10-117 13-117	第6層 第7層	口径15.5cm 脚基部径 4.4cm 杯部高4.9cm 脚部高7.05cm 器高 11.95cm 裾部の法量はひずみが著しいため測ることが出来ない。	○口縁部は大きく外反して開く。口縁端部は丸くおさまる。体部には鋭い凸線が1条めぐる。底部は深く、平坦である。脚部の形状はひずみのため不明瞭であるが、いずれにしても開いたのち、裾部で内屈して丸くおさまる。裾端部は尖り気味である。脚柱部には3方向に長方形のスカシが穿たれている。 ○底部外面は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。脚柱部の長方形スカシは面取りを行なつていている。岡化	胎土 やや密。1~2mmの白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗青灰色。 外、暗青灰色。 断、紫灰色。 脚部はひずみがひどく、長方形スカシが部分的にくつついでいる。岡化

器種	備考番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
無蓋高杯	10-117 13-117	第6層 第7層		ってはない。 ○体部には波状文（1単位10本）が 1帯めぐる。	したものの脚部は ひずんだ状態のものである。
無蓋高杯	10-118 14-118	表 採	口径11.4cm 脚基部径 4.0cm 杯部高4.4cm 器高(5.8cm)	○口縁部は底部からなだらかなカーブを描いて開く。全体の形状は椀状を呈す。口縁端部は丸くおさまる。体部には鈍い凸線が1条めぐる。底部は深く、丸くおさまる。脚部は大半が欠失しているので不明。脚柱部には4方向に長方形のスカシが穿たれている。 ○底部外面は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。脚柱部の長方形スカシは面取りを行なっている。一辺の面取りは3回以上である。 ○体部には波状文（1単位4本）が 1帯めぐる。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、青灰色。 断、紫灰色。 杯部内底面に窓体 が付着している。
無蓋高杯	10-119 13-119	表 採	口径11.4cm 脚基部径 3.4cm 鋸部径8.1cm 杯部高4.6cm 脚部高6.35cm 器高 10.95cm	○口縁部は底部からなだらかなカーブを描いて大きく開く。口縁端部は丸くおさまる。体部には凸線が1条めぐる。底部は深く、丸くおさまる。脚部はなだらかに開き、底部で内屈する。裾端部は尖る。脚柱部には4方向に長方形のスカシが穿たれている。 ○底部外面は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。脚柱部の長方形スカシは面取りを行なっている。一辺の面取りは5回以上である。 ○体部には波状文（1単位4本）が 1帯めぐる。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、明灰色。 外、明灰色。 断、赤紫色。 杯部内底面に窓体 が付着している。
	10-120	表 採	口径12.8cm	○口縁部は大きく開く。口縁端部は	胎土 やや密。白

器種	捕戸番号 出土番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
無蓋高杯	10-120	表 採	脚基部径 3.7cm 裾部径7.9cm 杯部高4.1cm 脚部高 6.75cm 器高 10.85cm	丸くおさまる。体部には鋭い凸線が1条めぐる。底部は浅く、丸くおさまる。脚部はなだらかに開き、裾部で水平方向にのびたのち、内屈する。裾端部は尖る。脚柱部には4方向に長方形のスカシが穿たれている。 ○底部外面は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。脚柱部の長方形スカシは面取りを行なっている。一辺の面取りは3回以上である。面取りは不揃いである。 ○体部には波状文(1単位7本)が1帯めぐる。	色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、暗灰色。 断、紫灰色。 杯部内面に窓体が入っている。
無蓋高杯	10-121	第6層	口径13.5cm 器高(4.8cm)	○杯部のみ残存。口縁部は反るよう大きく開く。口縁端部は丸くおさまる。体部には鋭い凸線が1条めぐる。底部は浅い。 ○底部外面は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎上 密。白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、暗灰色。 断、紫灰色。
無蓋高杯	10-122	第6層 第7層	口径11.8cm 器高(4.5cm)	○杯部のみ残存。口縁部は底部から曲折してたちあがり、大きく開く。体部には鋭い凸線が1条めぐる。底部は深く、丸くおさまる。 ○底部外面は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	胎上 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、青灰色。 断、紫灰色。 杯部内底面に窓体が付着している。
無蓋高杯	10-123	表 採	口径11.1cm 脚基部径 4.8cm 杯部高4.2cm 器高(4.8cm)	○口縁部は底部から屈曲してたちあがり、大きく開く。体部には鋭い凸線が1条めぐる。凸線下と体部と底部の境の間は段ができるて、凸凹のようになっている。底部は深く、丸くおさまる。脚部は大半	胎上 密。1~2mmの白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。

器種	捕出番号 国版番号	遺構名 出土層位	法星(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
無蓋高杯	10-123	表 採		<p>が欠失しているので不明瞭であるが、脚柱部には4方向にスカシが穿たれている。</p> <p>○底部外面は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。杯底部は脚部と接合する前に切り込みを入れている。</p>	<p>断、紫灰色。 焼きひずみが大きい。</p> <p>杯部内底面に窯体が付着している。</p>
無蓋高杯	10-124 13-124	第6層	口径10.2cm 脚基部径 2.9cm 脊部径8.8cm 杯部高3.7cm 脚部高6.9cm 器高10.6cm	<p>○口縁部は斜め上方にのびたのち、端部近くで大きく開く。口縁端部は丸くおさまる。口縁部と体部の境には極めて鋭い凸線が1条めぐる。底部は浅く、丸くおさまる。杯部の豊壁は、口縁部を除いて極めて厚い。脚部は大きく開き、脛部で内屈する。脛端部は尖る。脚柱部には3方向に長方形スカシが穿たれている。</p> <p>○底部外面は表面があれでいるので調整不明。他は回転ナデ調整。なお、杯部内面は回転ナデ調整の上を不定方向のナデ調整で仕上げている。脚柱部の長方形スカシは面取りを行なっていない。</p>	胎土 やや密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰青色。 外、灰色。 断、青紫灰色。
無蓋高杯	10-125 14-125	第6層	口径10.9cm 脚基部径 4.5cm 脊部径7.8cm 杯部高4.0cm 脚部高5.8cm 器高 9.8cm	<p>○杯部は蓋杯の杯身の口縁部を開いたような形状を呈す。すなわち、口縁部は斜め上方に開き、端部は丸くおさまる。口縁部と体部の間に受部と類似する段が短いがある。底部は浅く、平坦である。脚部はゆるやかに開き、脛部で水平方向にのびたのち、内屈する。脛端部は丸みをもつ。脚柱部には3方向に三角形のスカシが穿たれている。</p> <p>○底部外面は回転ヘラ削り調整。ヘ</p>	胎土 粗。白色砂粒を多量に含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、黒灰色。 断、紫灰色。 杯部内面に窯体が入っている。

器種	攝区番号 岡版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徵 ○形態 ○技法 ○文様	備考
無蓋高杯	10-125 14-125	第6層		ラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。脚柱部外面はカキ目調整。杯部内面は窯体が入っているため調整不明。他は回転ナデ調整。脚柱部の△角形スカシは面取りが行なわれていない。また、穿孔時の粘土のダブリが内側に残っている。	
無蓋高杯	10-126	表 採	口径10.9cm 脚基部径 3.4cm 裾部径9.2cm 杯部高4.3cm 脚部高5.7cm 器高10.0cm	○杯部は蓋杯の杯蓋を逆さにしたような形状を呈す。すなわち、口縁部は底部からなだらかにたちあがり、あまり大きく開かない。口縁端部は内傾して凹面をなす。口縁部と体部の境には沈線が1条めぐる。底部は深く、丸くおさまる。脚部はなだらかなカーブを描いて開き、裾部でさらに大きく開いて、端部近くで内屈する。裾端部は尖り気味に丸くおさまる。脚柱部と脚部の境には沈線が1条めぐる。脚柱部にスカシは穿たれていない。 ○底部外面は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。杯部内面は窯体が入っているため調整不明。他は回転ナデ調整。	胎土 密。1~2mmの白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、黒灰色。 外、黒灰色。 断、紫灰色。 杯部内面には窯体が入っている。
無蓋高杯	10-127 14-127	第2層	口径10.7cm 脚基部径 3.5cm 裾部径8.6cm 杯部高4.7cm 脚部高 5.85cm 器高 10.55cm	○口縁部の形状を除いて、他はNo. 126の高杯と類似する。口縁部はわずかに内湾したのち、端部近くで外反する。口縁端部は内傾して平坦面をなす。 ○調整もNo. 126の高杯と同じ。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、暗灰色。 断、紫灰色。
壺蓋	10-128 14-128	表 採	口径 7.0cm 稜径 6.9cm 稜高 1.4cm	○口縁部は垂直に下り、端部近くで開く。口縁端部は内傾して平坦面をなす。天井部は高く、丸みをも	胎土 やや粗。1~2mmの白色砂粒を多量に含む。黒

器種	標 ^{考古} 番号 回収番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
壺 蓋	10-128 14-128	表 採	器高 3.5cm	つ。天井部と口縁部の境はにくく、かろうじてそれとわかる程度である。 ○外面は自然釉が剝離したらしく、あれでいるため調整不明。内面は回転ナデ調整。	色砂粒も含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、黒灰色。 断、灰紫色。
壺 蓋	10-129	第6層 第7層	口径 7.9cm 器高 3.9cm	○口縁部はほぼ垂直に下り、端部近くで開く。口縁端部は内傾して平坦面をなす。天井部は高く、やや丸みをもつ。天井部と口縁部の境に稜はない。 ○天井部外面は回転ヘラ削り調整。 ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰青色。 外、灰青色。 断、紫灰色。
壺 蓋	10-130 14-130	表 採	口径 9.7cm 器高 4.7cm	○口縁部は内湾気味に下り、端部近くで大きく開く。口縁端部は内傾して凹面を呈す。天井部は高く、丸みをもつ。天井部と口縁部の境に稜はない。 ○天井部外面は回転ヘラ削り調整。 ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、青灰色。 外、灰色。 断、紫灰色。
壺 蓋	10-131	表 採	口径10.8cm 器高(3.7cm)	○口縁部は天井部からなだらかなカーブで開く。口縁端部は平坦面をなす。天井部は中央が欠失しているため不明瞭。天井部と口縁部の境に稜はない。 ○残存部分は内外面とも回転ナデ調整。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、紫灰色。
小型有蓋短頸瓶	10-132	表 採	口径 6.6cm 体部最大径 12.6cm 器高 (5.45cm)	○口頭部はやや内傾する。口縁端部は尖り気味におさまる。体部は最大径が上位にある。底部は欠失しているため不明。 ○体部下位は回転ヘラ削り調整。ヘ	胎土 密。黑色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、暗灰色。

器種	標印番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
小型有蓋短頸壺	10-132	表 採		ラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	断、暗灰色。 口頸部から肩部にかけて蓋の一部が付着している。
小型有蓋短頸壺	10-133	表 採	口径 7.9cm 体部最大径 12.3cm 器高(6.0cm)	○口頸部は内傾する。口縁端部は丸くおさまる。体部最大径は中位にある。底部は丸みをもつ。 ○体部下半から底部にかけて回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 やや密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、暗灰色。 断、灰色。 口頸部から肩部にかけて蓋の一部が付着している。
小型有蓋短頸壺	10-134	表 採	口径 8.6cm 器高(4.6cm)	○口頸部はほぼ垂直にたちあがる。 ○口縁端部は丸くおさまる。体部はなだらかにふくらむ。体部下半から底部にかけては欠失しているため不明。 ○体部外面はカキ目調整。他は回転ナデ調整。	胎土 やや密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、暗灰色。 断、黒灰色。 肩部に蓋の一部が付着している。
小型有蓋短頸壺	10-135	表 採	口径 7.5cm 体部最大径 12.0cm 器高(6.15cm)	○口頸部は垂直にたちあがる。口縁端部は丸くおさまる。体部最大径は中位にある。底部は欠失しているため不明。 ○内外面とも回転ナデ調整。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、暗灰色。 断、黒灰色。 肩部に蓋の一部が付着している。
小型有蓋短頸壺	10-136	第7層	口径 8.1cm 体部最大径 11.55cm 器高 8.05cm	○口頸部は極めて短く、垂直にたちあがる。口縁端部は丸くおさまる。体部最大径はやや上位にある。底部は丸くおさまる。 ○底部外面は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 やや密。2～3mmの白色・黒色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、紫灰色。 肩部に蓋の一部が
	15-136				

器種	攝図番号 岡版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
	10-136	第7層			付着している。
小型短頸壺	10-137 15-137	第6層 第7層	口径 7.3cm 体部最大径 8.4cm 器高(4.8cm)	○口頸部はわずかに外傾する。口縁端部は丸くおさまる。体部最大径は肩部にある。底部は平坦である。 ○底部外面は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 やや密。白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、黒灰色。 外、黒灰色。 断、灰色。
小型短頸壺	10-138 15-138	表 採 第7層	口径10.2cm 体部最大径 11.1cm 器高(7.15cm)	○口頸部は外傾して開き、端部近くで垂直にたちあがる。口縁端部は丸くおさまる。体部最大径は上位にある。底部は丸くおさまる。 ○底部外面は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 やや密。白色砂粒を少量含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、青灰色。 外、青灰色。 断、青灰色。
小型短頸壺	10-139	第7層	口径 5.3cm 体部最大径 6.2cm 器高 3.0cm	○口頸部は垂直にたちあがったのち、口縁部で大きく外反する。口縁端部は丸くおさまる。体部最大径は中位にある。底部はほぼ平坦である。 ○底部外面は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。なお、底部内面中央は回転ナデ調整の上を一定方向のナデ調整で仕上げている。	胎土 やや密。白色砂粒を含む。 焼成 不良、軟質。 色調、内、灰色。 外、灰色。 断、茶色。 底部外面ヘラ記号あり。
小型短頸壺	10-140	表 採	口径 8.1cm 体部最大径 8.25cm 器高 4.8cm	○口頸部は外傾したのち、口縁部で外反して大きく開く。口縁端部は尖る。体部最大径は肩部にある。底部は丸くおさまる。 ○底部外面は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	胎土 粗。白色砂粒を多量に含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、黒灰色。 外、黒灰色。 断、紫灰色。 肩部内外面に自然釉付着。底部外面に粗砂付着。

器種	標番 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徵 ○形態 ○技法 ○文様	備考
小型短頸瓶	10-141	第6層 第7層	口径 7.3cm 体部最大径 8.4cm 器高(4.8cm)	○口頭部はわずかに外傾する。口縁端部は丸くおさまる。体部最大径は、ほぼ中位にある。底部は丸くおさまる。 ○底部外面は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	胎土：やや密。白色砂粒を含む。 焼成：良好、堅緻。 色調：内、黒灰色。 外、黒灰色。 断、灰色。
小型短頸壺	10-142	表 採	口径 9.0cm 体部最大径 10.25cm 器高(4.8cm)	○口頭部は外傾して開く。口縁端部は丸くおさまる。体部最大径はやや上位にある。底部は欠失しているため不明。 ○内外面とも回転ナデ調整。	胎土：密。 焼成：良好、堅緻。 色調：内、暗灰色。 外、暗灰色。 断、暗灰色。
甌	11-143	表 採	口径 13.35cm 頭基部径 7.15cm 頭部高5.5cm 器高(5.5cm)	○口頭部のみ残存。頭部は大きく外傾して開いたのち、口縁部で段を作ってさらに外上方へのびる。 口縁端部は内傾して凹面をなす。頭部と口縁部の境には鋭い凸線が1条めぐる。 ○内外面とも回転ナデ調整。 ○口縁部には波状文(1単位5本)が1帯めぐる。頭部には波状文(1単位11本)が1帯めぐる。	胎土：やや密。白色砂粒を含む。 焼成：良好、堅緻。 色調：内、灰色。 外、灰色。 断、灰色。
甌	11-144	表 採	口径11.5cm 器高(4.05cm)	○口頭部のみ残存。頭部は大きく外傾して開いたのち、口縁部で段を作ってさらに外上方へのびる。口縁端部は内傾して凹面をなす。頭部と口縁部の境には鋭い凸線が1条めぐる。 ○内外面とも回転ナデ調整。 ○口縁部には波状文(1単位6本)が1帯めぐる。頭部には波状文(1単位10本)が1帯めぐる。ともに波状文のピッチは細かい。	胎土：密。 焼成：良好、堅緻。 色調：内、灰色。 外、灰色。 断、灰色。
甌	11-145	表 採	口径13.1cm	○頭部は大きく外傾して開いたのち、	胎土：密。

器種	編4番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
瓶	11-145 15-145	表 採	頸基部径 6.25cm 体部最大径 9.75cm 頸部高4.9cm 体部高6.3cm 器高11.2cm	口縁部で段を作つてさらに外上方へのびる。口縁端部は内傾して平坦面をなす。頸部と口縁部の境には鋭い凸線が1条めぐる。体部は最大径を肩部にもつ。底部は丸くおさまる。肩部下には円孔が穿たれています。 ○内面は窓体がつまっているため調和不明。他は回転ナデ調整。体部の円孔は上から下へ向けてあけられています。 ○口縁部には波状文(1単位5本)が1帯めぐる。頸部には波状文(1単位13本)が1帯めぐる。とともに波状文のピッチは細かい。体部には円孔のある位置に斜方向(右から左方向)の列点文が施されている。列点文の上には沈線が2条、下には沈線が1条めぐる。	焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、暗灰色。 断、暗灰色。 内部は窓体がつまっている。底部外面には粗砂が付着している。
瓶	11-146 15-146	第5層	口径11.6cm 頸基部径 6.3cm 体部最大径 9.8cm 口頸高5.0cm 体部高6.55cm 器高 11.55cm	○頸部は大きく外傾して開いたのち、口縁部で段を作つてさらに外反して開く。口縁端部は丸くおさまる。頸部と口縁部の境には鋭い凸線が1条めぐる。体部は最大径を肩部にもつ。底部は丸くおさまる。肩部下には円孔が穿たれています。 ○底部外面は回転ヘラ削り調整を施しているが、上から下へ向けてあけられています。 ○口縁部には波状文(1単位8本)が1帯めぐる。頸部には波状文(1単位27本)が1帯めぐる。頸部の波状文のピッチは細かい。体部に	胎土 やや粗。1~3mmの白色砂粒を多量に含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、暗灰色。 断、紫灰色。 口縁部内面に窓体が入りこんでいる。

器種	博物館 団體番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
瓶	11-146 15-146	第5層		は円孔のある位置の下約2重なって斜方向(右から左方向)の列点文(1単位14本)が施されている。列点文の上には沈線が2条、下には沈線が1条めぐる。	
瓶	11-147 16-147	第6層	頸基部径 6.85cm 体部最大径 10.0cm 器高(10.0cm)	○口縁部は欠失している。頸部は大きく外傾して開く。頸部と口縁部の境には鋭い凸線が1条めぐる。体部は最大径を中位にもつ。底部は欠失しているため不明。肩部下には円孔が穿たれている。 ○内外面とも回転ナデ調整。体部の円孔は上から下へ向けてあけられている。 ○頸部には波状文(1単位24本)が1帯めぐる。波状文のピッチは細かい。体部には円孔のある位置の下約2重なって斜方向(右方向から左方向)の列点文が施されている。列点文の上には沈線が2条、下には1条めぐる。	胎土 やや粗。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、暗灰色。 断、黒灰色。
瓶	11-148	表 採	頸基部径 5.9cm 体部最大径 9.6cm 体部高7.25cm 器高(7.9cm)	○口頭部の大半は欠失している。体部は最大径を肩部にもつ。底部は尖り気味である。肩部下には円孔が穿たれている。 ○底部外面は回転ヘラ削り調整。へら削り時のロクロの回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。体部の円孔は上から下へ向けてあけられている。 ○体部には円孔のある位置の下約2重なって斜方向(右から左方向)の列点文(1単位13本)が施されている。列点文は細い。列点文の上には沈線が2条、下には沈線が3条めぐる。	胎土 やや密。白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、暗灰色。 断、紫灰色。

器種	捕獲番号 図版番号	遺構名 出土層	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
甌	11-149	表 採	口径14.2cm 頸基部径 7.4cm 口頸高4.7cm 器高(5.3cm)	○口頸部のみ残存。頸部は大きく外傾して開いたのち、口縁部で段を作つてさらに外上方へのびる。口縁端部は内傾して凹面をなす。頸部と口縁部の境には鋭い凸線が1条めぐる。 ○内外面とも回転ナデ調整。 ○頸部には波状文(1単位16本)が1帯めぐる。	胎土 密。1mmの砂粒を少量含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、淡灰色。 外、暗灰色。 断、灰紫色。
甌	11-150	表 採	口径12.1cm 頸基部径 5.95cm 口頸高4.6cm 器高(5.2cm)	○口頸部のみ残存。頸部は大きく外傾して開いたのち、口縁部で段を作つて外上方へ内渦気味にのび、さらに端部近くで大きく開く。口縁端部は丸くおさまる。頸部と口縁部の境には鋭い凸線が1条めぐる。 ○内外面とも回転ナデ調整。 ○頸部には波状文(1単位12本)が1帯めぐる。	胎土 密。白色の微砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、灰色。 断、灰色。
甌	11-151 16-151	表 採	口径11.1cm 頸基部径 5.6cm 体部最大径 9.75cm 口頸高5.4cm 器高(9.0cm)	○頸部は大きく外反して開いたのち、口縁部で段を作つてさらに外反する。口縁端部は内傾して凹面をなす。頸部と口縁部の境には鋭い凸線が1条めぐる。体部は最大径をやや上位にもつが、肩部の張り出しあらない。底部は欠失しているため不明。円孔の位置も欠失しているため不明。 ○内外面とも回転ナデ調整。 ○頸部には波状文(1単位17本)が1帯めぐる。	胎土 やや密。1~2mmの白色砂粒を含む。3mm程度の黒色砂粒を少量に含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰黑色。 外、灰黑色。 断、灰紫色。
甌	11-152	第6層	頸基部径 7.35cm 体部最大径 10.1cm	○口頸部の大半は欠失している。体部は最大径をほぼ中位にもつ。円孔も中位に穿たれている。底部は丸くおさまる。	胎土 やや密。1~2mmの白色・黒色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。

器種	標印番号 団数番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
甌	11-152	第6層	体部高 6.65cm 器高(8.1cm)	○内外面とも回転ナデ調整。体部の円孔は上から下へ向けてあけられている。	色調 内、灰色。 外、灰色。 断、灰色。 底部内面には窯体が、また、外面には粗砂が付着している。
甌	11-153 16-153	表 採	頸基部径 6.65cm 体部最大径 10.2cm 器高(6.2cm)	○口頸部の大半は欠失している。体部は最大径を中位にもつ。円孔もほぼ中位に穿たれている。底部は丸くおさまる。 ○内外面とも回転ナデ調整。底部外表面は回転ナデ調整の上を不定方向のナデで仕上げている。	胎土 密。最大3mmの白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、黒灰色。 外、黒灰色。 断、黒灰色。
甌	11-154	表 採	頸基部径 6.7cm 体部最大径 9.6cm 体部高6.2cm 器高(7.9cm)	○口頸部の大半は欠失している。頸部は外傾して開く。体部は最大径を中位にもつ。円孔も中位に穿たれている。底部は丸くおさまる。 ○内外面とも回転ナデ調整。内底面には指頭圧痕が残る。円孔は上から下へ向けてあけられている。 ○頸部には波状文(1単位13本以上)が1帯めぐる。体部には円孔のある位置の上約4重なって斜方向(左から右方向)の列点文が施されている。	胎土 粗。白色砂粒を多量に含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、暗灰色。 断、紫灰色。 底部内面には窯体が少量入り込んでいる。
甌	11-155 16-155	第7層	頸基部径 4.9cm 体部最大径 11.1cm 器高(8.5cm)	○口頸部の大半は欠失している。体部は最大径を上位にもつ。肩部は張り出している。肩部下には円孔が穿たれている。 ○底部外表面はナデ調整。他は回転ナデ調整。円孔は上から下へあけられている。 ○体部の円孔のある位置の上約4重なって斜方向(左から右方向)の	胎土 密。1~2mmの白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、紫灰色。

器種	撿図番号 図版番号	遺構名 出土調位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
瓶	11-155 16-155	第7層		刻み目が施されている。刻み目の上には沈線が1条、下にも沈線が1条めぐる。	
瓶	11-156 16-156	第7層	口径 12.25cm 頸基部径 6.0cm 体部最大径 10.3cm 口部高 5.2cm 体部高 6.15cm 器高 11.35cm	○頸部は外反して大きく開き、口縁部で受口状に外上方へのびる。口縁端部はわずかに内傾して四面をなす。体部は比較的扁平で、最大径を中位にもつ。円孔も中位に穿たれている。体部の中位には凸線が1条めぐる。底部は丸くおさまる。 ○底部外側にはナデ調整。ただし、へラ削りの上をナデしているのかもしれない。底部内面には指頭圧痕が残る。他は回転ナデ調整。 ○口縁部には波状文（1単位4～5本）が1帶めぐる。頸部には波状文（1単位約11本）が2帶めぐる。ともに波状文の施文は粗い。体部には凸線の上位に斜線文（自然釉付着のためはっきりしないが、列点文かもしれない）が、下位に列点文（1単位5～7本）が施されている。下位の列点文の施文は不揃いである。	胎土 やや密。1～3mmの白色・黒色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰青色。 外、黒灰色。 断、紫灰色。
瓶	11-157	表 採	口径 10.9cm 器高 6.0cm	○口頸部のみ残存。頸部はやや外傾して開いたのち、口縁部で受口状にやや外上方へのびる。口縁端部は内傾して四面をなす。 ○内外面とも回転ナデ調整。 ○口縁部には沈線が2条めぐる。頸部には波状文（上・1単位11本、下・1単位8本）が2帶めぐる。	胎土 やや密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、黒灰色。 外、暗灰紫色。
直口壺	11-158 15-158	第6層	口径 11.4cm 高さ (5.6cm)	○口頸部のみ残存。口頸部は外傾して開く。口縁端部は尖る。頸部と	胎土 密。白色砂粒を少量含む。

器種	標図番号 国版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
直口壺	11-158 15-158	第6層		○口縁部の境には凸線が2条めぐる。 ○内外面とも回転ナデ調整。 ○頸部には波状文(1単位3本)が 1帯めぐる。	焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、紫灰色。
直口壺	11-159	表 採	口径 8.2cm 頸基部径 5.95cm 口頸高3.9cm 器高(4.1cm)	○口頸部のみ残存。口頸部は外傾して開く。口縁端部はわずかに内傾して凹面をなす。頸部と口縁部の境はわずかな稜によってそれとわかる。 ○内外面とも回転ナデ調整。	胎土 密。1mmの白色砂粒を多量に含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、黒灰色。 外、黒灰色。 断、灰紫色。
甌	11-160	表 採	頸基部径 5.8cm 体部最大径 8.75cm 体部高 6.15cm 器高(6.7cm)	○口頸部の大半は欠失している。体部は最大径がやや上位にあるが肩部は張り出していない。円孔はほぼ中位に穿たれている。底部は丸くおさまる。 ○底部外面は平行タタキ調整。底部内面には指頭圧痕が放射状に残る。他は回転ナデ調整。 ○頸部には波状文(1単位3本以上)がめぐる。	胎土 密。白色砂粒を少量含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、灰色。
甌	11-161 16-161	第5層	頸基部径 6.4cm 体部最大径 9.3cm 体部高 6.15cm 器高(8.4cm)	○口頸部の大半は欠失している。頸部は外傾して開く。体部は最大径をほぼ中位にもつ。円孔もほぼ中位に穿たれている。底部は丸くおさまる。 ○底部外面は平行タタキ調整。他は回転ナデ調整。 ○頸部には波状文(1単位12本以上)がめぐる。波状文のピッチは細かい。	胎土 やや密。最大2mmの白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、暗灰色。 断、紫灰色。 底部内間に窓体が入っている。底部外面にはわずかであるが粗砂が付着している。
			口径11.8cm	○口頸部は外傾して大きく開く。口	胎土 やや密。1

器種	捕出番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
直口壺	11-162 17-162	第2層 第7層	頸基部径 8.2cm 体部最大径 11.6cm 口部高4.1cm 体部高7.8cm 器高11.9cm	縁端部は丸くおさまる。体部は最大径を中位にもつ。底部は丸くおさまる。 ○底部内面には指頭圧痕が残る。他は回転ナデ調整。	~2mmの白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、黒灰色。 外、黒灰色。 断、灰白色。 底部外面にヘラ記号がある。 底部内面に窓体が付着している。
壺体部	11-163	表 採 第1層	体部最大径 13.3cm 器高(8.9cm)	○体部のみ残存。体部は最大径を上位にもつ。肩部は張り出さない。 肩部と体部の境には凸線が1条めぐる。 ○底部外面は平行タタキ調整。他は回転ナデ調整。 ○肩部には列点文が施されている。	胎土 やや粗。2~3mmの白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、暗灰色。 断、暗灰色。
壺体部	11-164	表 採	体部最大径 7.5cm 器高(3.4cm)	○体部のみ残存。体部は最大径を中位にもつ。底部は欠失しているため不明。 ○内外面とも回転ナデ調整。 ○体部中位には列点文が施されている。列点文の上・下に各1条づつ沈線がめぐる。	胎土 やや密。1~2mmの白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、暗灰色。 断、暗灰色。
壺体部	11-165	表 採	体部最大径 10.3cm 器高(4.1cm)	○体部のみ残存。体部は最大径を中位にもつ。底部は平坦である。 ○底部外面はヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。 ○体部中位には波状文(1単位6本)が1帯めぐる。	胎土 密。1~3mmの白色・黒色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、青灰色。 外、灰色。 断、紫灰色。
椀	11-166	第6層	口径 7.6cm 器高(6.2cm)	○わずかにふくらみをもつ体部から、頸部はほぼ筒状にのび、口縁端部近くで外反して開く。口縁端部は	胎土 密。1~2mmの白色砂粒を含む。

器種	揮(番号 図版番号)	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
椀	11-166	第6層		丸くおさまる。底部は欠失しているため不明。 ○体部外面下半は回転ヘラ削り調整。 ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、灰色。
短頸壺	12-167 17-167	第6層 第7層	口径14.3cm 頸基部径 12.8cm 体部最大径 19.95cm 口腹高 1.95cm 器高 (15.6cm)	○口頸部は短く、まっすぐ上方へのびる。口縁端部は丸くおさまる。体部は球形で、最大径を中位にもつ。底部は欠失しているため不明。 ○体部外面約8はカキ目調整。底部近くは平行タタキ調整。平行タタキの原体は3本/cmである。内面にはわずかに同心円文スタンプが残る。他は回転ナデ調整。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、淡灰黄色。 外、暗灰色。 断、紫灰色。
短頸壺	12-168	表 採	口径10.2cm 頸基部径 10.1cm 口頸高2.5cm 器高 (4.75cm)	○口頸部はわずかに上方へのびるだけで、ほぼ直立する。口縁端部は尖り氣味である。体部は大きく張り出しが、大半が欠失しているため不明である。 ○内外面とも回転ナデ調整。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰青色。 外、灰青色。 断、淡灰青色。
短頸壺	12-169	表 採	口径13.7cm 頸基部径 13.7cm 口頸高2.9cm 器高 (5.7cm)	○口頸部はわずかに上方へのびるだけで、ほぼ直立する。口縁端部は内側へわずかに拡張し、上端で平坦面をなす。体部は大きく張り出しが、大半が欠失しているため不明である。 ○体部外面は平行タタキ調整らしきものが認められるが、自然釉が付着しているためはっきりしない。内面は部分的に表面が剝離しているため調整不明の部分が多い。観察可能な部分はすべて回転ナデ調整。	胎土 やや密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、青灰色。 外、黒灰色。 断、青紫灰色。
短盤壺	12-170	表 採	口径13.3cm	○口頸部はわずかに内湾したのち開	胎土 密。白色砂

器種	検査番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
短頸壺	12-170	表 採	頸基部径 13.2cm 口頸高 2.9cm 器高(6.5cm)	く。口縁端部は内側へわずかに肥厚し、上端で平坦面をなす。体部は大きく張り出しが、大半が欠失しているため不明である。 ○体部外面は平行タタキ調整。体部内面は同心円文スタンプをスリ消している。他は内外面とも回転ナデ調整。	粒をわずかに含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、青灰色。 外、黒灰色。 断、暗灰色。
短頸壺	12-171 17-172	表 採	口径14.9cm 頸基部径 14.5cm 口頸高2.8cm 器高(7.65cm)	○口頸部はわずかに内湾したのち開く。口縁端部は内傾して、平坦面をなす。体部は大きく張り出しが、大半が欠失しているため不明である。 ○頸部外面はカキ目調整。体部外面は平行タタキ調整。体部内面には同心円文スタンプが残る。他は回転ナデ調整。	胎土 やや粗。白色砂粒、くさり礫を含む。 焼成 不良、軟質。 色調 内、黄灰色。 外、黄灰色。 断、灰褐色。
短頸壺	12-172	第7層 第8層	口径12.7cm 頸基部径 11.8cm 体部最大径 36.0cm 口頸高2.3cm 器高(19.5cm)	○口頸部は内湾したのち、大きく開く。口縁端部は内傾して、ほぼ平坦面をなす。体部は大きく張り出し、最大径をほぼ中位にもつ。底部は欠失しているため不明である。 ○頸部外面はカキ目調整。体部外面は格子風タタキ調整。タタキの原体は3本/cmである。体部内面は同心円スタンプ文が残るが、部分的にスリ消している。スタンプ文の原体は2本/cmである。他は回転ナデ調整。	胎土 やや密。白色の砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰青色。 外、明灰色。 断、紫灰色。
小型広口壺	12-173	表 採	口径 9.2cm 器高(5.5cm)	○口頸部は外反して開く。口縁部は上内方に肥厚する。口縁端部は丸くおさまる。口縁部と頸部の境には凸線が1条めぐる。体部は欠失しているため不明である。 ○内外面とも回転ナデ調整。	胎土 やや密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、黒灰色。 外、黒灰色。 断、灰紫色。

器種	摘要番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
小型広口壺	12-174	表 採	口径 7.3cm 器高(3.8cm)	○口頸部は外反して開く。口縁部は下方へわずかに抵張する。口縁端部は平坦面をなす。体部は欠失しているため不明である。 ○内外面とも回転ナデ調整。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、暗灰色。 断、紫灰色。
有蓋壺	12-175	第6層	口径 9.7cm 受部径 12.5cm 頸基部径 9.6cm たちあがり 高 1.9cm 口頸高5.2cm 器高 (5.7cm)	○口頸部の形態は杯身と類似する。すなわち、口縁部は上内方へのび、端部は内傾して、わずかに凹面をなす。受部は水平にのびる。頸部は丸みをもってくだる。体部は欠失しているため不明である。 ○内外面とも回転ナデ調整。	胎土 密。白色・黒色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、紫灰色。
有蓋壺	12-176	第7層	口径 12.3cm 受部径 16.8cm 頸基部径 15.1cm 体部最大径 40.6cm たちあがり 高 2.8cm 口頸高5.5cm 器高 (18.0cm)	○口頸部の形態は杯身と類似する。すなわち、口縁部は大きく内傾したのち、角度をゆるめて上内方へたちあがる。口縁端部は内傾して凹面をなす。受部はわずかに斜上方へのび、端部は丸くおさまる。頸部はわずかに内方へくだる。体部は大きく張りだし、最大径をほぼ巾位にもつ。体部下半以下は欠失しているため不明である。 ○体部外面は平行タタキ調整。タタキの原体は3本/cmである。体部内面は同心円文スタンプが残る。スタンプ文の原体は2本/cmである。他は内外面とも回転ナデ調整。	胎土 粗。白色砂粒を多量に含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、灰色。 断、紫灰色。
	17-176				
鉢	12-177 17-177	表 採	口径 15.9cm 器高 8.0cm	○口縁部は内窪し、端部は内傾して凹面をなす。体部は丸みをもってくだり、全体に椀状を呈す。底部は丸みをもつ。 ○底部外面は平行タタキ調整。タタキの原体は3本/cmである。底部内面は同心円文スタンプが残る。	胎土 やや粗。白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、茶灰色。 外、茶灰色。 断、茶灰色。

器種	編號 出土地番号	遺構名 出土層位	器種(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
鉢	12-177 17-177	表 採		スタンプ文の原体は2本/cmである。他は回転ナデ調整。	
鉢	12-178	表 採	口径19.4cm 底径(9.4cm)	○口縁部は外反して大きく開く。口縁端部は上・下にわずかに拡張する。体部は丸みをもってくだる。底部中央は欠失しているため不明である。 ○底部外面は平行タタキ調整。タタキの原体は3本/cmである。底部内面は自然釉のため不明瞭であるが、同心円文スタンプがかすかに観察できる。スタンプ文の原体は2本/cmである。他は回転ナデ調整。	胎土 密。白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、黒灰色。 外、黒灰色。 断、黒灰色。
鉢	12-179 17-179	表 採	口径15.7cm 底径 8.0cm 高さ 10.2cm	○体部から口縁部にかけてストレートに外傾して開く。口縁端部は丸くおさまる。底部は平坦であるが上げ底である。 ○体部外面はカキ目調整。底部外面は平行タタキ調整。他は回転ナデ調整。	胎土 粗。1~5mmの白色砂粒を多量に含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、暗灰色。 断、紫灰色。 底部内面に窓体があり、外面には土器片が付着している。
鉢	12-180	表 採	口径15.0cm 高さ(13.4cm)	○体部から口縁部にかけてストレートに外反して開く。口縁端部は上・下に拡張し、外端で凹面をなす。底部は欠失しているため不明である。 ○体部外面はカキ目調整。内面は不定方向のナデ調整。他は回転ナデ調整。	胎土 やや密。白色・黒色の砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰青色。 断、暗灰色。
鉢	12-181	第5層	口径13.7cm 底径 9.6cm	○口縁部は大きく開き、端部は上方に大きく、下方に小さく拡張する。	胎土 やや粗。 焼成 良好、堅緻。

器種	補助番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
鉢	12-181 17-181	第5層	器高10.6cm	上端は丸くおさまる。体部はほぼストレートにくだる。底部は体部より径の大きい円板で、水平に張り出している。ほぼ平底である。 ○体部外面はカキ目調整。底部外面はヘラ切り未調査。他は回転ナデ調整。	色調 内、青灰色。 外、青灰色。 断、青灰色。
広口壺	13-182 18-182	第7層	口径17.3cm 頭基部径 12.3cm 体部最大径 25.95cm 口頭高9.3cm 体部高 22.0cm 器高31.3cm	○頸部はほぼ筒状を呈し、口縁部で大きく外反する。口縁端部は上・下に拡張する。頸部の文様帯間に凸線が上方で1条、下方で2条めぐる。体部は最大径を中位にもつ。底部は丸みをもつ。 ○体部外面は格子風タタキ調整。タタキの原体は3本/cmである。肩部内面と底部内面には同心円文スタンプが残る。スタンプ文の原体は3本/cmである。体部内面はスタンプ文をスリ消している。他は回転ナデ調整。 ○頸部に波状文が3倍めぐる。波状文の原体は上から1単位9本・7本・12本である。	胎土 粗。2~3mmの白色砂粒を多量に含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、暗灰色。 断、灰色。 体部外面と底部内面に擦痕が付着している。底部外面には粗砂が多量に付着している。
広口壺	13-183 18-183	第7層	口径(長径) 22.5cm 頭基部径 10.25cm 体部最大径 23.1cm 口頭高 13.5cm 体部高 19.6cm 器高 (33.1cm)	○口頭部は外反して大きく開く。口縁端部は上・下にわずかに拡張する。口縁部と頸部の境、頸部の文様帯間に各々1条づつ凸線がめぐる。体部は最大径をほぼ中位にもつ。底部は欠失しているため不明。 ○体部外面は格子風タタキ調整。体部内面は同心円文スタンプをスリ消している。他は回転ナデ調整。 ○頸部には波状文が3倍めぐる。波状文の原体は上から1単位11本・11本・10本である。	胎土 やや粗。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、黒灰色。 全体にひずみが著しい。

器種	編號 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
広口壺	13-184	表 採	口径18.6cm 頸基部径 7.75cm 口頸高11.0cm 器高(15.0cm)	○口頭部は大きく外反して開く。口縁端部は上・下にわずかに拡張する。上端は尖り氣味である。頸部と口縁部の境、頸部の文様帶間に各々1条づつ内線がめぐる。体部は大半が欠失しているため不明である。 ○体部外面は自然釉付着のため不明。体部内面は同心円文スタンプがわずかに残る。大半はスリ消してある。他は内外面とも同軸ナデ調整。 ○頸部外面には波状文が2巻1組で6帯めぐる。波状文の原体は1単位約8~10本である。	胎土 やや粗。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、灰褐色。
広口壺	13-185	第7層	口径20.2cm 頸基部径 11.7cm 体部最大径 23.8cm 口頸高0.15cm 器高(20.5cm)	○頸部はなだらかに、口縁部で大きく外反して開く。口縁端部は上方に大きく、下方はわずかに拡張する。口縁部と頸部の境に内線が1条、頸部の文様帶間にには上方で3条、下方で2条凸線がめぐる。体部は最大径をほぼ中位にもつ。体部下半以下は欠失しているため不明である。 ○体部外面は自然釉付着のため不明瞭であるが、格子風タタキ調整にカキ目調整が付加されている。タタキの原体は2本/cmである。体部内面には同心円文スタンプが残るが、部分的にスリ消している。スタンプ文の原体は2本/cmである。他は回転ナデ調整。	胎土 密。黒色砂粒を多量に含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰白色。 外、灰白色。 断、灰白色。 肩部外面に窓体が付着している。
	18-185			○頸部外面には波状文が3巻めぐる。波状文の原体は上から1単位18本・14本・14本である。波状文は左から右方向に施されている。	
広口壺	13-186	第7層	口径21.1cm	○頸部はほぼ筒状を呈し、口縁部近	胎土 やや粗。白

器種	捕図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
広口壺	13-186 18-186	第7層	頸基部径 13.6cm 体部最大径 25.6cm 口頸高11.6cm 器高(22.7cm)	ぐで外反して大きく開く。口縁端部は上方に大きく、下方に小さく拡張する。口縁部と頸部の境に1条、頸部の文様帶間に各々2条づつ凸線がめぐる。体部はほぼ中位に最大径をもつ。体部下半以下は欠失しているため不明である。 ○体部外面は格子風タタキ調整。ただし肩部は自然釉が付着しているため不明瞭である。タタキの原体は3本/cmである。体部内面は同心円文スタンプをスリ消している。他は回転ナデ調整。 ○頸部外面には波状文が3帯めぐる。波状文の原体は上から1単位11本・9本・10本である。	色の砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、暗灰色。 断、暗灰色。 全体にひずみが著しい。
広口壺	13-187 19-187	表 採	口径25.3cm 頸基部径 16.4cm 体部最大径 29.3cm 口頸高8.7cm 器高30.9cm	○口頸部は大きく外反して開く。口縁端部は上方に大きく、下方に小さく拡張する。口縁部と頸部の境には2条、頸部の文様帶間に各々1条づつ凸線がめぐる。体部は最大径を中位にもつ。底部中央は欠失しているためはつきりしないが、おそらく丸底であろう。 ○体部外面は平行タタキ調整であるが、一部スリ消している。頸部外面にも一部平行タタキ調整が認められる。タタキの原体は2.5本/cmである。体部内面は同心円文スタンプをスリ消している。頸部と体部の境には内面に指頭圧痕が残る。他は回転ナデ調整。 ○頸部外面には波状文が3帯めぐる。波状文の原体は上から1単位8本・12本・9本である。	胎土 やや密。白色砂粒を多量に含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、暗灰色。 断、灰色。
広口壺	14-188	第7層	口径19.1cm	○口頸部は外反して開く。口縁端部	胎土 やや密。白

器種	捕獲番号 回数番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徵 ○形態 ○技法 ○文様	備考
広口壺 蓋	14-188	第7層	頸基部径 12.1cm 体部最大径 25.75cm 口部高0.45cm 器高(17.3cm)	は上方に大きく、下方に小さく拡張する。口縁部と頸部の境、頸部の文様沿間に各々2条づつ凸線がめぐる。体部は最大径をほぼ中位にもつ。体部下半以下は欠失しているため不明である。 ○体部外面は平行タタキ調整。ただし、自然釉が付着しているため不明瞭であるので、格子風タタキ調整の可能性もある。タタキの原体は3本/cmである。体部内面は肩部に同心円文スタンプが残るだけで、大半はスリ消している。他は回転ナデ調整。 ○頸部には波状文が上方では3帯1組で、下方は2帯1組で施文されている。波状文の原体は上から1単位12本・10本・11本・12本・12本である。施文は上から順に行なわれている。	色の砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、暗灰色。 断、暗灰色。
	18-188				
注口土器	14-189 19-189	表 採	直径2.95cm 孔径1.0cm	○注口土器の注口部と思われる。ほぼ管状にのびる。 ○手づくね。ナデの棱線が剛瞭に残る。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、黒灰色。 断、紫灰色。
器台	14-190	表 採	口径30.3cm 器高14.1cm	○杯部のみ残存。杯部は深い。内窓気味にたちあがったのち、口縁部近くで大きく外反して開く。口縁端部は上方に大きく、下方に小さく拡張する。口縁部と体部の境に2条、体部の文様沿間に1条凸線がめぐる。 ○体部外面下半は格子風タタキ調整。タタキの原体は3本/cmである。体部内面下半は同心円文スタンプが残る。スタンプ文の原体は3本	胎土 やや粗。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、黒灰色。 断、紫黒灰色。

器種	捕図番号 出版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
器台	14-190	表 採		/cmである。他は回転ナテ調整。 ○体部外面上半に波状文が2帯めぐる。波状文の原体は上から1単位11本・9本である。下方の波状文のすぐ下には沈線が1条めぐる。	
器台	14-191	表 採	口径31.8cm 器高(13.9cm)	○体部から口縁部に向ってなだらかなカーブで開く。口縁端部は尖り気味である。口縁部と体部の境に1条、体部の文様帶間に2条凸線がめぐる。 ○体部外下面下半は格子風タタキ調整。タタキの原体は2.5本/cmである。体部内面下半は同心円文スタンプが残る。スタンプ文の原体は2本/cmである。他は回転ナテ調整。 ○体部外面上半に波状文が2帯めぐる。波状文の原体は上から1単位11本・8本である。	胎土 やや粗。白色の砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、黒灰色。 外、黒灰色。 断、黒灰色。 全体にひずみが著しい。
器台	14-192 19-194	表 採	口径36.2cm 器高(12.5cm)	○杯部のみ残存。杯部は浅い。体部から口縁部にかけて大きく開く。口縁端部は上方に大きく、下方に小さく拡張する。口縁部と体部の境、体部の文様帶間に各々2条づつ凸線がめぐる。 ○体部外下面下半は格子風タタキ調整。タタキの原体は2.5本/cmである。体部内面は下半は同心円文スタンプが残る。スタンプ文の原体は3本/cmである。他は回転ナテ調整。 ○体部外面上半に波状文が2帯めぐる。波状文の原体はどちらも1単位8本である。	胎土 やや密。白色砂粒を多量に含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、黄灰色。 外、灰色。 断、紫灰色。 ただし、内面の色は自然釉の色である。
器台	14-193	表 採	口径34.1cm 脚基部径 11.6cm	○杯部は浅い。体部から口縁部にかけてなだらかなカーブで大きく開く。口縁端部は下方へわずかに肥	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。

器種	攝団番号 岡阪番号	遺構名 出土層位	法 畳 (cm)	特 微 ○形態 ○技法 ○文様	備 考
器台	14-193	表 探	杯部高 12.4cm 器高(13.2cm)	<p>厚する。口縁部と体部の境には鈍い凸線が1条、体部の文様下には2条凸線がめぐる。脚部は大半が欠失しているためはっきりしないが、最上段には長方形のスカシが穿たれていた痕跡がある。</p> <p>○体部外面下半は平行タタキ調整をスリ消している。タタキの原体は2.5本/cmである。体部内面下半は同心円文スタンプが残る。スタンプ文の原体は3本/cmである。他は回転ナデ調整。杯部と台部の接合部にはNo.195にみられるような同心円状の沈線がめぐる。</p> <p>○体部外面上半には波状文が2帯、脚部にも波状文がめぐる。体部の波状文の原体は1単位11本である。台部の波状文の原体は全体が残っていないので不明である。</p>	外、暗灰青色。 断、灰紫色。
器台	14-194	表 探 第5層	器高(21.3cm)	<p>○脚部のみ残存。脚部は外反しながら胴部へひろがる。胴部は欠失しているため不明。脚柱部は鈍い凸線によって4段に区分されている。最上段には円孔が5方向に、他の段には長方形のスカシが4方向に穿たれている。長方形のスカシは直線的に配置されている。</p> <p>○外面は回転ナデ調整。内面は不定方向のナデ調整。長方形のスカシは面取りを行なっていない。</p> <p>○各段は波状文で飾られている。最上段、最下段は1帯だけが残っている。2段目は2~3帯、3段目は3~4帯認められる。2段目も3段目も一度に波状文を描ききっている可能性が高い。施文は右から左方向に行なわれている。波状</p>	脱土 粗。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、紫灰色。
	19-194				

器種	攝影番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徵 ○形態 ○技法 ○文様	備考
器台	14-194	表 採 第5層		文の原体は1単位12~14本である。	
器台	14-195	表 採	脚基部径 11.6cm 器高(8.9cm)	○脚部のみ残存。脚部は内湾したのち、下外方にぐだる。脚柱部は鈍い凸線によって数段に区分されているが、2段だけ残存している。 上段には円孔が5方向に、下段には長方形のスカシが穿たれている。 ○内外面とも回転ナデ調整。杯部との接合部には自然釉が付着していて、軽石状にまでなっている。 ○文様は最上段だけ観察可能で、波状文で飾られている。波状文は1帯だけであるが、文様の終りの部分だけで2帯にみえる。施文は左右方向に行なわれている。波状文の原体は1単位14本である。	胎土 やや粗。色 色の砂粒を多量に 含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色 色。 外、暗灰色。 断、紫灰色。 外面に土器片が付 着している。この 土器の付着面には 格子彫のタタキが 残っている。
器台	14-196 19-196	表 採	脚基部径 10.2cm 器高(9.7cm)	○脚部のみ残存。脚部はほぼ垂直に 下ったのち、下外方にひらく。鈍い凸線によって数段に区分されて いるが、2段だけ残存している。 上段には円孔が4方向に、下段には長方形のスカシが5方向に穿た れている。 ○内外面とも同軸ナデ調整。長方形のスカシは面取りが行なわれてい ない。杯部との接合部には同心円状の沈線がめぐる。 ○各段とも波状文で飾られている。 上段には3帯、下段は3帯だけ観 察可能である。上段の波状文は一部ナデ消されている。	胎土 やや密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、青灰色。 外、青灰色。 断、紫灰色。
器台	14-197	表 採 第5層	器高(18.0cm)	○脚部のみ残存。脚部は外反しなが ら裾部へ向ってひろがる。裾部は 欠失しているため不明。脚柱部は 鈍い凸線によって4段に区分され	胎土 粗。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰青 色。

器種	捕図番号 及版番号	遺構名 出土層位	法 畳 (cm)	特 微 ○形態 ○技法 ○文様	備 考
器台	14-197	表 探 第5層		<p>ている。最下段は三角形のスカシ、他は長方形のスカシで5方向に穿たれている。すべて直線的に配置されている。</p> <p>○外面は回転ナデ調整。内面は不定方向のナデ調整。スカシは面取りを行なっていない。</p> <p>○各段は波状文で飾られている。最上段は3帯、2段目は4帯、3段目は3帯、最下段は1帯だけ残っている。</p>	外、暗灰色。 断、紫灰色。
器台	15-198 19-198	第6層	裾部径 27.4cm 器高 (24.9cm)	<p>○脚部のみ残存。脚部は裾部に向かって大きくひろがり、裾部近くでわずかに内側へせばまる。裾端部はほぼ平坦、全面で接地する。凸線によって5段に区分されている。上の4段は各々スカシが穿たれている。すなわち、上3段は長方形のスカシ、4段目は三角形のスカシである。すべて直線的に配置されている。</p> <p>○外面は回転ナデ調整。内面は不定方向のナデ調整。スカシは面取りを行なっていない。</p> <p>○上4段は波状文で飾られている。最上段は3帯、2段目は2帯、3段目は3帯、4段目は2~3帯である。波状文の原体は1単位約12本である。</p>	胎土 やや粗。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰青色。 外、灰色。 断、紫灰色。
器台	15-199 20-199	第7層 第8層	脚基部径 9.9cm 裾部径 24.7cm 器高 (25.5cm)	<p>○脚部のみ残存。脚部は裾部に向って外反しながら大きくひろがる。裾端部は凹面をなす。凸線によって5段に区分されている。上の4段は各々スカシが穿たれている。すなわち、上3段は長方形のスカシで5方向に、4段目は三角形の</p>	胎土 密。白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰青色。 外、暗灰色。 断、紫灰色。

器種	拂図番号 図版番号	遺構名 山土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
器台	15-199 20-199	第7層 等8層		<p>スカシで4方向に認められる。長方形のスカシは直線的に、三角形のスカシは少しづらせて配置されている。</p> <p>○外側は回転ナデ調整。内面は不定方向のナデ調整。スカシは面取りが行なわれていない。杯部との接合部には同心円文スタンプが残る。スタンプ文の原体は2本/cmである。</p> <p>○上4段は波状文で飾られている。最上段は2帯、2段目は4帯、3段目は3帯、4段目は2帯である。施文は上から下へ向かって順に施されている。</p>	裾部には十箇片(杯部)が付着。裾端部には粗砂が付着している。
瓶	15-200 20-200	第5層 第6層 第7層	口径36.5cm 底径15.5cm 高さ25.7cm	<p>○底部から口縁部に向かってストレートに外傾して開く。口縁端部は上方へ大きく、下方へ小さく肥厚し、外端部で丸くおさまる。口縁部と体部の境には鈍い凸線が2条めぐる。底部は平坦で、孔が穿たれているが、欠失しているため、形状、数とも不明である。体部の中位には角状の把手がある。断面円形の把手であるが、上面にはヘラによる切り込みがある。</p> <p>○体部外面は平行タキ調整の上に一部カキ目調整が加えられている。体部内面は同心円文スタンプが残る。底部外面は不定方向のヘラ削り調整。底部内面はナデ調整。他は回転ナデ調整。外底面の孔は面取りが行なわれていない。把手は貼り付けている。</p>	<p>胎土 やや密。1～2mmの白色砂粒を多量に含む。</p> <p>焼成 不良、軟質。</p> <p>色調 内、暗灰色。 外、暗灰色。 断、灰茶色。</p> <p>口縁部から体部の中位まで、内面が剥離しているため器壁の厚さは推定である。</p>
提瓶	15-201 20-201	第7層	頸基部径 5.2cm	○口部は大半が欠失している。体部は両面ともほぼ平らで、全体に	<p>胎土 やや粗。</p> <p>焼成 良好、堅緻。</p>

器種	攝図番号 岡阪番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
提瓶	15-201	第7層	体部最大径 17.0cm 体部最大厚 7.5cm 器高(19.0cm)	扁平な提瓶である。肩の両側と右面(前面)に把手の痕跡が認められる。把手はおそらく環状。 ○体部は左面(背面)を下にして扁平な器を作ったのち、右面(前面)の中央部を粘土の円盤でふさいでいる。口縁部は体部成形後に穿孔して接合している。右面外面は平行タタキ調整。平行タタキの原体は3本/cmである。左面外面はナデ調整。右・左向内面には放射状に指頭圧痕が残る。側面内面には円周に沿って指頭圧痕が残る。把手の痕跡にも平行タタキ調整が認められる。原体は右面外面のタタキと同じ。	色調 内、明青灰色。 外、明青灰色。 断、明青灰色。
	20-201				
提瓶	16-202	第6層 第7層 第8層	体部最大径 18.7cm 体部最大厚 11.6cm 器高(18.3cm)	○口頭部と左・右面(前・背面)の肩部は欠失している。体部は左面(前面)が丸くふくれ、右面(背面)はほぼ平らである。肩の両側には把手の痕跡が認められる。把手はおそらく環状。 ○体部は右面向下に扁球形の器を作った後、左面の中央部を粘土の円盤でふさいでいる。左面外面は外周にカキ目調整を施しているが、他は自然積付着のため不明。右面は平行タタキ調整。タタキの原体は3本/cmである。左面内面は中央部の円盤に対して放射状に指頭圧痕が残る。右面内面はナデ調整。側面内面には円周に沿って指頭圧痕が残る。	胎土 やや密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、青灰色。 外、黒灰色。 断、茶灰色。
提瓶	16-203	第7層	体部最大径 16.3cm 体部最大厚	○口頭部と肩部は欠失している。No.202と類似するが、右面(背面)がNo.202よりも平らである。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗青灰

器種	捕獲番号 凶獣番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
提瓶	16-203	第7層	10.2cm 器高(12.0cm)	○成形方法もNo.202と同じ。調整も類似するが、左面外面のカキ目調整はほぼ中央までおよび、また、右面外面が平行タタキ調整ではなく、格子風タタキ調整である。タタキの原体は2.5本/cmである。	色。 外、暗青灰色。 断、紫灰色。
提瓶	16-204 20-204	表 採	口径 7.7cm 頸基部径 5.5cm 体部最大径 21.25cm 口頸高 3.7cm 器高(21.0cm)	○口頸部は外反して開く。口縁端部は上方へ拡張する。体部左面(前面)は欠失しているため不明。右面(背面)はやや丸みをもつ。肩部に把手の痕跡がある。把手はおそらく環状。 ○成形方法は他の提瓶と同じ。口頸部内外面とも回転ナデ調整。右面(背面)外面は格子風タタキ調整。タタキの原体は3本/cmである。右面内面には同心円文スタンプが残る。スタンプの原体は2本/cmである。側面には円周に沿ってヘラ削り調整。	胎土 やや密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、灰紫色。
提瓶	16-205	表 採	口径 5.6cm 頸基部径 4.4cm 口頸高 2.05cm 器高(4.5cm)	○口頸部は極めて短く、外反して開く。口縁端部はやや内上方へ拡張する。体部は大半が欠失しているため不明。 ○口頸部内外面とも回転ナデ調整。体部外面は自然釉付着のため調整不明。体部内面には指頭圧痕が残る。頸基部内面には口頸部接合時の継ぎ目が残る。	胎土 やや粗。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、青灰色。 外、灰色。 断、暗紫灰色。
提瓶	16-206	第6層 第7層	口径7.75cm 頸基部径 4.95cm 器高(3.7cm)	○口頸部のみ残存。口頸部は外反して開く。口縁端部は上・下にわずかに拡張する。 ○口頸部内外面とも回転ナデ調整。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、暗灰色。 断、紫灰色。

器種	捕団番号 岡阪番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
提瓶	16-207	表 採	口径 7.8cm 頸基部径 6.1cm 口頸高4.1cm 器高(6.8cm)	○口頸部は外反して開く。口縁端部は上方へ抵張する。体部は大半が欠失しているが、肩部の形態から推察すると右面(背面)はほぼ平らで、左面(前面)は丸くふくらむ。 ○口頸部内外面とも回転ナデ調整。体部外面はナデ調整。内面には指顎圧痕が残る。	胎土 やや密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、暗灰色。 断、紫灰色。
提瓶	16-208	第6層	口径 6.6cm 頸基部径 5.75cm 体部最大径 20.4cm 口頸高 3.0cm 器高(17.6cm)	○口頸部は短くたちあがったのち、外反して開く。器壁は口縁端部に向かって徐々に薄くなる。口縁端部は丸くおさまる。体部は側辺を除いて大半が欠失している。肩部の形態から、左面(背面)が平らで、右面(前面)が丸くふくらんでいることがわかる。両肩部に環状の把手がついている。 ○成形方法は他の提瓶と同じ。口頸部は内外面とも回転ナデ調整。他は自然釉のため調整不明。把手は貼りつけている。	胎土 やや粗。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰茶色。 外、黒灰色。 断、黒灰色。
提瓶	16-209	第3層	口径 7.45cm 器高(5.8cm)	○口頸部のみ残存。口頸部は外傾したのち、受口状にたちあがる。口縁端部は丸くおさまる。全体に器壁は薄い。 ○口頸部内外面とも回転ナデ調整。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、紫灰色。
提瓶	16-210	表 採	口径 9.9cm 頸基部径 6.75cm 器高(6.05cm)	○口頸部のみ残存。口頸部は外傾して開く。口縁端部は丸くおさまる。器壁は中央が厚く、口縁端部や頸基部近くでは薄くなっている。 ○口頸部内外面とも回転ナデ調整。	胎土 やや粗。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、青灰色。 外、青灰色。 断、灰紫色。
把手	16-211	表 採		○把手のみ残存。カギ状に深く屈曲する。先端は尖り気味である。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。

器種	標印番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
把手	16-211	表 探		○ナデ調整。	色調 明灰色。
甌	17-212	第7層 第8層	口径13.0cm 頸基部径 9.9cm 体部最大径 24.1cm 口頸高2.6cm 器高 (23.6cm)	○口頸部は短く、外反して大きく開く。口縁端部は上方へ拡張する。体部は大きく張り出し、最大径をほぼ中位にもつ。底部はおそらく丸底。 ○口頸部から肩部にかけて内外面とも回転ナデ調整。体部外面は格子風タタキ調整。タタキの原体は3本/cmである。内面は同心円文スタンプをスリ消している。	胎土 やや密。白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、暗灰色。 断、紫灰色。
	20-212				
甌	17-213	第7層	口径13.2cm 頸基部径 9.3cm 体部最大径 15.2cm 口頸高3.6cm 体部高12.8cm 器高16.4cm	○口頸部は外反して開く。口縁端部は上方に拡張し、上端で尖る。体部は丸みをもつが、それほど大きく張り出さない。体部最大径は上位にある。底部は丸底である。全体に器壁は薄い。 ○口頸部内外面とも回転ナデ調整。体部外面は上半が平行タタキ調整を一部残してスリケシしているが、下半は平行タタキ調整。タタキの原体は4本/cmである。内面は同心円文スタンプをスリ消している。肩部内面には指頭圧痕が残る。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、灰紫色。
	21-213				
甌	17-214	第7層	頸基部径 8.7cm 体部最大径 14.5cm 体部高11.5cm 器高11.7cm	○体部のみ残存。体部は最大径をやや上位にもつ。底部は丸底である。 ○体部外面は上半が回転ナデ調整。下半は平行タタキ調整。タタキの原体は3本/cmである。内面は窓体がつまっているため不明。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、灰紫色。 体部内面には窓体がつまっている。 体部外面にヘラ記号がある。
甌	17-215	表 探	口径14.6cm	○口頸部のみ残存。口頸部は外反し	胎土 粗。

器種	掲図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
甕	17-215	表 採	器高(4.3cm)	て開く。口縁端部は上・下に拡張する。 ○頸部外面はカキ目調整。他は回転ナデ調整。	焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰青色。 外、暗灰色。 断、暗灰青色。
甕	17-216	表 採 第3層	口径14.2cm 器高(5.2cm)	○口頸部のみ残存。口頸部は外反して開く。口縁端部は上方へ拡張する。 ○頸部外面はカキ目調整。他は回転ナデ調整。	胎土 やや密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、黒灰色。 外、黒灰色。 断、紫灰色。
甕	17-217	表 採	口径14.9cm 頸基部径 11.65cm 口頸高3.6cm 器高(8.0cm)	○口頸部は外反して開く。口縁端部近くに凸線が1条めぐる。口縁端部は丸くおさまる。体部はそれほど張り出さない。体部下半は欠失しているため不明。 ○口頸部内外面とも回転ナデ調整。体部外面は格子風タタキ調整。タタキの原体は3本/cmである。体部内面はスリ消している。	胎土 やや密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、紫灰色。
甕	17-218	表 採	口径16.8cm 頸基部径 13.2cm 口頸高3.0cm 器高(6.9cm)	○口頸部は短く、外傾して大きく開く。口縁端部は上・下に拡張する。体部は大きく張り出す。 ○口頸部内外面とも回転ナデ調整。体部外面は平行タタキ調整。タタキの原体は2.5本/cmである。体部内面はスリ消している。	胎土 やや密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、青灰色。 外、暗灰青色。 断、赤紫色。
甕	17-219	表 採	口径17.6cm 頸基部径 12.2cm 口頸高4.25cm 器高(7.5cm)	○口頸部は外反して大きく開く。口縁端部は上方へ拡張する。上端は尖る。体部はそれほど張り出しない。 ○口頸部内面とも回転ナデ調整。体部外面は平行タタキ調整。タタキの原体は4本/cmである。内面は同心円文スタンプをスリ消している。	胎土 やや密。1 ~2mmの白色・黒 色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、灰色。

器種	捕獲番号 出版番号	遺構名 出七層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
甕	17-220	表 採	口径 21.0cm 頸基部径 15.5cm 口頸高 4.3cm 器高(8.7cm)	○口頸部は短く、大きく外反して開く。口縁端部は上方へ拡張する。体部はやや張り出す。 ○口頸部内外面は回転ナデ調整。体部外面は平行タタキ調整。タタキの原体は2.5本/cmである。内面はスリ消している。	胎土 やや粗。白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。色調 内、暗灰色。外、暗灰色。断、紫灰色。
甕	17-221	表 採 第2層 第3層 第6層	口径 17.4cm 頸基部径 12.4cm 口頸高 4.35cm 器高(6.8cm)	○口頸部は外傾して開く。口縁端部は上・下に拡張する。体部は大部分が欠失しているため不明。 ○口頸部外面とも回転ナデ調整。体部外面は平行タタキ調整の上にカキ目調整を付加している。タタキの原体は3.5本/cmである。内面は同心円文スタンプを一部スリ消している。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。色調 内、青灰色。外、青灰色。断、灰褐色。
甕	17-222	表 採 第5層	口径 18.25cm 頸基部径 14.75cm 器高(5.6cm)	○口頸部のみ残存。口頸部は外反して開く。口縁端部は上・下に拡張する。 ○口頸部外面とも回転ナデ調整。	胎土 やや密。 焼成 良好、堅緻。色調 内、灰色。外、灰色。断、紫灰色。頸部外面にヘラ記号が有る。
甕	17-223 21-223	第2層 第3層 第6層 第7層	口径 16.5cm 頸基部径 13.8cm 体部最大径 25.9cm 口頸高 6.45cm 体部高 21.15cm 器高 27.6cm	○口頸部は比較的長く、外反して開く。口縁端部は上方に拡張する。体部は最大径を中位にもつ。底部は丸底である。 ○口頸部外面とも回転ナデ調整。体部外面は格子彫タタキ調整。タタキの原体は3本/cmである。内面は同心円文スタンプが残る。	胎土 やや粗。白色の砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。色調 内、暗灰色。外、灰色。断、紫灰色。
甕	18-224	第7層	口径 13.1cm 頸基部径 9.5cm	○口頸部のみ残存。筒状の頸部から大きく外反して開く。口縁端部は上・下に拡張する。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。色調 内、暗灰色。

器種	採回番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
甕	18-224	第7層	口頸高5.3cm 器高 6.6cm	○口頸部内外面とも回転ナデ調整。	外、暗灰色。 断、暗灰色。
甕	18-225	表 採 第5層 第6層 第7層	口径12.1cm 頸基部径 9.55cm 口頸高 4.0cm 器高5.65cm	○筒状の頸部から外折して開く。口縁端部は上方へ拡張する。体部は大きく張り出す。 ○口頸部内外面とも回転ナデ調整。体部外面は平行タタキ調整が交差している。タタキの原体は4本/cmである。内面はスリ消している。	胎土 密。1~3mmの白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、灰色。
甕	18-226	表 採 第5層 第7層	口径14.6cm 頸基部径 11.3cm 口頸高 5.4cm 器高(10.1cm)	○口頸部は外反して開く。口縁端部は上方へ拡張する。体部は大きく張り出す。 ○口頸部内外面とも回転ナデ調整。体部外面は平行タタキ調整が交差させている。一部、格子風タタキ調整になっているところもある。タタキの原体は3本/cmである。内面は同心円文スタンプが残る。スタンプの原体は3本/cmである。 ○肩部には放射状にヘラによる斜線文が施されている。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、紫灰色。 体部外面に窓体が付着している。
甕	18-227	第7層	口径17.0cm 頸基部径 14.5cm 口頸高4.4cm 器高(10.3cm)	○口頸部は外反して開く。口縁端部は上・下に拡張する。体部は大きく張り出す。 ○口頸部内外面とも回転ナデ調整。体部外面は格子風タタキ調整。タタキの原体は3.5本/cmである。内面は同心円文スタンプが残るが、一部スリ消している。スタンプ文の原体は2本/cmである。	胎土 やや粗。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰褐色。 断、紫灰色。
甕	18-228	表 採	口径19.1cm 頸基部径 15.0cm 口頸高 3.5cm	○口頸部は短く、外反して大きく開く。口縁端部は下方へわずかに拡張する。体部はやや張り出す。 ○口頸部内外面とも回転ナデ調整。	胎土 やや密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、黒灰青色。

器種	捕獲番号 回収番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
甕	18-228	表 採	器高(11.8cm)	体部外面は平行タタキ調整。タタキの原体は3本/cmである。内面は同心円文スタンプをスリ消している。	外、灰青色。 断、綠黄灰 色。
甕	18-229	表 採	口径21.0cm 頸基部径 17.4cm 口頸高4.7cm 器高(6.6cm)	○口頭部はわずかに外反したのち、口縁部で大きく外折して開く。口縁端部は上方へ大きく拡張する。体部は大半が欠失しているため不明。 ○口頭部内外面とも回転ナデ調整。体部外面は平行タタキ調整。タタキの原体は4本/cmである。内面は同心円文スタンプが残るが、一部スリ消している。	胎土 やや粗。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、淡灰色。 外、暗灰色。 断、紫灰色。
甕	18-230	表 採	口径18.1cm 頸基部径 14.5cm 口頸高4.6cm 器高(6.9cm)	○口頭部は外反して開く。口縁端部は上方へ拡張する。体部は大半が欠失しているため不明。 ○口頭部内外面とも回転ナデ調整。体部外面は平行タタキ調整。タタキの原体は3本/cmである。内面は同心円文スタンプが残る。スタンプの原体は3本/cmである。	胎土 密。1~2 mmの白色砂粒を含 む。 焼成 不良、やや 軟質。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、茶褐色。
甕	18-231	第6層 第7層	口径16.5cm 頸基部径 13.0cm 口頸高4.5cm 器高(10.8cm)	○口頭部は外反して開く。口縁端部は上・下に拡張する。ただし、下方はごくわずかである。体部は大きく張り出す。 ○口頭部内外面とも回転ナデ調整。体部外面は平行タタキ調整。タタキの原体は3.5本/cmである。内面は同心円文スタンプが残る。スタンプの原体は2本/cmである。	胎土 やや粗。白 色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰褐色。 断、紫灰色。
甕	18-232	表 採	口径17.55cm 頸基部径 15.7cm	○口頭部は外反して開く。口縁端部は上・下に拡張する。ただし、下方はごくわずかである。体部は張	胎土 やや密。1 ~2 mmの白色砂粒 を含む。

器種	攝図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徵 ○形態 ○技法 ○文様	備考
甕	18-232	表 採 ■	口頸高 4.7cm 器高 (8.9cm)	りだす。 ○口頸部内外面とも回転ナデ調整。体部外面は格子風タタキ調整。タタキの原体は 2 本 / cm である。内面は同心円文スタンプが残る。スタンプの原体は 2 本 / cm である。	焼成 不良、軟質。 色調 内、灰色。 外、灰色。 断、灰色。
甕	18-21-233 20-233	表 採	口径 21.8cm 頸基部径 15.25cm 口頸高 5.0cm 器高 (5.0cm)	○口頸部のみ残存。口頸部は外反して開く。口縁端部は上・下に拡張する。ただし、下方はごくわずかである。 ○口頸部内外面とも回転ナデ調整。 ○頸部外面にヘラによる線刻画が描かれている。全体がわからないが、「四足を持つ動物」の絵であることがわかる。	胎土 やや密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、暗灰色。 断、紫灰色。
甕	18-234 21-234	第 2 層 第 6 層 第 7 層	口径 19.5cm 頸基部径 13.8cm 口頸高 3.1cm 器高 (15.7cm)	○口頸部は短く、外反して大きく開く。口縁端部は上・下に拡張する。体部は大きく張り出す。 ○口頸部内外面とも回転ナデ調整。体部外面は平行タタキ調整の上からカキ目調整を付加している。タタキの原体は 3 本 / cm である。内面は同心円文スタンプが残る。スタンプの原体は 3 本 / cm である。	胎土 粗。白色の砂粒を多く含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、黒灰色。 外、灰褐色。 断、黒灰色。
甕	18-235	第 5 層 第 6 層 第 7 層	口径 25.7cm 頸基部径 21.0cm 口頸高 4.6cm 器高 (9.5cm)	○口頸部は短く、外反して開く。口縁端部は上方に拡張する。体部は大きく張り出す。 ○口頸内外面とも回転ナデ調整。体部外面は格子風タタキ調整の上からカキ目調整を付加している。タタキの原体は 3 本 / cm である。内面はシリ消している。	胎土 やや密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰褐色。 外、灰色。 断、灰褐色。
甕	19-236	表 採	口径 20.7cm 頸基部径	○口頸部は外反して開く。口縁端部は上方に拡張する。口縁部外面に	胎土 密。1 ~ 2 mm の白色砂粒を含

器種	銘文番号 図版番号	遺構名 出土層位	法 周(cm)	特 微 ○形態 ○技法 ○文様	備 考
甕	19-236	表 採	16.3cm 口頭高5.5cm 器高(12.0cm)	は凸線が1条めぐる。体部は大きく張り出す。 ○口頭部内外面とも回転ナデ調整。 体部外面は格子風タタキ調整の上からカキ目調整を付加している。 タタキの原体は4木/cmである。 内面は同心円文スタンプが残る。 スタンプの原体は4木/cmである。	む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰青色。 外、灰青色。 断、灰青色。
甕	19-237	表 採	口徑21.3cm 頭基部径 16.1cm 口頭高 6.6cm 器高 (21.6cm)	○口頭部は外反して開く。口縁端部は上・下に拡張する。ただし、下方へはわずかである。体部は張り出す。 ○口頭部内外面とも回転ナデ調整。 体部外面は格子風タタキ調整の上からカキ目調整を付加している。 タタキの原体は3.5本/cmである。 内面には同心円文スタンプが残る。 スタンプの原体は3.5木/cmである。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰青色。 外、灰青色。 断、紫灰色。
甕	19-238 21-238	第7層	口徑20.1cm 頭基部径 17.6cm 体部最大径 39.1cm 口頭高5.0cm 器高(23.1cm)	○口頭部は短く、外反して開く。口縁端部は下方へわずかに拡張する。体部は大きく張り出す。全体に器壁が厚い。 ○口頭部内外面とも回転ナデ調整。 体部外面は格子風タタキ調整。タタキの原体は3木/cmである。内面は同心円文スタンプが残る。ただし、肩部内面のところを一部スリ消している。スタンプの原体は2木/cmである。	胎土 やや粗。1～3mmの白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、暗灰色。 断、灰紫色。 体部外面に黒体が付着している。
甕	19-239	第6層	口徑21.0cm 頭基部径 16.65cm 口頭高 7.05cm 器高 (8.2cm)	○口頭部のみ残存。口頭部は外反して開く。口縁端部は上・下にわずかに拡張する。 ○口頭部内外面とも回転ナデ調整。	胎土 粗。2～3mmの白色砂粒を多く含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、黒灰色。 外、黒灰色。

器種	備考番号 図版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
甕	19-239	第6層			断、紫灰色。
甕	19-240 21-240	表 採	口径23.0cm 頸基部径 15.8cm 口頸高 7.75cm 器高(12.2cm)	○口頸部は外反して開く。口縁端部は上方へ拡張する。体部は大きく張り出す。 ○口頸部内外面とも回転ナデ調整を施しているが、頸部外面には格子風タタキ調整が残る。タタキの原体は3本/cmである。体部外面は頸部と同じ原体の格子風タタキ調整の上にカキ目調整を付加している。内面は同心円文スタンプが残る。スタンプの原体は3.5本/cmである。	胎土 やや密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、黒灰色。 断、紫灰色。
甕	20-241	表 採 第5層 第6層	口径16.4cm 頸基部径 14.3cm 口頸高4.5cm 器高(15.2cm)	○口頸部は短く、外反して開く。口縁端部は上・下にわずかに拡張する。体部は大きく張り出す。 ○頸部外面はカキ目調整。口縁部外面と口頸部内面は回転ナデ調整。体部外面は平行タタキ調整の上からカキ目調整を付加している。タタキの原体は2.5本/cmである。内面はスリ消している。頸基部内面には指頭圧痕が残る。	胎土 やや粗。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、黒灰色。 外、灰色。 断、紫灰色。
甕	20-242	表 採	口径20.4cm 頸基部径 14.95cm 口頸高5.3cm 器高11.3cm	○口頸部は短く、外反して開く。口縁端部は上・下にわずかに拡張する。体部は張り出す。 ○口頸部内外面とも回転ナデ調整を施しているが、頸部外面に一部平行タタキ調整が残る。タタキの原体は3本/cmである。体部外面は格子風タタキ調整。タタキの原体は3本/cmである。体部内面は同心円文スタンプが残る。スタンプの原体は2本/cmである。頸基部には指頭圧痕が残る。	胎土 やや密。白色の砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗青灰色。 外、暗青灰色。 断、青灰色。

器種	捕获番号 及版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
甕	20-243	第7層	口径24.4cm 頸基部径 17.4cm 口頸高6.8cm 器高(14.6cm)	○口頸部は外反して開く。口縁端部は上方へ拡張する。口縁部と頸部の境には凸線が1条めぐる。体部は大きく張り出す。 ○口頸部内外面とも回転ナデ調整。体部外面は平行タタキ調整を一部スリ消している。また、カキ目調整も行なっている。タタキの原体は3本/cmである。体部内面は同心円文スタンプが残る。スタンプの原体は2.5本/cmである。	胎土 やや粗。白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、暗灰色。 断、紫灰色。
	21-243				
甕	20-244	第2層 第6層 第7層	口径24.2cm 頸基部径 17.2cm 体部最大径 44.5cm 口頸高6.45cm 器高(29.5cm)	○口頸部は外反して開く。口縁端部は上・下に拡張する。ただし、下方へはわずかである。体部は大きく張り出す。 ○口頸部内外面とも回転ナデ調整。体部外面は平行タタキ調整。タタキの原体は2.5本/cmである。体部内面は同心円文スタンプが残る。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、黒灰色。 外、灰色。 断、紫灰色。
	21-244				
	22-245		口径43.7cm 頸基部径 35.4cm 口頸高17.5cm 器高(19.1cm)	○口頸部は長く、外反して開く。口縁端部は上方に拡張する。口縁部と頸部の境、頸部の文様帶間と直下に各々凸線が1条づつめぐる。体部は大半が欠失しているため不明。 ○口頸部内外面とも回転ナデ調整。体部外面は平行タタキ調整。内面には同心円文スタンプが残る。 ○頸部には波状文が2条めぐる。波状文の原体は上が1単位16本、下が1単位20本である。波状文のピッチは細かい。	胎土 やや粗。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、暗灰色。 断、紫灰色。
甕	22-246	表 採	口径41.4cm 頸基部径 31.1cm	○口頸部はやや短く、外反して開く。口縁端部は上・下に拡張する。ただし、下方へはわずかである。口	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、淡灰色。

器種	攝影番号 出版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
甕	22-246	表 採	口頭高 15.0cm 器高 16.9cm	○縁部と頸部の境に1条、頸部の文様帶間と直下に2条づつ、凸線がめぐる。体部は大半が欠失しているため不明。 ○口頭部内外面とも回転ナデ調整。体部外面は格子風タタキ調整。体部内面は同心円文スタンプが残る。 ○頸部外面には波状文が2条めぐる。波状文の原体はともに1単位10本である。波状文のピッチは粗い。	外、暗灰色。 断、紫灰色。
甕	22-247	第7層	口径47.8cm 器高(15.1cm)	○口頭部は外反して開く。口縁端部は上・下に拡張する。口縁部と頸部の境に1条、頸部の文様帶間と直下に2条づつ凸線がめぐる。体部は欠失しているため不明。 ○口頭部は内外面とも回転ナデ調整を行なっているが、頸部内面に同心円文スタンプがわずかに残る。 ○頸部外面に波状文が2条めぐる。波状文の原体は上が1単位8本、下が1単位9本である。	胎土 やや粗。1～3mmの白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、白灰色。 外、黒灰色。 断、紫灰色。
甕	22-248	表 採	口径42.0cm 頸基部径 34.0cm 口頭高 14.3cm 器高(19.0cm)	○口頭部は短く、外反して開く。口縁端部は上方へ拡張する。口縁部と頸部の境に1条、頸部の文様帶間と直下に2条づつ凸線がめぐる。体部は大きく張り出す。 ○口頭部は内外面とも回転ナデ調整を行なっているが、頸部外面に平行タタキ調整がわずかに残る。体部外面は格子風タタキ調整。体部内面は同心円文スタンプが残る。 ○頸部外面に波状文が2条めぐる。	胎土 密。1～3mmの白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰青色。 外、灰青色。 断、紫灰色。
甕	23-249 22-249		口径48.7cm 器高(18.1cm)	○口頭部は長く、外反して開く。口縁端部は上・下に拡張する。ただし、下方はわずかである。口縁部	胎土 やや粗。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。

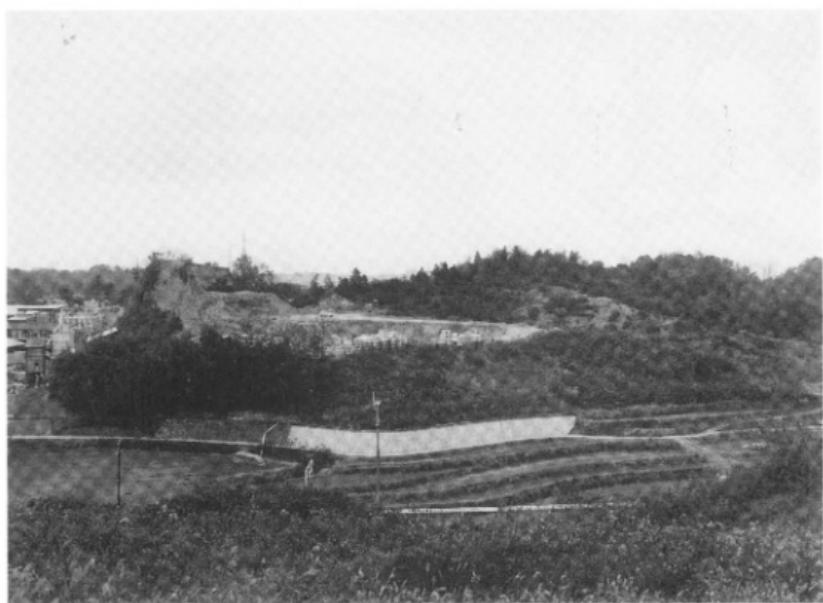
器種	地文番号 国版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
甕	23-249	表 採 第5層 第7層		と頸部の境、頸部の文様帶間と直下に各々2条づつ鈍い凸線がめぐる。体部は欠失しているため不明。 ○口頸部外面は回転ナデ調整を行なっているが、平行タタキ調整を行なわれていたこともわかる。内面は同心円文スタンプが残る。	外、灰紫色。 断、紫灰色
	22-249			○頸部外面に波状文が2条めぐる。 波状文の原体は上が1単位9本、下が1単位8本である。	
甕	23-250	第7層	口径45.8cm 頸基部径 35.9cm 口頸高 16.4cm 器高(18.9cm)	○口頸部はやや長く、外反して開く。 口縁端部は上方に拡張する。口縁部と頸部の境に2条、頸部の文様帶間と直下に各々1条づつ鈍い凸線がめぐる。体部は大きく張り出す。 ○口頸部内外面とも回転ナデ調整。 体部外面は格子風タタキ調整。内面は同心円文スタンプが残る。 ○頸部外面に波状文が2条めぐる。 波状文の原体は上が18本、下が17本である。波状文のピッチは細かい。	胎土 やや粗。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、暗灰色。 断、紫灰色。
甕	23-251	表 採	口径43.8cm 器高(16.8cm)	○口頸部はやや長く、大きく外反して開く。口縁端部は上方に拡張する。口縁部と頸部の境、頸部の文様帶間と直下に各々2条づつ凸線がめぐる。体部は欠失しているため不明。 ○口頸部内外面は回転ナデ調整を行なっているが、外面に平行タタキ調整がかすかに残る。 ○頸部外面に波状文が2条めぐる。 波状文の原体はともに1単位13本である。	胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、暗灰色。 断、紫灰色。
甕	23-252	第6層 第7層	口径45.5cm	○口頸部はやや長く、わずかに外反	胎土 やや粗。

器種	捕図番号 戻版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
甕	23-252 22-252	第6層 第7層	頸基部径 39.4cm 口頭高 16.5cm 器高 31.2cm	して開く。口縁端部は上方に拡張する。口縁部と頸部の境、頸部の文様帯間と直下に各々2条づつ凸線がめぐる。体部は大きく張り出す。 ○口頸部内外面とも回転ナデ調整。体部外面は平行タタキ調整。タタキの原体は3本/cmである。内面は同心円文スタンプが残る。スタンプの原体は2本/cmである。 ○頸部外面に波状文が2条めぐる。波状文の原体はともに1単位9本である。	焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、暗灰色。 断、紫灰色。 この甕は他と縮尺が違う。
甕	24-253	第5層 第6層 第7層	口径44.2cm 頸基部径 32.5cm 口頭高 13.4cm 器高(19.3cm)	○口頸部は短く、外反して開く。口縁端部は上方に拡張する。口縁部と頸部の境、頸部の文様帯間と直下に各々2条づつ凸線がめぐる。体部は大きく張り出す。 ○口頸部内外面とも回転ナデ調整を行なっているが外面に平行タタキ調整が残る。体部外面は格子風タタキ調整。タタキの原体は3本/cmである。内面には同心円文スタンプが残る。スタンプの原体は3本/cmである。 ○頸部外面に波状文が2条めぐる。波状文の原体は上が1単位11本、下が1単位12本である。	胎土 やや密。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、暗灰色。 断、紫灰色。
甕	24-254	第5層	口径41.3cm 頸基部径 29.9cm 口頭高 13.4cm 器高(14.6cm)	○口頸部は短く、ゆるやかに外反したのち、口縁部近くで大きく開く。口縁部と頸部の境、頸部の文様帯間と直下に各々2条づつ鈍い凸線がめぐる。体部は大半が欠失しているため不明。 ○口頸部内外面とも回転ナデ調整。体部内面には同心円文スタンプが	胎土 やや密。1 ~4mmの白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、灰紫色。 断、紫褐色。

器種	標図番号 図版番号	遺構名 出土層位	法星(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
甕	24-254	第5層		<p>残る。</p> <p>○頸部外面に波状文が2条めぐる。波状文の原体は上が1単位9本、下が1単位8本である。</p>	
甕	24-255	表 探	口径42.6cm 頸基部径 32.0cm 口頸高 14.0cm 器高(15.3cm)	<p>○口頸部はやや短く、ゆるやかに外反したのち、口縁部近くで大きく開く。口縁部と頸部の境、頸部の文様帶間と直下に各々2条づつ凸線がめぐる。体部は大半が欠失しているため不明。</p> <p>○口頸部内外面とも同転ナデ調整を行なっているが、内面には一部同心円文スタンプが残る。体部外面には格子風タタキ調整、内面には同心円文スタンプが残る。</p> <p>○頸部外面に波状文が2条めぐる。波状文の原体はともに1単位8本である。</p>	胎土 やや粗。1~3mmの白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、灰色。 外、淡灰色。 断、紫灰色。
甕	24-256	第1層 第2層 第5層 第6層 第7層	口径41.4cm 頸基部径 32.4cm 口頸高 19.9cm 器高(20.8cm)	<p>○口頸部は外傾して開く。口縁端部は上・下にわずかに拡張する。口縁部と頸部の境に3条、頸部の文様帶間と直下に各々1条づつ凸線がめぐる。体部は大半が欠失しているため不明。</p> <p>○口頸部内外面とも不定方向のナデ調整。体部内面には同心円文スタンプが残る。</p> <p>○頸部外面には波状文が3条めぐる。波状文の原体は上から1単位8~12本、21本、12本である。</p>	胎土 やや粗。白色の砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 色調 内、暗灰色。 外、暗灰色。 断、紫灰色。
上 縫	25-257 20-257	表 探	長さ 6.7cm 外径 1.1cm 円孔径 0.8cm	<p>○管状の七鍾である。</p> <p>○手づくねで、ナデの稜線が明顯に残る。</p>	胎土 密。 焼成 不良、軟質。 色調 淡灰白色。
甕 土 形器	26-258	第7層	口径13.3cm	○口頸部は内湾気味に上外方へのび	胎土 粗。1~3

器種	傾岡藩片 岡版番号	遺構名 出土層位	法量(cm)	特徴 ○形態 ○技法 ○文様	備考
壺形土器	26-258	第7層	頸基部径 11.3cm 体部最大径 13.95cm 底径 4.3cm 口頸高 2.1cm 器高 19.95cm	る。口縁端部は丸くおさまる。体部はそれほど張らず、口径よりわずかに大きいだけである。体部最大径はほぼ中位にもつ。底部は厚く、平底である。 ○口縁部内面は刷毛目調整。外面はナデ調整。口縁端部に近い内面に指頭圧痕か刻み目かはっきりしないくぼみがある。体部から底部にかけて外面は平行タタキ調整が行なわれているが、中央部で一部ナデ消している。タタキの原体は2~3本/cmである。内面はナデ調整を行なっているが、一部に刷毛目調整が残る。外底面はナデ調整。	mmの白色砂粒を多量に含む。金雲母もわずかに含む。 色調 内、淡茶褐色。 外、淡茶褐色。 断、茶色。 外面に煤が付着している。
底部	26-259	第7層	底径 4.65cm 器高 (4.7cm)	○底部のみ残存。底部は厚く、平底である。 ○底部外面は平行タタキ調整。他は磨拭と剝離のため調整不明。外底面はナデ調整。	胎土 精良。2~3mmの白色砂粒を含む。 色調 内、明茶色。 外、明茶色。 断、明茶色。

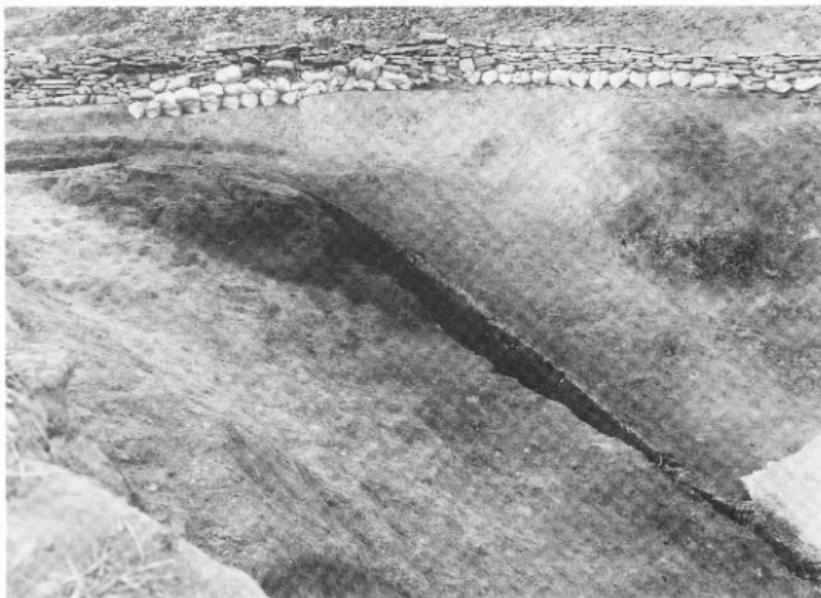
図 版



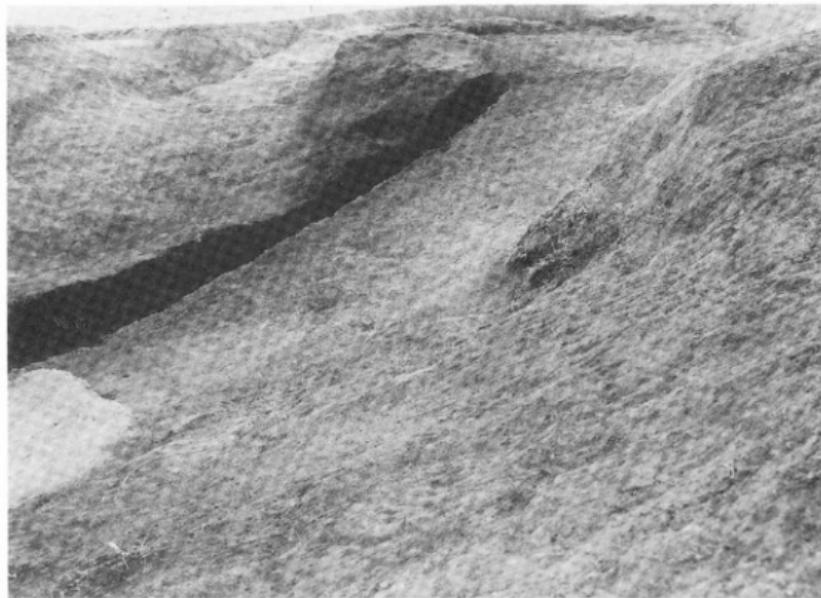
調査地遠景 南東から



調査地近景 北東から



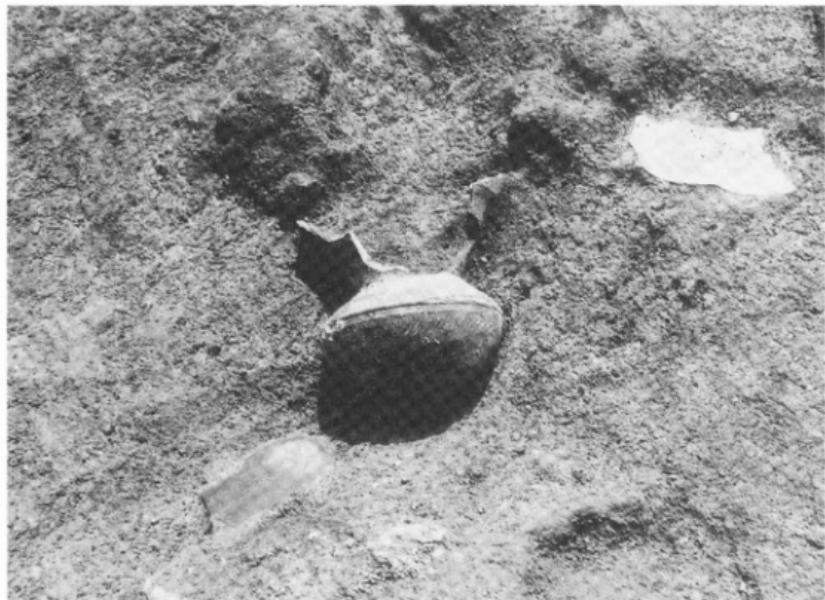
灰原全景 南東から



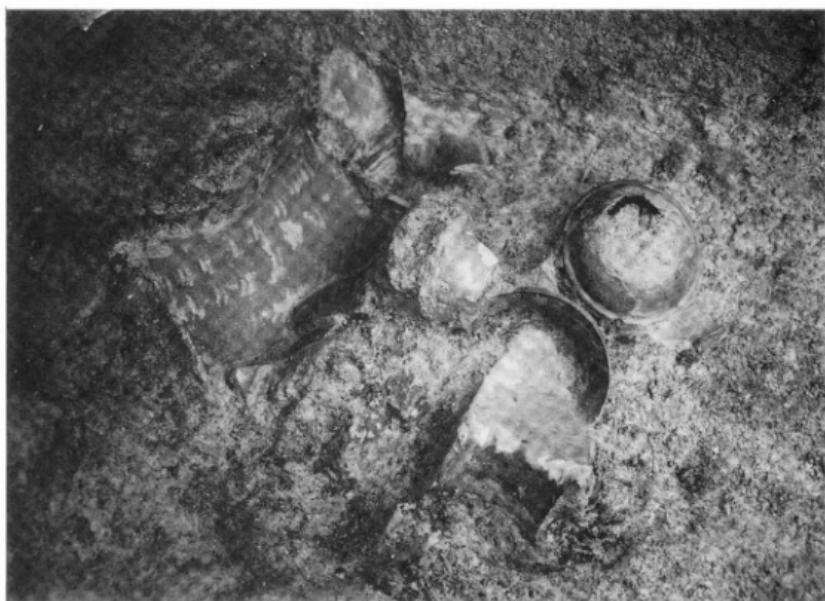
灰原全景 北東から



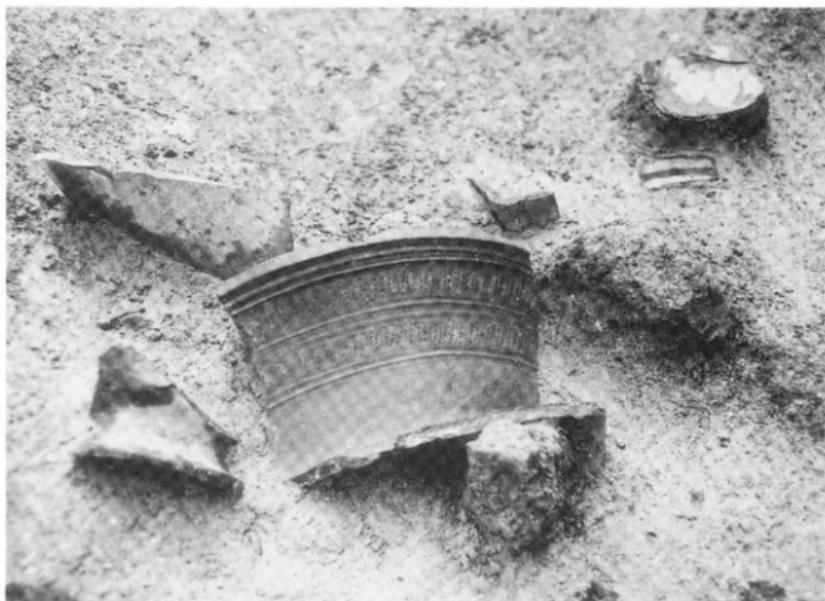
灰原遺物出土状況 東から



灰原遺物出土状況 北から



灰原遺物出土状況 南から



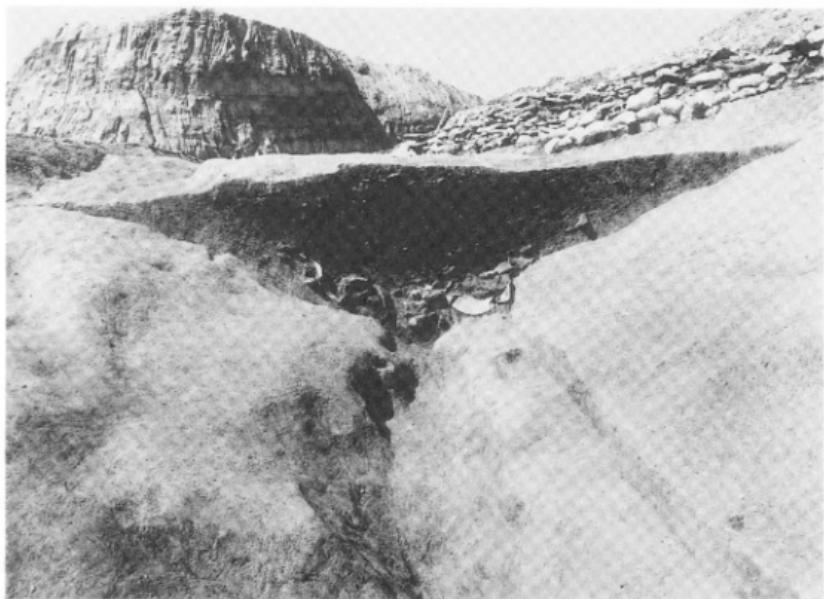
灰原遺物出土状況 東から



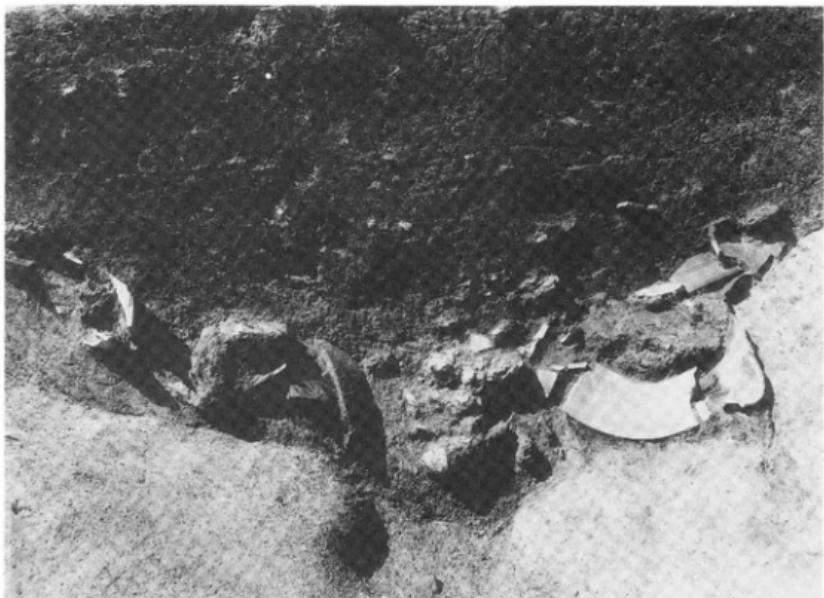
灰原遺物出土状況 南から



灰原遺物出土状況 東から



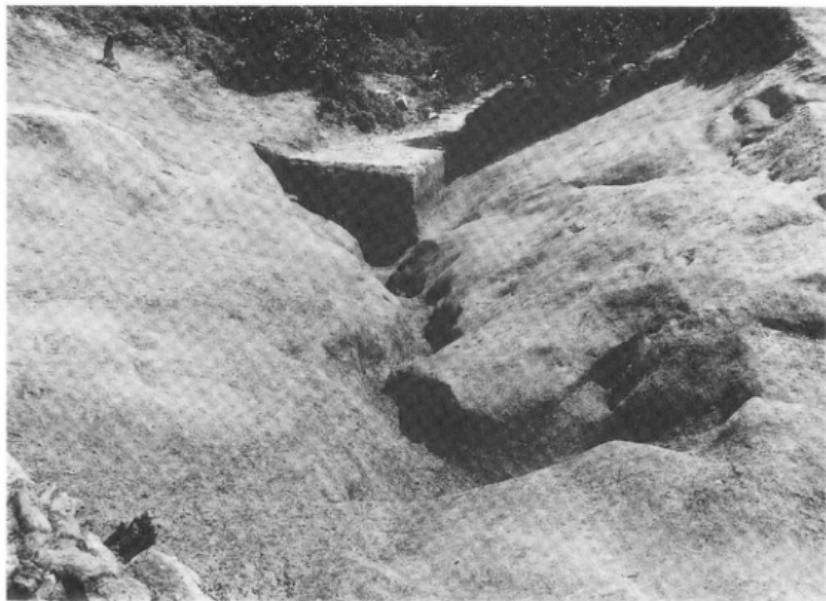
灰原断面 東から



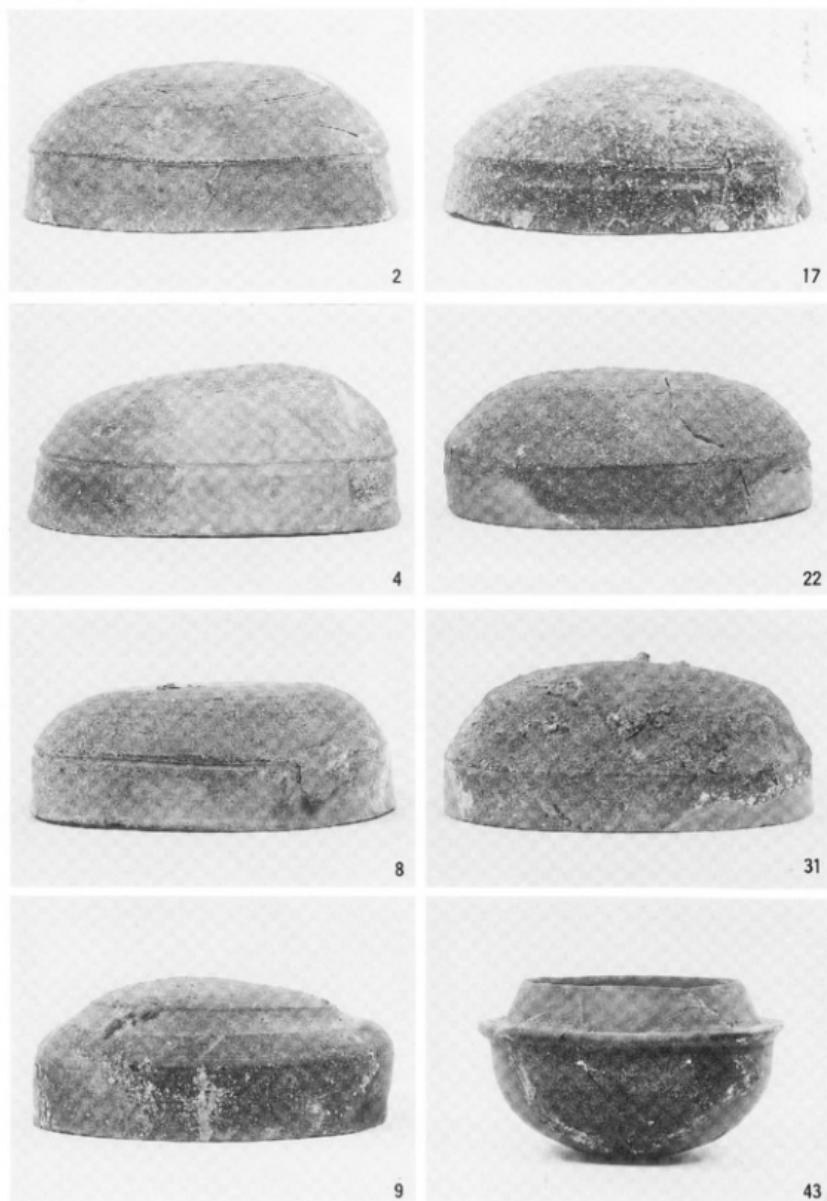
灰原断面 東から



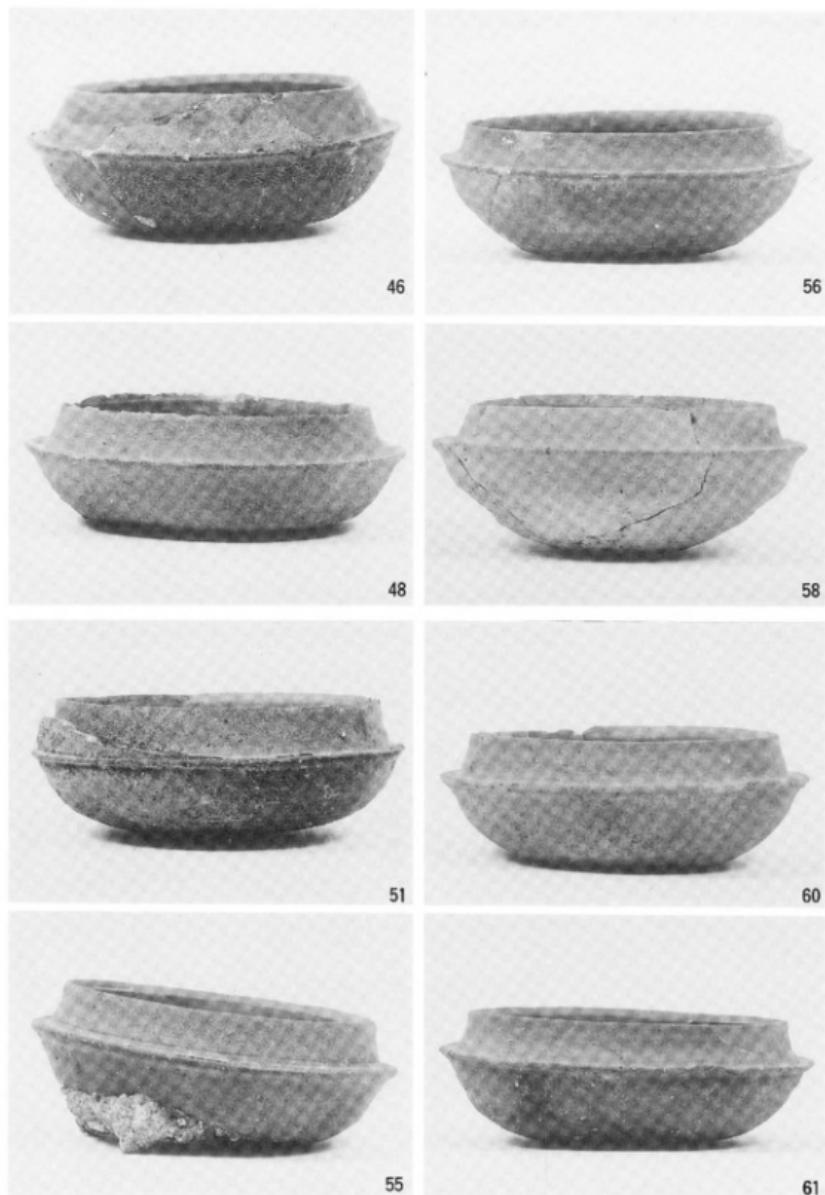
灰原完掘後全景 東から



灰原完掘後全景 西から



出土遺物(杯蓋・杯身)



出土遺物(杯身)



62



67



64



68



65



71



66



75

出土遺物(杯身)



76



89



77



90



78



79



93

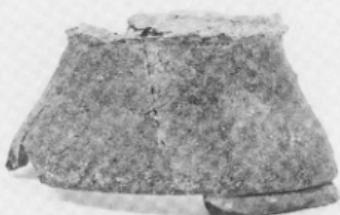
出土遺物(杯身·高杯蓋·有蓋高杯)



94



99



95



102



96



103

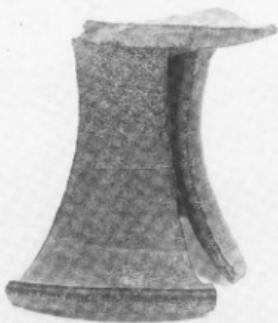


97



107

出土遺物(有蓋高杯·無蓋高杯·腳台)



105



105



113



119



117



124

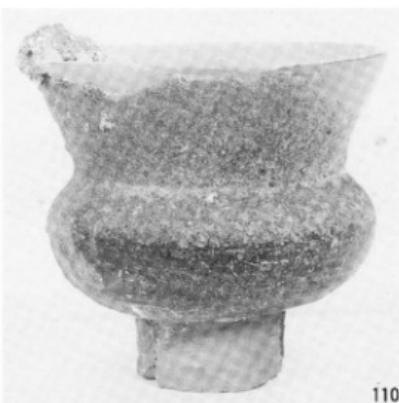
出土遺物(無蓋高杯)



125



118



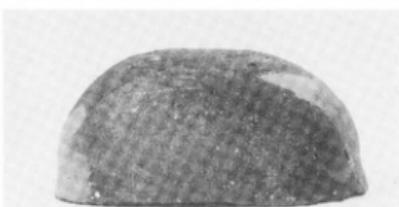
110



127

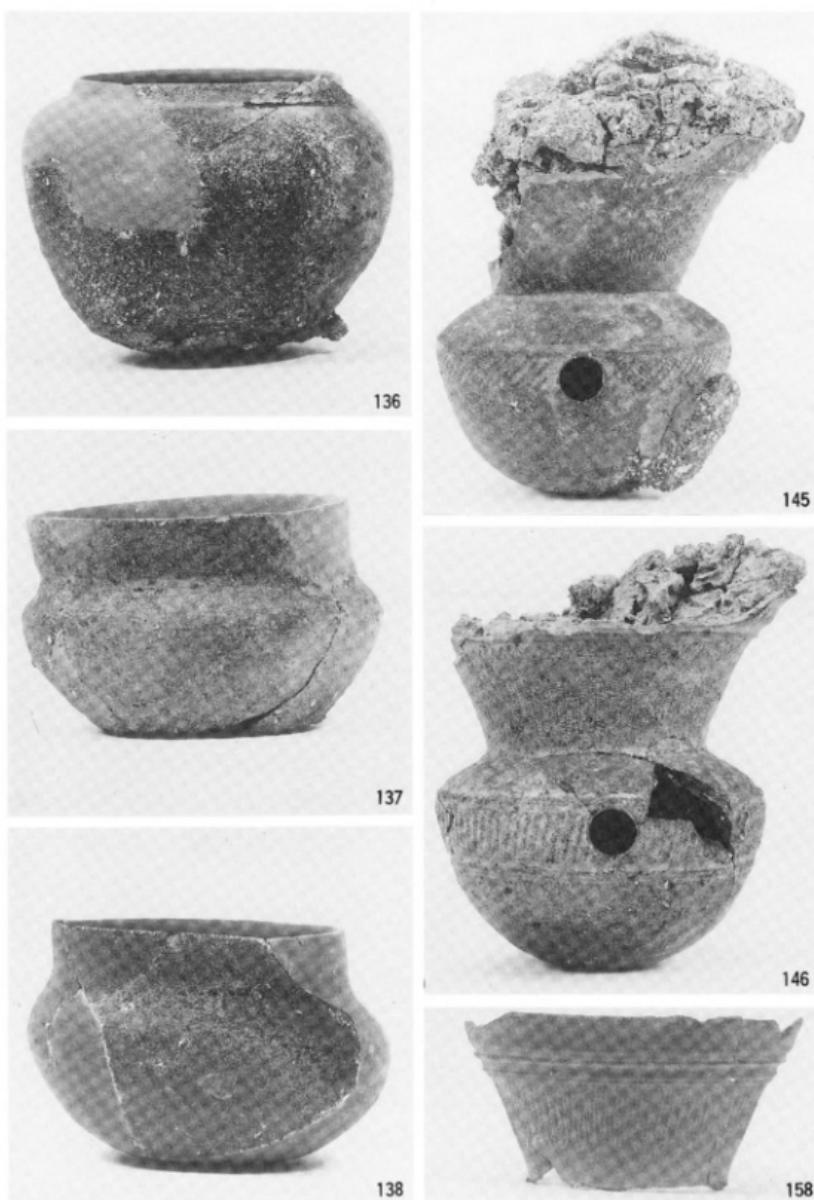


128



130

出土遺物(無蓋高杯・小型台付壺・壺蓋)



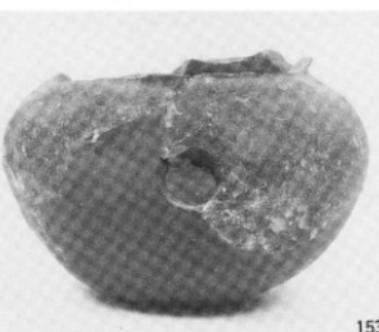
出土遺物(小型短頸壺・魁・直口壺)



147



155



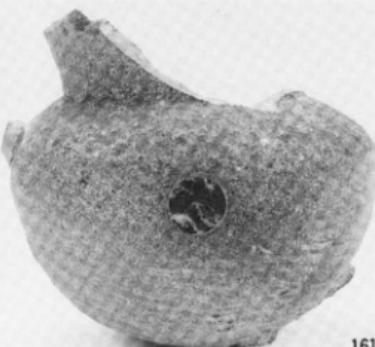
153



156



151



161

出土遺物(瓦)



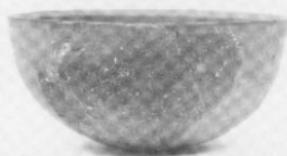
162



167



172



177



179



176



181

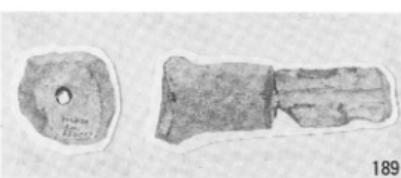
出土遺物(短頸壺·有蓋壺·直口壺·鉢)



出土遺物(広口壺)



187



189



196



194

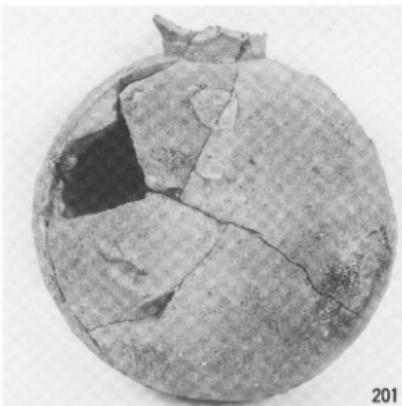


198

出土遺物(広口壺・注口土器・器台)



199



201



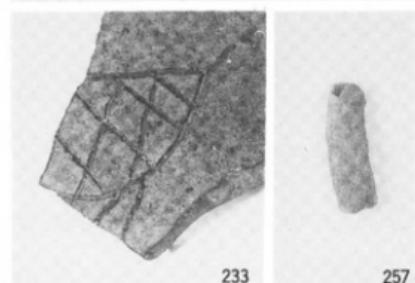
204



200



212



233

出土遺物(器台・鉢・甕(四足を持つ動物)・土錘・提瓶・甕)

257



223



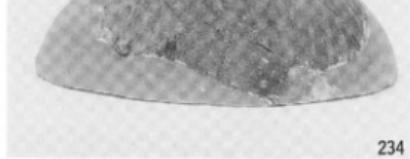
213



234



240



234



243

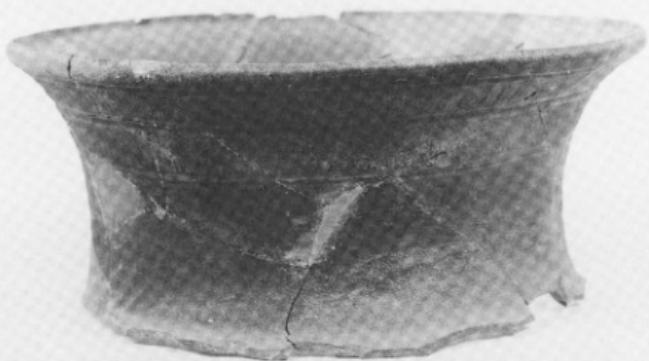


238

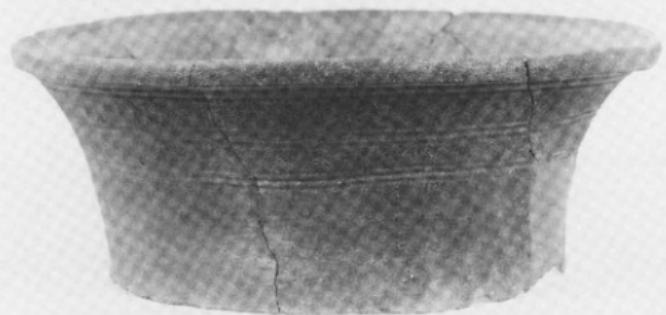


244

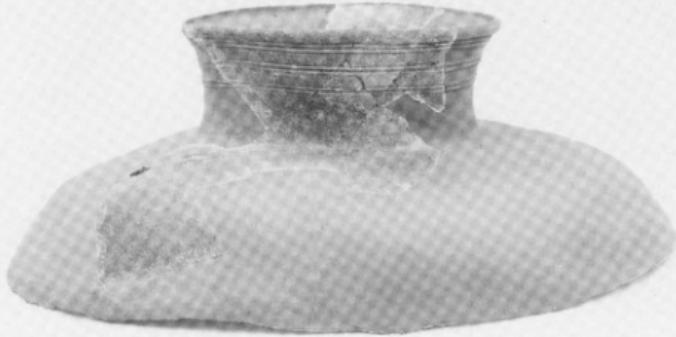
出土遺物(甕)



245



249



252

出土遺物(甕)

富田林市埋蔵文化財調査報告15

発行年月日 1987年3月31日

編集・発行 富田林市教育委員会

住 所 富田林市常盤町1番1号

印 刷 橋本印刷株式会社

1987.300

